

白河街区跡・吉田上大路町遺跡

白河街区跡・吉田上大路町遺跡

2012年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

白河街区跡・吉田上大路町遺跡

2012年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永く、そして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるか昔の、貴重な文化財が今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、近衛中学校プール改築工事に伴う白河街区跡・吉田上大路町遺跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

平成 24 年 1 月

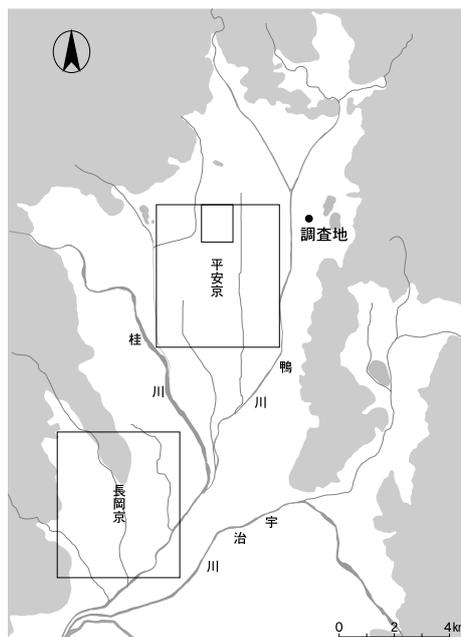
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 白河街区跡・吉田上大路町遺跡
- 2 調査所在地 京都市左京区吉田近衛町（市立近衛中学校内）
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2011年8月31日～2011年11月11日
- 5 調査面積 333 m²
- 6 調査担当者 近藤奈央
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1:2,500）「御所」「吉田」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 各調査区で通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 近藤奈央
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。
- 15 協力者 調査にあたっては、下記の方から様々なご教示をいただいた。
伊藤淳史、河角龍典、高正龍、狭川真一、佐藤重聖、鈴木久男、千葉 豊、富井 眞、西山良平（敬称略 50音順）

（調査地点図）



目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
3. 周辺の調査	5
4. 遺 構	13
(1) 遺構の概要	13
(2) 1 区の遺構	13
1) 基本層序	13
2) 中世第 1 面の遺構	15
3) 中世第 2 面の遺構	23
4) 下層遺構面の遺構	27
(3) 2 区の遺構	27
1) 基本層序	27
2) 中世遺構面の遺構	27
5. 遺 物	31
(1) 遺物の概要	31
(2) 土器類	32
1) 縄文時代から古墳時代の土器	32
2) 鎌倉時代から室町時代の土器	33
(3) 瓦 類	42
(4) 土製品	43
(5) ガラス製品	43
(6) 石製品	44
(7) 金属製品	45
(8) 微細遺物	46
6. ま と め	48

図 版 目 次

図版 1	遺構	1	1 区中世第 1 面全景（北から）
		2	1 区中世第 1 面検出状況（北から）
		3	1 区集石 89～92 断面（北東から）
図版 2	遺構	1	1 区集石 89・90 下層・92 礫群検出状況（北から）
		2	1 区集石 90 土器出土状況（北西から）
		3	1 区集石 109 断面（南から）
		4	1 区集石 116 断面（東から）
		5	1 区集石 148 断面（南から）
		6	1 区土坑 120 土器出土状況（南西から）
図版 3	遺構	1	1 区中世第 2 面全景（北から）
		2	1 区下層遺構面全景（北から）
図版 4	遺構	1	1 区東壁北半断面（北西から）
		2	2 区中世面全景（東から）
図版 5	遺物		縄文土器
図版 6	遺物		1 区集石 91 出土遺物
図版 7	遺物		1 区集石 90 出土土器
図版 8	遺物		2 区土坑 33 出土土器
図版 9	遺物	1	石製品
		2	土製品・金属製品

挿 図 目 次

図 1	調査位置図（1：2,500）	1
図 2	調査前風景（南東から）	2
図 3	作業風景（北東から）	2
図 4	調査区配置図（1：300）	2
図 5	周辺の調査位置図（1：3,000）	6
図 6	1 区東壁断面図（1：100）	14
図 7	1 区北壁断面図（1：100）	15
図 8	1 区中世第 1 面平面図（1：150）	17
図 9	1 区集石 89～92 礫群検出状況平面および集石 90・92 断面図（1：50）	18

図 10	1区集石 89～92、土坑 192・193 断面図 (1:60)	19
図 11	1区集石 93・109・114・116・148 実測図 (1:40)	21
図 12	1区柱列 1 実測図 (1:40)	22
図 13	1区中世第 2 面平面図 (1:150)	24
図 14	1区土坑 120 実測図 (1:20)、土坑 254 実測図 (1:40)	25
図 15	1区下層遺構面平面図 (1:150)	26
図 16	2区東壁断面図 (1:50)	28
図 17	2区北壁断面図 (1:50)	29
図 18	2区中世遺構面平面図 (1:50)	30
図 19	縄文時代から古墳時代出土土器実測図 (1:3、17・18 のみ 1:4)	33
図 20	1区集石 89・91・92 出土遺物実測図 (1:4)	34
図 21	1区集石 90 出土遺物実測図 1 (1:4、136 のみ 1:2)	36
図 22	1区集石 90 出土遺物実測図 2 (1:4)	37
図 23	1区溝 166、土坑 120・143・193 出土遺物実測図 (1:4)	39
図 24	1区集石 88・93 出土土器実測図 (1:4)	40
図 25	2区土坑 33 出土遺物実測図 (1:4)	41
図 26	2区土坑 59 出土土器実測図 (1:4)	42
図 27	出土瓦拓影・実測図 (1:4)	43
図 28	出土土製品 (1:2)・ガラス製品 (1:1)・石製品 (1:4) 実測図	44
図 29	出土銭貨拓影、鉄釘・鉄滓実測図 (1:2、278 のみ 1:4)	45
図 30	出土骨写真 1 (S=2 倍)	47
図 31	出土骨写真 2 (S=2 倍)	47
図 32	出土骨写真 3 (S=2 倍)	47
図 33	1区中世面変遷図 (1:300)	49

表 目 次

表 1	周辺の調査一覧表	7
表 2	遺構概要表	13
表 3	遺物概要表	31
表 4	出土金属製品集計一覧表	45
表 5	1区集石 90 出土層位別鉄釘集計一覧表	46
表 6	1区集石 90 出土層位別骨種一覧表	46

付 表 目 次

付表1	出土土器類観察表	51
付表2	出土瓦類観察表	58
付表3	出土土製品・ガラス製品・石製品・金属製品観察表	59

白河街区跡・吉田上大路町遺跡

1. 調査経過

調査地は、京都市左京区吉田近衛町の京都市立近衛中学校内に所在する。既往の調査では、当地は弥生時代から近世の集落跡である吉田上大路町遺跡の南端に位置し、平安時代後期の白河街区跡北端にも該当する。この度、校内西端のプール改築工事に伴って、旧プール北側にポンプなどの設備室、同東側に地下埋設管や更衣室を造ることが計画されたため、工事に先立ち京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」とする。）による試掘調査が行われた。その結果、中世の包含層や遺構が良好に遺存していることが判明した。また、先史時代から中世にわたる複合遺跡として、多くの成果が得られると予想できることから発掘調査への移行となり、当研究所が調査を担当することとなった。

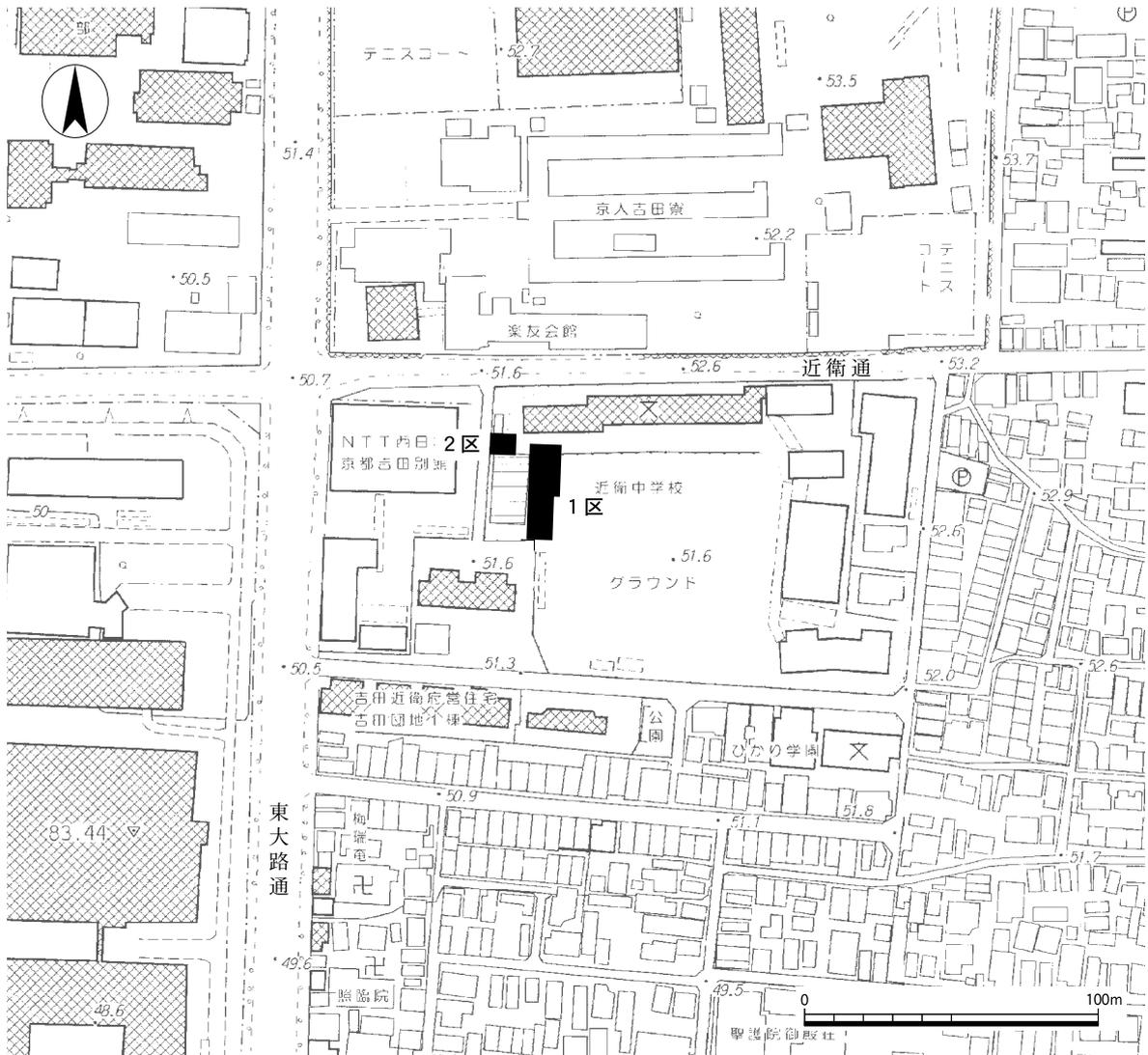


図1 調査位置図（1：2,500）



図2 調査前風景（南東から）



図3 作業風景（北東から）

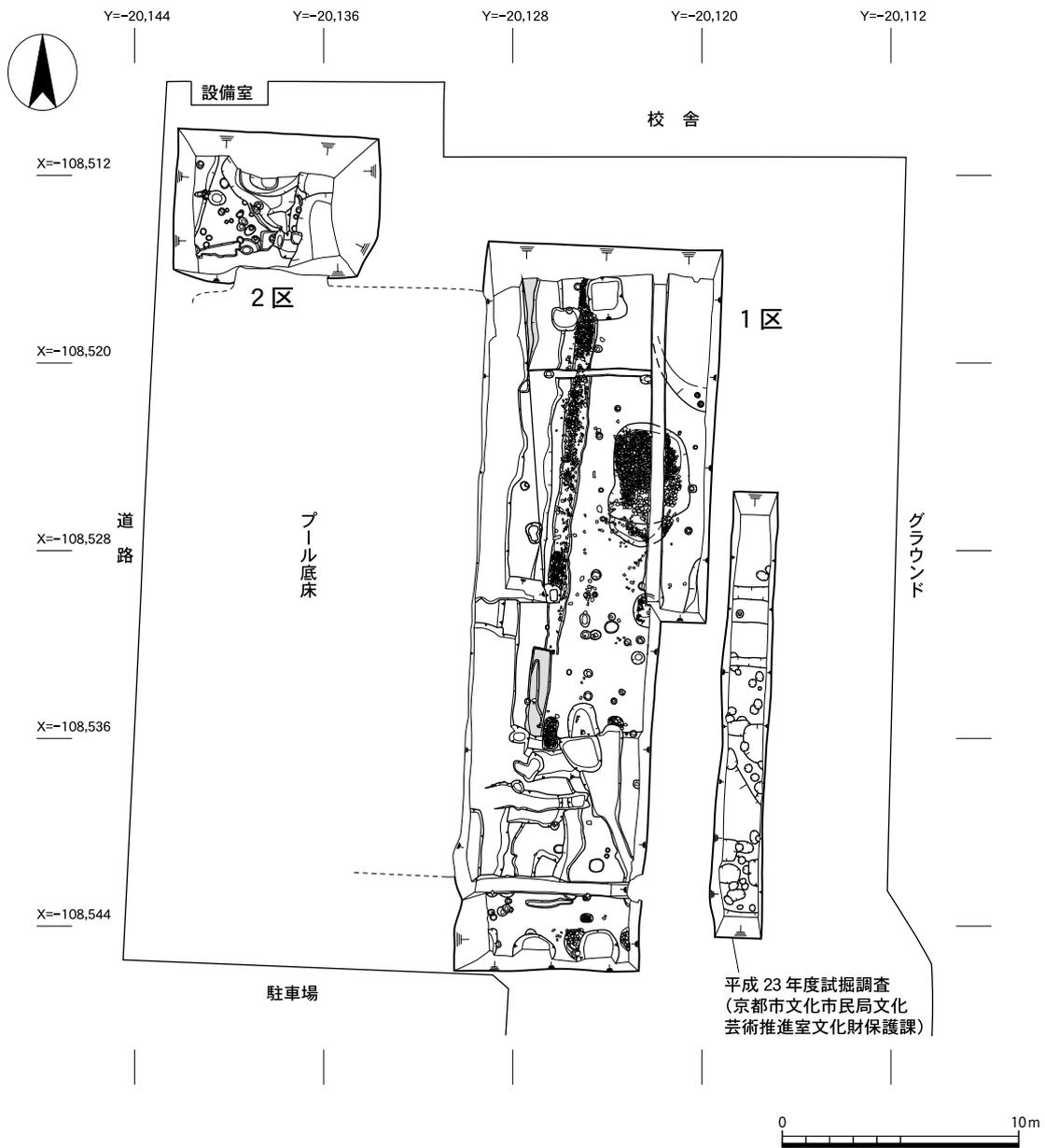


図4 調査区配置図（1：300）

調査区は旧プールのコンクリート底床東側の更衣室・地下埋設管予定地（1区）および同北側に造られるポンプ室予定地（2区）の2箇所である。1区は南北約31m、東西約10mで南東隅を一部欠く鉤形、2区は南北約6.5m、東西約8mの調査区を設定した。文化財保護課の承認を得たのち、9月5日から重機で中世包含層上面まで掘削を行い、中世遺構の調査を開始した。その後、下層遺構の調査を行うために、1区東半において弥生時代以降に堆積した褐色砂質土層を掘り下げたところ、下に堆積していた炭を含む褐色粘質土層から、縄文時代晩期末の土器が出土した。そのため、下層遺構面として遺物の採取および記録作成を行い、11月11日に調査を終了した。

2. 位置と環境

調査地は、吉田山南西に位置し、吉田山東麓を流れる白川と、京都盆地の東を流れる鴨川との中間点に立地する。北および西には、京都大学関連の施設が立ち並ぶ一方、東から南にかけての地域には、住宅地や寺院などが広がっている。

調査地を含む近衛中学校内の地形は、校舎が建っている北側が南にあるグラウンドより約0.5m高く、北側で標高52.4m、グラウンド側で標高51.9mとなっている。この学校内の段差は学校の創建やその後の整備時に、北側にある近衛通に合わせて盛土が行われたためである。また、中学校から約50m西の位置に南北方向の東大路通があるが、この道路と東の宅地側にも段差が約0.8mある。調査地周辺の地形は、白川および北東から鴨川に流れ込む高野川によって形成された扇状地に起因し、北東から南西に向かって緩やかに傾斜する一連の自然地形といえる。

前述したように、今回の調査地は白河街区の一画に当たり、福勝院跡に推定されている場所である。鴨川東岸に立地する白河街区の開発は、現在の岡崎一帯に造られた六勝寺の創建に始まる。六勝寺の筆頭寺院である法勝寺は、白河天皇によって1077年に造立された。その後、尊勝寺（堀河天皇、1102年）、最勝寺（鳥羽天皇、1118年）、円勝寺（待賢門院璋子、1128年）、成勝寺（崇徳天皇、1139年）、延勝寺（近衛天皇、1149年）の五ヶ寺が、歴代天皇やその皇后によって相次いで建立された。それに伴い、寺院の周辺地域には、院御所や公家の邸宅、皇后や女御による寺院が造られ、街路の整備と延伸が始まり、周辺の宅地化が促進された。北域に建てられた寺院や神社には、高陽院泰子の御願寺である福勝院や万里小路家の菩提寺である浄蓮花院、日吉神社や熊野神社などがある。

中心的な街路としては、法勝寺西大門へ通じる東西方向の二条大路末があり、街区内の区画の基準であったとされる。南北方向の街路も、法勝寺西に面した岡崎道を基準としたとみられるが、白河街区の発展に伴い、広い土地利用が可能であった北方へと拡大していく中で、法勝寺と鴨川の間位置する今朱雀が中心的な街路となって延伸されたと考えられる。白河街区の条坊は、真北から東へ0度30～50分振れるとされ、大路や小路幅、一町の規模など平安京の条坊を東へ拡張したかたちでの、復元が行われている¹⁾。

調査地北東の京都大学教養学部敷地は旧字名を「吉田一町が辻」と呼ばれており、この名称は

福勝院が一町の土地を有していたことに由来するという²⁾。福勝院とは、仁平元年（1151）に鳥羽法皇の皇后であった高陽院泰子の御願寺として建てられた寺院であり、高陽院白河御堂とも呼ばれていた³⁾。同年6月13日に鳥羽法皇の臨幸のもと、落慶法要が行われた。高陽院は、久寿二年（1155）12月16日、土御門第にて没し、翌17日に福勝院護摩堂板敷の下に埋葬されたとされる。高陽院の葬儀に際して、講説や六堂の御読経、護摩供養が行われた。承安元年（1171）に高陽院の十七回忌法要が行われ、その後13世紀後葉までは近衛家の管領下にあつて、修理が行われていたようである⁴⁾。

福勝院の伽藍については、『百鍊抄』仁平三年（1153）に三重塔の建設が始まったこと⁵⁾、また『台記』の高陽院の葬儀には護摩壇があつたことが書かれており⁶⁾、『兵範記』仁平二年（1152）八月二十八日条には、法皇の五十の御算が行われた時の記述や九体阿弥陀堂の指図が掲載されている⁷⁾。これらの史料から、阿弥陀堂、護摩堂、三重塔、寢殿、鐘楼などを配置した伽藍が復元推定されている⁸⁾。

位置についての記述は、『兵範記』久寿二年十二月十七日条の高陽院崩御後、福勝院に運ばれるまでの道程と近衛大路末に面した南西の門から寺院の中へ入つたという記述があり、福勝院が近衛大路末の北に面して建てられていたことを示唆する。『京都坊目誌』では第一中学校敷地内にあつたという説を掲載している⁹⁾。この第一中学校は府立第一中学校のことで、現在の地図に置き換えると、近衛中学校の建つ場所がその旧校地に相当する。近衛大路末は現在の近衛通より南に位置していたという考え方もあり、まさに今回の調査地が推定地ということになる。しかし、近衛大路末東西方向のどのあたりに位置していたのかという記述もなく、未だに跡地は確定していない。

註

- 1) 『六勝寺と白河御所』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年
浜崎一志「白河の条坊と地割」『京都大学埋蔵文化財調査報告』IV 京都大学埋蔵文化財研究センター 1991年
上村和直「平安京と白河」『条里制・古代都市研究』通巻第15号 条里制・古代都市研究会 1999年
上記文献などを参考とした。
- 2) 『京都坊目誌』上巻之廿七（吉田篇）（『新修 京都叢書』第十九巻）臨川書店 1968年
- 3) 『史料 京都の歴史8 左京区』平凡社 1985年
『京都市の地名』平凡社 1979年
『平安時代史事典』角川書店 1994年
- 4) 吉江崇「中世吉田地域の景観復元」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2001年度』京都大学埋蔵文化財センター 2006年
- 5) 『新訂増補 國史大系 百鍊抄』吉川弘文館 1979年
- 6) 『増補 史料大成 台記二』臨川書店 1965年
- 7) 『増補 史料大成 兵範記一』臨川書店 1965年
- 8) 杉山信三「白河御堂」『院家建築の研究』吉川弘文館 1981年
- 9) 註2に同じ。

3. 周辺の調査

京都大学総合人間学部構内や同医学部構内、同病院構内、近衛中学校南側の住宅地などで発掘・立会調査が行われ、縄文時代から江戸時代の遺構や遺物が多数検出されている（図5・表1、以下省略）。今回の調査成果を考えるにあたり、周辺調査における室町時代までの遺跡の概要を簡単にまとめておきたい。

縄文時代の遺構や遺物は、京都大学構内全域およびその周辺で発見されている。今回の調査地近辺では、4-1・20・27・35・41・44・49地点で、主に北東から南西方向の自然流路が検出され、縄文時代前期から晩期にいたる各時期の土器や石器が出土している。20地点では、高野川系流路によって形成された西へ下がる崖面が縄文時代後期以前には存在し、後期以降にこの崖面が土砂で埋まっていったことが判明した。聖護院門跡西の南北道路南半では（55地点）、縄文時代後期の土坑が検出されており、吉田山丘陵から南西方向に舌状の微高地が張り出していたとみられる。20地点の崖面形成後の遺物堆積状況や、41地点の自然流路肩部からほとんど磨滅していない遺物が出土したことから、自然堤防上や微高地上に縄文人の活動範囲があったと指摘されており、縄文時代後期の集落は55地点付近に想定されている¹⁾。49地点の洪水堆積からは、縄文時代後期に大規模な氾濫があったことが判明し、弥生時代の水田成立に繋がる土地条件が整う過程が確認された。縄文時代晩期末の突帯文土器は、4-2・6・16・20・27・48・49地点で出土し、土器量に粗密はあるが、ほとんどが北東から南西に向かって流れていた自然流路に伴うものである。

弥生時代の遺構については、縄文時代の遺構が検出された微高地である京都大学総合人間学部の構内北東に集中している。特に、弥生時代前期の遺構が多く、8地点では土器棺墓、9地点では土坑、12・14地点では溝、16地点では水田と水路が検出され、弥生時代中期の遺構としては20地点で方形周溝墓が検出されている。住居跡は確実なものは検出されていないが、生業活動の管理に適した微高地である6・9地点周辺が居住域として考えられている。16地点で確認された水田は、完成度の高い小区画水田造成技術を伴っているとされ、一緒に検出された水路や14地点の人工水路などは、自然地形を巧みに利用していることが窺える資料である。これらの調査成果から、水稻農耕の受容背景がどのようなものであったのかということが、今後の課題として提示されている。また、弥生時代前期末に吉田地域を覆ったとされる洪水層である黄色砂は、この周辺一帯における時代を特定する際の鍵層となっている。16地点の水田もこの黄色砂にほぼ一瞬の内に覆われて廃絶したと考えられており、6・20地点で見つかった崖面（東から西へ高低差は最大で2m）もこの洪水堆積で完全に平坦化したと想定されている。なお、水田の上限は、微高地上で縄文時代晩期末の船橋式・長原式土器が多量に出土し、人々の活動が活発化した様子がうかがえることから、同時期である可能性が示唆されている。この他、崖面下に位置する36地点では弥生時代前期から中期の溝、44地点では弥生時代前期から後期の流路が検出されている。

古墳時代の遺物は、東大路より西側では遺物が散見される程度で、遺構は確認されていない。

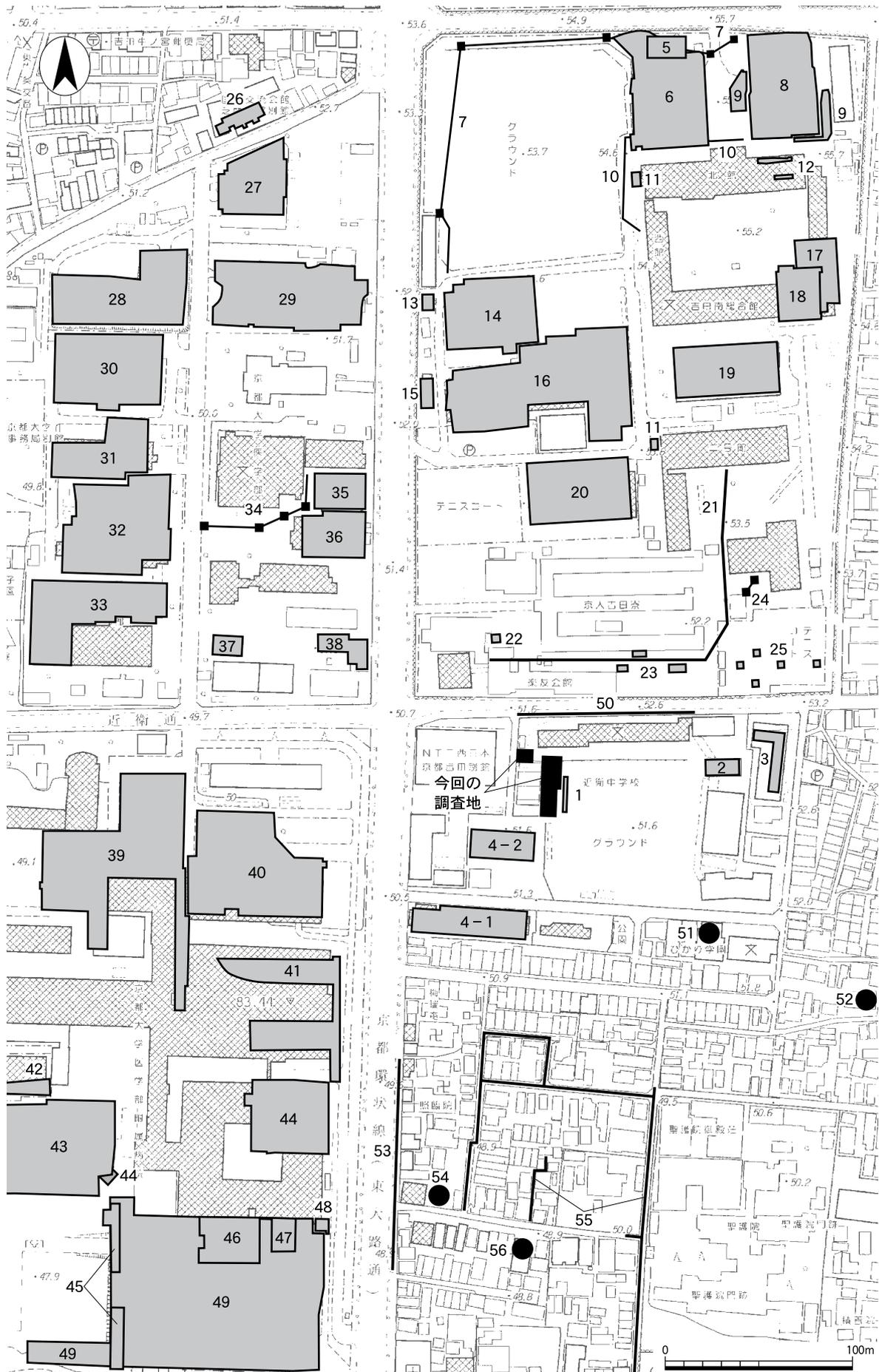


図5 周辺の調査位置図 (1 : 3,000)

表1 周辺の調査一覧表

番号	遺跡名	調査方法	年度	主な遺構	主な遺物	中世面標高(m)	縄文面標高(m)	備考	文献番号
1	白河街区跡・吉田上大路町遺跡	試掘	H23	中世の柱穴・溝・土坑	中世の土器類	地表下0.8	—	遺構未掘削のため詳細な時期不明、これを受けて今回の発掘調査に移行	35
2	福勝院跡	発掘	S56	鎌倉の溝・柱穴、室町前期の溝・土坑・井戸	縄文土器、平安後期～室町の土器類、鉄製品	51.1	50.1	平安後期の遺構未検出、鎌倉～室町の遺構は福勝院に関係か？	28
3	吉田近衛町遺跡	発掘	S52	鎌倉～室町前期柱穴・溝・土坑	平安の土器類・鎌倉～室町前期の土器類・瓦類・石製品・鉄製品	51.6	—	平安後期の遺構未検出だが、遺物はGL-5mまで出土、鎌倉の瓦多量出土、室町の廃棄土坑も合わせて福勝院に関係か？	27
4	吉田近衛町遺跡	発掘	S62	縄文～弥生の自然流路、鎌倉の建物、鎌倉後期～室町前期の柵・井戸・集石・甕・石・土器溜	縄文後・晩期土器・石器・土製品、弥生前期土器・石器、鎌倉～室町前期の土器類・瓦類・石製品・鉄製品	1区 51.1 2区 50.8 13～14世紀初	1・2区 49.8	12世紀以前の遺構未検出、13世紀の掘立柱建物跡は福勝院殿舎の一部か？福勝院が廃絶したとみられる14世紀には墓域化	26
5	吉田二本松町遺跡	試掘	S51	奈良？の溝	縄文後期土器、奈良の須恵器	—	地表下0.8	教養部AS23区(35)	1
6	吉田二本松町遺跡	発掘	H13	奈良の掘立柱建物、平安中～後の溝・土坑、平安後の経塚、鎌倉～室町の溝・柵	縄文後・晩期土器・石器、弥生前期土器・石器、奈良～室町の土器類、平安後の経筒・ガラス玉、平安～鎌倉の瓦類	54.8	53.6	吉田南AR24区(288)、突帯文(長原)出土、鍵層となる黄色砂は調査区西で厚く、東に向かって薄くなり、中央付近でなくなる、弥生前期末には地形変換点に位置する、1136～52年の紀年銘のある青銅製四段積上式の「九州型」経筒出土、九州以外では4例目となる、中世の大溝は吉田社殿関係？	21
7	吉田二本松町遺跡	立会	H3	鎌倉後期の土坑、中世の井戸	鎌倉後期の土器類	55.1～56.3	—	教養部AR21区(202)、中世前半の集落跡か？	14
8	吉田上大路町遺跡	発掘	H7	弥生の土器棺墓、奈良・平安中～後の溝・土坑、鎌倉の溝、室町の井戸・溝・土坑	縄文前・後・晩期土器、弥生前期土器、古墳の土器、奈良～室町の土器類、平安中～鎌倉の瓦類、室町の建築物金具	55.4～55.9	—	総合人間学部AR25区(238)、鍵層の黄色砂がまったく存在しない、14世紀後～15世紀前を中心に濠状溝や段差の造成など土地に改変が実施された	17
9	吉田上大路町遺跡	発掘	H8	弥生時代の土坑、奈良の土坑、平安前期・鎌倉の溝、室町の土坑・集石土坑、中世の掘立柱建物	縄文中・後土器、弥生前期土器、奈良・平安中～室町の土器類・瓦類・銭貨	55.4	—	総合人間学部AR24区(249)、弥生の周辺に居住域を想定、鎌倉時代の日常雑記類の少なさと銭貨が多く入った落ち込み、瓦類の出土量の多さから宗教的な機能を果たしていた空間、建物もそれに関連と想定	18
10	吉田上大路町遺跡	立会	H9	鎌倉の瓦溜	弥生前期土器、平安後～鎌倉の土器類、平安中～鎌倉の瓦類	53.0～55.4	—	総合人間学部AR23区(254)、各時代の遺物包含層が良好に残存、黄色砂の広がり、それに覆われた弥生前期の地形環境を部分的に確認	18
11	吉田上大路町遺跡	試掘	S52	平安末～鎌倉前の溝	弥生前期土器、平安後期の瓦、平安末～鎌倉の土器類	TP1 鎌倉包含層上面 54.7 TP2 鎌倉前期 52.9	—	教養部AQ23・AN23区(48)、TP2(南側)で検出した東西溝(12世紀中葉～13世紀前葉)は福勝院の北限の溝か？	3
12	吉田上大路町遺跡	立会	H14	弥生の溝、平安前・中・室町後の溝	弥生前期土器、平安～室町後の土器類・瓦類	55.1～55.3	—	吉田南AR25区(302)、8[AR25区(238)]地点検出の溝(平安・室町)の延長を確認	22
13	吉田二本松町遺跡	発掘	H17	古墳の周溝、奈良・平安の溝・土坑、鎌倉の土坑・集石	縄文後・晩期土器、古墳～奈良の土器、奈良の鞆羽口、平安～鎌倉の土器類	52.9	—	吉田南AP21区(302)、「吉田二本松7号墳」、奈良の須恵器や製塩土器は14・16地点の8世紀半ばころの遺跡の広がりが想定	24
14	吉田上大路町遺跡	発掘	S56	弥生前の水路と溝、弥生中の溝、古墳の方墳・土壇墓、奈良の掘立柱建物、平安中の梵鐘鑄造遺構、鎌倉～室町前の建物・門・溝・堀・墓	縄文後・晩期土器、弥生前期土器、古墳～室町前の土器類、平安中の鑄型・溶解炉	53.1 14世紀～	51.9～52.6 弥生前	教養部AP22区(111)、溝と門に挟まれた区画は道路で、溝より東側の区画は墓域、墓域内は溝によって分割、須恵器甕や褐釉陶器壺などの蔵骨器を持つ土坑墓、木棺土壇墓などがあり、上面に集石をもつものもある、弥生の人工水路は黄砂堆積前に水田が営まれた可能性が考えられる、方墳は5世紀末～6世紀初めの短期間に群を形成しながら造成	7
15	吉田上大路町遺跡	発掘	S55	鎌倉の井戸・土坑、室町前の土坑墓	鎌倉～室町前の土器類、鎌倉の石製品	52.5	—	教養部AO21区(91)、本部構内AT27出土土壇墓SK3と構造・規模が類似(14世紀中・後葉)	6

番号	遺跡名	調査方法	年度	主な遺構	主な遺物	中世面標高(m)	縄文面標高(m)	備考	文献番号
16	吉田上大路町遺跡	発掘	H5	弥生前の水田・流路、弥生中の溝、古墳の方墳、奈良の掘立柱建物・井戸・土坑、平安中の梵鐘造遺構・井戸、平安後～室町中の井戸・溝	縄文中末～晚期土器、弥生前・中期土器、古墳の形象埴輪、奈良～室町の土器類、平安中の鉄製品・炉壁	52.9	51.8	総合人間学部AO22区(220)、突帯土器出土、完成度の高い小区画水田造成技術(地形環境を巧みに利用)、「吉田二本松古墳群」6基目(5世紀末～6世紀初)、形象埴輪片少量出土、14地点と合わせて8世紀中頃の活動拠点、中世の南北方向の溝を境に東西で性格が異なる	16
17	吉田上大路町遺跡	発掘	S61	中世の溝	中世の土器類	54.1	—	教養部AP25区(167)、中世の東西溝は地割溝か？近世まで踏襲？	11
18	吉田上大路町遺跡	発掘	S50	—	中世の土器類	—	—	教養部(14)	2
19	吉田上大路町遺跡	採集	S47	—	縄文土器	—	—	教養部(7)	2
20	吉田上大路町遺跡	発掘	H10	縄文の流路、弥生中の方形周溝墓・土坑、平安末～鎌倉の溝・井戸・配石・土坑、鎌倉～室町後の溝・土坑・集石・石室	縄文早・中～晚期土器、弥生前・中期土器、古墳の埴輪、古代～室町の土器類・瓦類、平安の石帯(巡方)、中世の石製品・鉄製品	52.4	51.4	総合人間学部AN22区(261)、高野川系流路の攻撃によって形成された西へ下がる崖面は縄文後期以前には形成され、後期以降に埋積が進み、弥生前末の洪水堆積で最終的に覆われ平坦化、弥生前期の遺跡は縁辺部とみられる構内東半の微高地上に居住域、微高地から低地への傾斜変換点付近を墓域、構内西半から医学部構内の低地部を水田などの生業域とを使い分けていたと想定	20
21	吉田上大路町遺跡	立会	S51	平安末～鎌倉の溝、平安の瓦溜め	弥生前～中期土器、平安の瓦、平安末～鎌倉の土器類、室町の宝篋印塔	地表下0.5～1.5	—	教養部AL24区(15)	1
22	吉田上大路町遺跡	立会	S55	鎌倉後～室町前の火葬墓・石列	鎌倉後～室町前の土器類	地表下0.86	—	教養部AM22区(93)	5
23	吉田上大路町遺跡	試掘	S61	室町後の溝	室町後の土器類	51.8	—	教養部AL23区(170)	11
24	吉田上大路町遺跡	試掘	S54	平安前・中の包含層	弥生前中期土器、平安前・中・室町中の土器類	52.6	—	教養部AM24区(69)	4
25	吉田上大路町遺跡	立会	H10	弥生～中世包含層	弥生前中期土器、土器類、陶磁器	—	—	総合人間学部AL24区(264)	18
26	吉田泉殿町遺跡	発掘	S62	鎌倉の石組・瓦溜、平安末～室町の土坑、中世の溝	平安末～室町前の土器類	51.7	—	牛ノ宮町AR19区(190)、浄蓮華院(1199年建立)の荒廃と退転を示す遺構か？	13
27	吉田桶町遺跡	発掘	H14	縄文の自然流路、平安中の土坑、平安末～鎌倉の道路・井戸・土坑・集石、室町の土壇墓・土坑	縄文前・後・晚期土器、弥生前中期土器、平安中～室町の土器類・石製品	50.8～51.2	50.4	医学部AR19区(298)、弥生時代前期～中期に滞水域が形成、比較的安定した状況でシルト堆積が進行、12世紀後葉以降に土地利用が活発化、12世紀末～13世紀初頭の白川道に接続していたとみられる道路跡、13世紀代の白川道を検出、14世紀には北へ移動	23
28	吉田泉殿町遺跡	発掘	H15	鎌倉～室町の道路・井戸・溝・集石・土器溜・野壺群	縄文中～晚期土器、弥生中～古墳の土器類、鎌倉～室町の土器類・石製品	49.6～50.1	—	医学部AP18区(308)、12世紀末遺構に開発開始、京一近江間の基幹道である白川道から分岐する間道が整備される中で、中世前半期に周囲に集石・土器溜が集積され、後半期には大規模な溝状の区画が構築されるという変遷が明らかになった	23
29	吉田泉殿町遺跡	発掘	S54	平安後～鎌倉の井戸・土坑、鎌倉～室町の溝・井戸・土器溜	旧石器、縄文土器、弥生土器、古墳の須恵器、平安後～室町前の土器類、平安の瓦類	51.6	51.6より下層	医学部AP19区(74)、医学部AO18地区ではなかった平安後期の土坑があることから、地点による遺構形成時期の考察の必要性を指摘	5
30	吉田泉殿町遺跡	発掘	H11	鎌倉～室町の井戸・土坑・土器溜・路面	縄文後期・弥生前中期・古墳の土器類、鎌倉～室町の土器類、平安～鎌倉の瓦類	49.6	—	医学部AO17区(270)、13世紀後半から14世紀前半にかけて活動が盛期を迎える、多量の焼土塊と鉄滓・石鍋・砥石・鉄製品の出土頻度→铸造や鍛冶に関連する作業空間を想定	19
31	吉田泉殿町遺跡	発掘	S52	平安末～鎌倉の柵・井戸・溝・土器溜、鎌倉中～後の建物・柵・井戸、室町前の建物・溝・土壇状遺構	平安末～室町中の土器類・瓦類	49.1	—	医学部AO18区(41)、鎌倉後期以前は真北から東へ約8°振り、室町前以降は真北になる、川東の開発に関する基礎資料	3
32	吉田泉殿町遺跡	発掘	S59	平安中の河川、平安後～鎌倉の井戸・溝、鎌倉～室町前の土坑、鎌倉の梵鐘造遺構	平安中～室町前の土器類、鎌倉の鋳型	49.4～50.0	—	医学部AN18区(143)、旧白川の一支流、11世紀頃は一帯がしばしば河川の氾濫する不安定な土地、12世紀後～14世紀前は勸修寺流吉田氏の邸宅、園池、菩提寺(浄蓮華院)、14世紀前から土取り穴とみられる不定形土坑、15世紀にはなくなることから土地所有や権利関係に大きな変化？	10

番号	遺跡名	調査方法	年度	主な遺構	主な遺物	中世面標高(m)	縄文面標高(m)	備考	文献番号
33	吉田泉殿町遺跡	発掘	H4	鎌倉の建物・井戸・土器溜・土坑・溝、室町後期の溝	縄文中期土器・晩期石剣？、弥生中期土器、古墳の須恵器、古代の土器類、鎌倉の土器類・木製品・鉄滓・鞆羽口、室町後の土器類	49	—	医学部AM17区(207)、13世紀中頃までに生活居住空間、勸修寺流の邸宅の一角か？、14世紀後葉以降は生活関連遺構が少なくなる、中世後半(15世紀以降)の耕地開発を示す棚田跡	15
34	吉田泉殿町遺跡	立会	S53	平安後の井戸	弥生後期土器、平安後～室町の土器類	—	—	医学部AN19区(64)	3・4
35	吉田泉殿町遺跡	発掘	H8	縄文の自然流路、中世～近世の土坑	縄文前～後土器、弥生前・中土器、鎌倉～室町の土器類・瓦類	50.6	49.2～49.5	医学部AN20区(248)、縄文弥生の土器が使用された集落の中心地は流路の方向からみて北東にあたることとみられる、13世紀後～14世紀前の不定形な土取り穴が調査区全面に広がる、黄灰色シルトや青灰色シルトが採取の対象、大きさや形態に統一した規格があったとは考えられない、14世紀後～17世紀初の遺物も包含するのでこの時期も土取りを行っている	17
36	吉田泉殿町遺跡	発掘	S58	弥生の溝、鎌倉後～室町前の井戸・土坑	弥生前～中土器、古墳・奈良の須恵器、鎌倉～室町の土器類	50.6 14世紀中頃	50.4	医学部AN20区(134)、弥生の溝はAP22区検出の水路につながるか？、黄灰色シルトの採取は14世紀前葉～中葉、検出遺構は文献から勸修寺流吉田氏の邸宅や園池、春日若宮の遺構と考えられる	8
37	吉田泉殿町遺跡	立会	S58	室町前の土坑	室町前の土器類・石製品	48.5 14世紀中頃	—	医学部AM19区(139)	8
38	吉田泉殿町遺跡	発掘	S61	江戸前の土坑	平安後～鎌倉の土器類、平安後のとりべ・鋳型(密教法具六器の外型)	—	—	医学部AL20区(169)、福勝院九体阿弥陀堂に大壇があり、六器が供えられていたことから、福勝院の注文で作られた密教法具の鋳型ではないか？	12
39	聖護院川原町遺跡	発掘	S60	古代の井戸、平安後～室町の井戸・溝	縄文後土器、古代の土器、中世の土器類	48.4	—	病院AJ18区(154)、調査区西半を北から南に高野川系の流路、旧流路上面で7世紀後半から8世紀初頭の土坑、奈良時代以前に流路が堆積	11
40	聖護院川原町遺跡	発掘	S60	古代の土坑、平安後～室町の井戸	古代の土器、平安後～室町の土器類	49.6	—	病院AJ19区(155)、12～13世紀の井戸をAJ18区と合わせて23基検出、福勝院の周辺で福勝院に関わった人々に関連する遺構	11
41	聖護院川原町遺跡	発掘	S62	古代の竪穴住居？、平安中・後の土坑・流路、平安後の溝、鎌倉～室町の溝・土坑、室町の井戸	縄文中・後期土器、平安～室町の土器類・瓦類	49.8～49.5	49より下層	病院AH19区(191)、標高49mから2m以上下層までは高野川系と白川系旧流路によって形成、SK3・6から出土した墨書土器(12世紀)は密教法具のひとつ六器の台皿を模したと考えられ、人面墨書土器、灯明皿の出土から福勝院での祭祀にかかわった遺物と推定、白河条坊小路の一つ勘解由小路の側溝？(東西溝)を検出、縄文後期土器が旧流路肩部とみられる部分から出土	14
42	聖護院川原町遺跡	発掘	S51	平安末～鎌倉の溝	平安後期の瓦、鎌倉の土器類	46.8	—	病院AH17区(34)	2
43	聖護院川原町遺跡	発掘	H19	室町の井戸	縄文～古墳の土器、鎌倉～室町の土器類・瓦類	47.0 付近？	—	病院AG16区(338)、15～16世紀の井戸が砂礫層に覆われていることから、土石流に襲われたとみられる、ただし、礫の広がりから局所的な現象	25
44	聖護院川原町遺跡	発掘	H7	縄文後の流路、弥生前～後の流路、平安末～鎌倉の井戸・溝・土坑、室町の井戸・土坑	縄文後期土器、弥生前・後～古墳初の土器、平安末～室町の土器類	49.2	49.5	病院AG20区(239)、縄文後期土器がまとめて出土、中世後半の遺構は熊野社との関連を想定、今朱雀・仏所小路・中御門大路末・勘解由小路末に画された場所であるが旧建物で攪乱	17
45	聖護院川原町遺跡	試掘	H12	近世の土坑	近世の土器類	—	—	病院AE18区(279)、近世包合層が良好に残存していることから発掘調査を実施	20
46	聖護院川原町遺跡	発掘	S59	室町前の土坑	縄文後期土器、平安後～鎌倉前の瓦、室町前の土器類	—	47.1	病院AF19区(141)、縄文土器は高野川系旧流路に堆積、瓦の出土量から12～13世紀の瓦葺建物を想定	9
47	聖護院川原町遺跡	発掘	H7	鎌倉前の井戸、中世後～近世前の土坑	鎌倉前の土器類	—	46.9	病院AF20区(240)、中世後半の遺構は熊野社との関連を想定	17
48	聖護院川原町遺跡	発掘	H11	鎌倉～室町の井戸・集石土坑	縄文晩期土器、鎌倉～室町の土器類	48.5	—	病院AF20区(269)、集石土坑SK7は2.2m×1.7m、性格不明、14世紀頃	19
49	聖護院川原町遺跡	発掘	H12	縄文後期の流路、平安後～室町の井戸、鎌倉～室町の土坑	縄文後・晩期土器、弥生・古墳土器、平安後～室町の土器類	47.7	47.3	病院AE19区(278)、白川系流路の上層である黄褐色シルト上面が土壌化、土壌化層から縄文後・晩期土器出土、平安後～室町の井戸が調査区東端でまとめて検出	22
50	白河街区跡・吉田上大路町遺跡	立会	H12	—	—	—	—	KS020、地表下0.4mまで現代盛土	32

番号	遺跡名	調査方法	年度	主な遺構	主な遺物	中世面標高(m)	縄文面標高(m)	備考	文献番号
51	白河街区跡・吉田上大路町遺跡	立会	H10	室町の包含層、中世の土坑	中世の土器類	地表下0.49(室町)0.67(中世)	地表下0.9	KS043	31
52	白河街区跡	立会	H16	鎌倉後の包含層	鎌倉後の土器類	地表下0.5	—	KS117	33
53	白河街区跡	立会	H2	—	—	—	—	H2-037(90KS-UW007)、江戸時代の包含層、江戸時代の土器類	30
54	白河街区跡	立会	H16	室町の包含層	室町の土器類	地表下0.25	—	KS361	34
55	白河街区跡	立会	S60	縄文後の土坑、室町の柱穴、中世の土坑	縄文後の土器・石器	—	—	聖護院門跡西の南北道路南半で縄文後期の土坑検出、長軸は6m	29
56	白河街区跡	立会	H11	—	—	—	—	KS084、地表下0.2m以下、江戸の包含層	31

※ 遺跡名は調査時のものであるが、京大構内については京都市文化市民局発行の『京都市遺跡地図台帳』の名称を使用した。

※ 京大大学構内遺跡の調査地点は京大大学文化財総合研究センター2011『京大大学構内遺跡調査研究年報 2008年度』の図版1を参考にした。

※ 備考欄に、京大大学構内遺跡で使用されている地区番号と次数を記入した。

※ 番号50～56の備考欄に記入した記号は、文献に記されていた調査番号や契約番号である。

文献一覧

- 『京大大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』 京大大学農学部構内遺跡調査会 1977年
- 『京大大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』 京大大学埋蔵文化財研究センター 1978年
- 『京大大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』 京大大学埋蔵文化財研究センター 1979年
- 『京大大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』 京大大学埋蔵文化財研究センター 1980年
- 『京大大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』 京大大学埋蔵文化財研究センター 1981年
- 『京大大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』 京大大学埋蔵文化財研究センター 1983年
- 『京大大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』 京大大学埋蔵文化財研究センター 1984年
- 『京大大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』 京大大学埋蔵文化財研究センター 1986年
- 『京大大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度』 京大大学埋蔵文化財研究センター 1987年
- 『京大大学構内遺跡調査研究年報 昭和60年度』 京大大学埋蔵文化財研究センター 1988年
- 『京大大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』 京大大学埋蔵文化財研究センター 1989年
- 『京大大学構内遺跡調査研究年報 1987年度』 京大大学埋蔵文化財研究センター 1990年
- 『京大大学構内遺跡調査研究年報 1988年度』 京大大学埋蔵文化財研究センター 1992年
- 『京大大学構内遺跡調査研究年報 1989～1991年度』 京大大学埋蔵文化財研究センター 1993年
- 『京大大学構内遺跡調査研究年報 1992年度』 京大大学埋蔵文化財研究センター 1995年
- 『京大大学構内遺跡調査研究年報 1995年度』 京大大学埋蔵文化財研究センター 1999年
- 『京大大学構内遺跡調査研究年報 1996年度』 京大大学埋蔵文化財研究センター 2000年
- 『京大大学構内遺跡調査研究年報 1997・1998年度』 京大大学埋蔵文化財研究センター 2002年
- 『京大大学構内遺跡調査研究年報 1999年度』 京大大学埋蔵文化財研究センター 2003年
- 『京大大学構内遺跡調査研究年報 2000年度』 京大大学埋蔵文化財研究センター 2005年
- 『京大大学構内遺跡調査研究年報 2001年度』 京大大学埋蔵文化財研究センター 2006年
- 『京大大学構内遺跡調査研究年報 2002年度』 京大大学埋蔵文化財研究センター 2007年
- 『京大大学構内遺跡調査研究年報 2003年度』 京大大学埋蔵文化財研究センター 2008年
- 『京大大学構内遺跡調査研究年報 2004～2006年度』 京大大学文化財総合研究センター 2009年
- 『京大大学構内遺跡調査研究年報 2007年度』 京大大学文化財総合研究センター 2010年
- 『吉田近衛町遺跡 京都文化博物館調査研究報告 第4集』 京都文化博物館 1989年
- 『埋蔵文化財発掘概報』 京都府教育委員会 1978年
- 『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988年
- 『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 『京都市内遺跡立会調査報告 平成10年度』 京都市文化市民局 1999年
- 『京都市内遺跡立会調査報告 平成12年度』 京都市文化市民局 2001年
- 『京都市内遺跡立会調査報告 平成16年度』 京都市文化市民局 2005年
- 『京都市内遺跡立会調査報告 平成17年度』 京都市文化市民局 2006年
- 『京都市内遺跡試掘調査報告 平成23年度』 京都市文化市民局 2012年3月刊行予定

13・14・16 地点では、5 世紀末から6 世紀前葉の方墳が7 基、14 地点では同時期の土壙墓が1 基確認されている。これらの方墳は吉田二本松古墳と名付けられ、群を形成しながら短期間で築造されたと考えられている。16 地点で検出された方墳1 基（6 号墳）から、形象埴輪が少量出土した。また、20 地点でも、埴輪の破片が出土しており、周辺に新たな古墳の存在が想定されている。

奈良時代の遺構や遺物は、北東から南西方向にかけての地点である5・6・8・9・14・16・39・41 地点で検出されている。5 地点では溝、6・14・16 地点では掘立柱建物、16・39 地点では土坑・井戸、41 地点では竪穴住居とみられる遺構が検出されている。とくに16 地点では、8 世紀中頃に比定される遺構がまとまっており、この時期の活動拠点であったと考えられている。竪穴住居2 基とともに、墨書土器や多くの製塩土器が出土した本部構内南端（A T 27 区）、の遺構との関連が指摘されている²⁾。39 地点では、北から南にかけて検出された高野川系流路上面に、7 世紀後半から8 世紀初頭の鉄器生産に関わる土坑が検出された。このことから、高野川系の流路堆積が奈良時代以前にあったことが判明した。

平安時代になると、平安時代後期から末にかけての井戸が多く検出される（16・29・31・32・34・39・40・44・49）。井戸は深い遺構であるため、近現代の削平を受けても他の遺構より遺存しやすいという点もあるが、宅地としての利用が以前にもまして活発化してきたことが現れているとみられる。溝は平安時代前期ものが9・12 地点、平安時代中期のものが12 地点、平安時代後期のものが8・11・20・21・39・41 地点で検出された。中でも41 地点で検出した東西方向の溝は、白河条坊の一つである勘解由小路の側溝と考えられ、27 地点では12 世紀末から13 世紀初頭の白川道に接続していたとみられる道路跡が確認されている。

なお、この時期の白河街区跡北部の特徴を現すものとして、14・16 地点で発見された平安時代中期の梵鐘鑄造遺構がある。14 地点のものは一辺2.5 mの隅丸方形土坑の底に、梵鐘鑄造のための円形定盤があり、構架材の柱跡や掛木の痕跡が検出された。定盤には造り直しが数度行われていたことから、鑄造が数回にわたったと考えられている。土坑は3 基並び、真ん中のものが溶解炉の基礎や鞆、両側2 基が鑄造坑とみられている。16 地点のものは定盤などが残っていなかったが、一辺2.5 mの隅丸土坑が4 基並び、その底に柱跡や掛木の痕跡が残っていた。両地点から梵鐘の鑄型や溶解炉、浴壁などが出土している。平安京やその周辺寺院からの広範囲な需要に応じる工房が想定されている。

この他の鑄造に関連したものとして、38 地点からは平安時代後期のとりべや密教法具の六器の鑄型が出土している。38 地点は井戸が検出された40 地点とともに福勝院の推定地に近く、福勝院関連の遺構や遺物と考えられている。また、6 地点では経塚が見つかった。紀年銘のある「九州型」の青銅製四段積上式経筒やガラス玉が出土し、この地の領主か吉田社に關係する遺構と考えられている。

鎌倉時代から室町時代になると遺構や遺物量は、格段に増加する。調査地周辺の状況を見ると、2・3 地点では柱穴や土坑などが検出されているが、建物に復元できるものがなく、遺構としてはまとまらない。3 地点では鎌倉時代の瓦が多量に出土している。4 地点では、13 世紀の掘立柱

建物が福勝院の殿舎の一部に想定されているものの、確証が得られていない。また、4-2地点で検出された南北方向の溝が今朱雀通の側溝と考えられている。土坑の中には集石を持つものや焼石が多く混じるもの、焼土や炭が入るもの、鉄釘や完形の土師器皿が出土するものなど墓と考えられるものが検出されている。これらのことから、福勝院が廃絶したとみられる14世紀には墓域化したと想定されている。

調査地北側の6～9地点付近では、鎌倉時代の遺構が希薄になっている。活動の中心地というよりも、日常雑器類の少なさや銭貨が多量に出土した落込み、瓦類が多量に出土するなど一般集落とは異なることから、宗教色の強い空間であったと想定されている。しかし、14世紀後半から15世紀前半になると、土地の大規模改変が実施され、濠状の溝や段差の造成がなされる。吉田社の旧社地でその関係遺構と考えられている。ちなみに、吉田社は神楽山山麓へ山上遷座されるのが16世紀とされ、遺構の廃絶時期に相当するとみられる。14地点では溝と門に挟まれた区画が道路、溝より東の区画は墓域と考えられ、墓域内も溝によって分割されている。須恵器甕や褐釉陶器壺などの蔵骨壺を持つ土坑墓や木棺墓、上面に集石をもつ土坑墓も検出されている。15地点でも14世紀中頃の土坑墓が確認された。

調査地北西の白川道周辺でも多くの調査が行われており、26地点では浄蓮華院（1199年創建）の荒廃と退転を示す遺構が発見されている。27地点では13世紀代の白川道を検出、14世紀には北へ移動する。28地点ではこの白川道から分岐する間道が整備される中で、中世前半期に集石・土器溜、後半期に大規模な溝状区画が構築されるという変遷および、土地区画の基本が中世初頭の開発以降連綿と継承されていたことが明らかとなった。30～36地点では、13世紀後半から14世紀前半にかけて活動が活発化する傾向が認められ、勤修寺流吉田氏の邸宅・園池・菩提寺（浄蓮華院）との関係が想定されている。また、30地点などでは多量の焼土塊と鉄滓・石鍋・砥石・鉄製品の出土頻度が高く、鑄造や鍛冶に関連する作業空間が存在していたとみられている。32地点では、14世紀中頃から土取り土坑があるのは、14世紀前半の吉田氏の退転が関係していると思われる。

調査地西側の48地点では、長軸2.2m、短軸1.7mの14世紀頃に造られたとみられる性格不明の集石土坑が検出されている。京都大学本部構内（AW25区）で検出された多量の礫で土坑内を充填した集石土坑がこれに類似するもので、時期は13世紀中頃とされる³⁾。これらは、規模や形態が今回発掘した集石遺構に類似している。43地点では15～16世紀の井戸が砂礫層に覆われており、局所的な土石流に襲われたとみられる。

註

- 1) 千葉豊「病院校内の先史時代遺跡」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ－京都大学病院校内の調査－』京都大学埋蔵文化財研究センター 1991年
- 2) 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』京都大学埋蔵文化財研究センター 1981年
- 3) 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1993年度』京都大学埋蔵文化財研究センター 1997年

4. 遺 構

(1) 遺構の概要

1区で検出した主な遺構は、鎌倉時代後期から室町時代前期の時期を中心とする。鎌倉時代後期の遺構には、柱穴、集石遺構、溝、整地層、土坑などがある。後世の攪乱をほとんどうけていない調査区北半と南端に遺構が集中していた。調査区北西部を中心に多くの柱穴があり、その中に礎石を持つ柱穴が多数含まれていたが、建物跡に復元することはできなかった。室町時代前期の遺構には、柱穴列、集石、整地層、土坑などがある。前時期と同様に、攪乱の影響がない調査区北半に遺構がまとまっていた。また、下層の遺構として、中世遺構面の基盤層を掘り下げて自然流路を検出している。2区では、確実に鎌倉時代後期の遺構と分類できるものがなく、室町時代前期の遺構が中心となっている。調査区東半で大きな土坑を検出し、礎石を持つ柱穴も数基確認したが、1区と同様に建物として復元はできなかった。

以下では、1区中世第1面・中世第2面・下層遺構面、2区中世遺構面で検出した主な遺構について報告する。なお、1・2区で検出した江戸時代の遺構について詳述しないが、小柱穴や土坑の他に耕作に伴う遺構を検出している。その大半の遺構が19世紀以降のものである。

(2) 1区の遺構

1) 基本層序

1区の基本層序(図6、東壁X=-108,524付近)は、現地表から0.45mまでが近現代盛土、0.6mまでが黒褐色砂質土の近世耕土(1区東壁2層)、0.9mまでが粘性のある暗褐色砂質土の中世遺物包含層(8層)、1mまでが暗褐色砂質土の中世遺物包含層(11層)、1.15mまでが暗褐色～灰黄褐色砂質土混細砂の中世遺物包含層(32・57層)、1.5mまでが褐色砂質土の中世における基盤層(58層)、1.7mまでがにぶい黄褐色粗砂などの弥生時代以降から中世遺構が形成されるまでの間に堆積した自然堆積土(60層)、1.8mまでが褐色砂質土混灰黄褐色シルトの土壌化した層(66層)、1.9mまでが炭を少量含む黄褐色粘質土(74層)、2.2mまでは無遺物のにぶい黄色微砂～シルト(78層)である。78層の下層は黄褐色粗砂礫(91層)となり、この層で後述する自然

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	
	1 区	2 区
縄文時代晩期 ～弥生時代	縄文土器包含層、自然流路305・306	
鎌倉時代後期	柱穴257、溝106・113・157・166、整地層107、 集石89～93・108・109・114～116・148、 土坑120・192・193・253・254	
室町時代前期	柱列1、集石149～151、整地層112、 土坑143・222・223	柱穴37・60～63、 土坑33・59

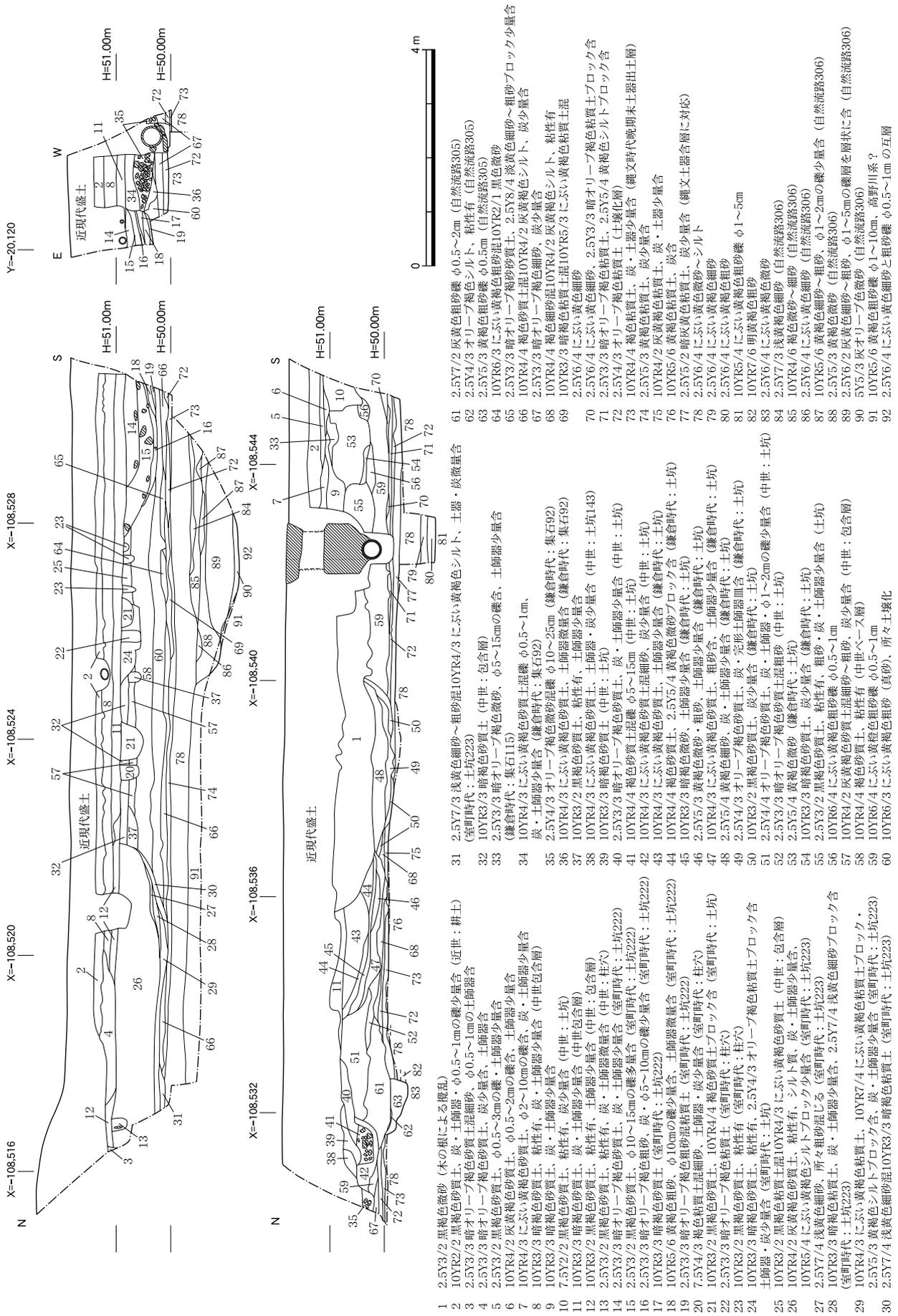
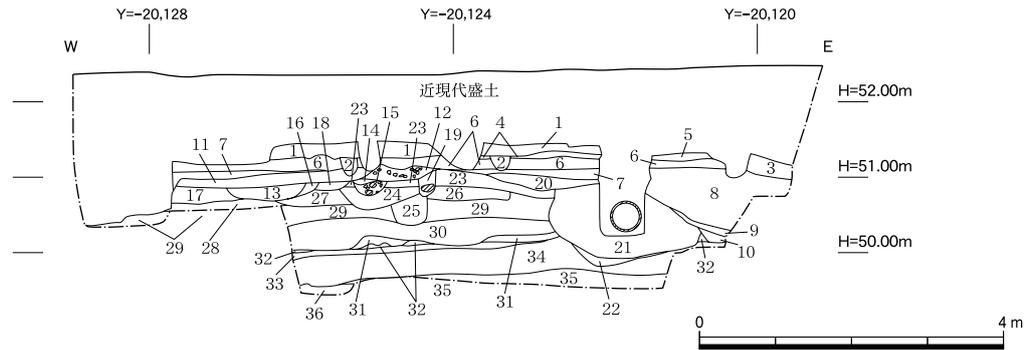


図6 1区東壁断面図(1:100)



- 1 10YR2/2 黒褐色砂質土、炭・土師器・φ0.5~1cmの礫少量含（近世：耕土）
- 2 10YR4/2 灰黄褐色砂質土、炭・土師器・φ2~5cmの礫少量含（近世：柱穴）
- 3 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土混細砂、土師器含
- 4 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土（中世：包含層）
- 5 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土、炭・土師器少量含
- 6 10YR3/2 黒褐色砂質土、粘性有、土師器少量含（中世：包含層）
- 7 10YR3/3 暗褐色砂質土（中世：包含層）
- 8 10YR4/2 灰黄褐色砂質土、粘性有、シルト質、炭・土師器少量含、10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック少量含（室町時代：土坑223）
- 9 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土、10YR7/4 にぶい黄褐色粘質土ブロック・2.5Y5/3 黄褐色シルトブロック含、炭・土師器少量含（室町時代：土坑223）
- 10 2.5Y7/3 浅黄色細砂~粗砂混10YR4/3 にぶい黄褐色シルト、土師器・炭微量含（室町時代：土坑223）
- 11 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土、土師器・10YR3/1 黒褐色砂質土ブロック少量含（室町時代：整地層）
- 12 10YR4/4 褐色砂質土、φ3~7cmの礫含、炭・土師器微量含（室町時代：集石88上層）
- 13 10YR4/4 褐色砂質土（鎌倉時代~室町時代：溝106）
- 14 10YR3/2 黒褐色砂質土、φ1~2cmの礫少量含（鎌倉時代：集石88下層）
- 15 10YR4/2 灰黄褐色砂質土、φ2~10cmの礫含（鎌倉時代：集石88下層）
- 16 10YR3/3 暗褐色砂質土混粗砂 花崗岩質、炭・土師器少量含、10YR2/1 黒色砂質土ブロック含、硬い（鎌倉時代：整地層）
- 17 10YR3/2 黒褐色砂質土、粗砂・10YR2/1 黒色砂質土ブロック含（鎌倉時代：整地層107）
- 18 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土、φ0.5cmの礫・2.5Y2/1 黒色砂質土ブロック含（鎌倉時代：整地層）
- 19 2.5Y183 オリーブ褐色砂質土（鎌倉時代：柱穴）
- 20 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土
- 21 10YR3/3 暗褐色砂質土混細砂、炭・土師器少量含（鎌倉時代：土坑192）
- 22 10YR3/3 暗褐色砂質土、2.5Y5/4 黄褐色シルトブロック多量含（鎌倉時代：土坑192）
- 23 2.5Y3/2 黒褐色砂質土混粗砂、炭・土師器少量含（鎌倉時代：整地層）
- 24 10YR2/2 黒褐色砂質土、粗砂含、炭・土師器少量含（鎌倉時代：溝）
- 25 10YR3/2 灰黄褐色砂質土、10YR4/4 にぶい黄褐色砂質土ブロック含（鎌倉時代：土坑）
- 26 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土混細砂
- 27 10YR4/4 褐色粗砂礫 φ1cm
- 28 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂、砂質土含
- 29 10YR4/4 褐色砂質土、粘性有（中世ベース層）
- 30 10YR6/3 にぶい黄褐色粗砂（真砂）、所々土壌化
- 31 10YR4/4 褐色砂質土混10YR4/2 灰黄褐色シルト、炭少量含
- 32 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土、土壌化層
- 33 2.5Y5/3 黄褐色粘質土、炭少量含
- 34 2.5Y6/4 にぶい黄色微砂~シルト
- 35 10YR5/6 黄褐色粗砂礫 φ1~10cm、高野川系？
- 36 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂と粗砂礫 φ0.5~1cmの互層

図7 1区北壁断面図（1：100）

流路 306 を検出した。

なお、60層は京都大学構内で検出された場合、一般的に「真砂」と呼ばれる黄色砂に対応し、66層は1区南半の土壌化層である72層に対応する。ほとんど遺物を含まない74層と75層（1区南で確認）は、1区中央付近で検出した縄文時代晩期土器を包含する73層に対応している。また、78層は2区の北壁18層と対応する。

遺構面は、32層上面を遺構成立面と認識して中世第1面とし、中世基盤層にあたる58層上面を中世第2面として調査を行った。また、縄文土器を包含する土壌化層（64・66層）まで重機で掘り下げて、下層遺構面として調査した。ただ、X=-108,530付近から北側およびX=-108,536付近から南側ではほとんど遺物は含まなかった。

2) 中世第1面の遺構（図8、図版1）

主な遺構は、調査区北半で検出した。集石と土坑が中心である。集石88と集石90・92との間では上面を平坦に据え付けた径10~30cmの礫を数箇所を確認しており、本来は柱穴が存在していたと考えられる。検出した柱穴で並ぶものを柱列1とした。しかし、並んでも間隔がそろわな

いものなどがあり、その多くは建物跡や柵跡に復元することができなかった。

集石 88 1区中央から北にかけて検出した南北方向の集石遺構である。長さ 16.2 m以上、幅は 0.7～1 m、深さ約 0.1 mを測る。埋土は上層が褐色砂質土、下層が黒褐色～灰黄褐色砂質土である。礫は北ほど密に混じり、特に北端は深さ約 0.2 mまで直径 2～10 cmの礫が詰まっていた。下層は礫が少なく、出土遺物から鎌倉時代後期に遡ると考えられるが、室町時代前期になって礫を多量に入れて地業状にしている。また、上層埋土には 15 世紀前半の瓦質土器鍋などが入り、最終的には 15 世紀後半に埋まったとみられる。塀状遺構の基部と考えられるが、詳細は不明である。なお、上層礫群の下層で後述する集石 109・148 を検出している。

集石 90 (図 9・10、図版 1・2) 1区北東に造られた南北約 4 m、東西約 3.5 m、深さ約 1.1 mの隅丸不整形土坑である。壁は一部巾着袋状に下部で膨らみ、角も丸くなっている。検出時は中央に上層埋土、それを取り囲むように長辺 20 cm前後の礫が敷き詰められたような状態であった。埋土は中央がすり鉢状に窪んでおり、上から砂質土や粗砂、礫の互層、検出時に一部が見えていた礫層(集石 90 上層礫面)、炭を多く含む砂質土、粗砂、下層礫面を形成する礫層、最下層の粗砂や粘質土である。下層礫面の礫層南半は、掘削途中で別の遺構と判断したため、南半を集石 89 として掘り分けた。遺物も別遺構として掲載しているが、層位関係をみるとこれらの遺構は短期間の間に、一連で造られたとみられる。また、墓の可能性も考えられたので、埋土の一部を篩にかけ、遺物採集を行った。多量の鉄釘のほかに、骨(魚・鳥?)など微細遺物を採集することができた。この微細遺物の内容から、ゴミ捨て穴として利用されていた時期もあったと考えられる。埋土から完形またはそれに近い土師器皿や、土師器鉢、須恵器甕・鉢、輸入磁器碗・皿、輸入陶器盤、瓦器碗、瓦質土器鍋・羽釜・盤、硯などが出土した。

集石 89 (図 9・10、図版 1・2) 集石 90 の南に掘られた隅丸方形土坑である。長軸約 2.2 m、短軸約 2 m、深さは約 1 mである。北半上部が集石 90 上層に壊されているが、下層では集石 90 礫面を切って成立している。埋土は長辺 20 cm前後の礫が詰まっており、遺物は土師器皿、須恵器甕・鉢、輸入磁器壺、瓦器碗、瓦質土器鍋・羽釜などが出土している。

集石 91 (図 9・10、図版 1) 集石 90 の北側に南肩口を接して掘られた隅丸方形土坑である。南北約 3 m、東西約 2.2 m、深さ約 1 mを測る。上層はオリーブ褐色砂質土で、直下に長辺 20 cm前後の礫を中心として、長辺 50 cmまでの大型礫が詰められていた。この礫層は上面が平坦になっていた。この下層に南から北に落ち込む層があり、土器を多量に包含していた。大半が土師器皿で、その他に須恵器甕・鉢、輸入磁器碗、瓦器碗、瓦質土器鍋・羽釜、石鍋などがある。礫中から凝灰岩製五輪塔火輪片が出土した。

集石 92 (図 9・10、図版 1・2) 集石 89 南側に一部接する形で掘られた隅丸方形土坑である。南北約 3.1 m、東西約 3.5 m、南東角が調査区外になっており、南端上層に土坑 143 が重なっていた。深さ約 0.8 mである。集石 91 同様に、上面はにぶい黄褐色砂質土に覆われており、所々に礫頭が確認できる程度であったが、検出面から約 0.2 m掘り下げたところに長辺 20 cmの礫が入った層があり、上面はほぼ平坦になっていた。その北端下層には礫が入らない掘り込みがあったが、

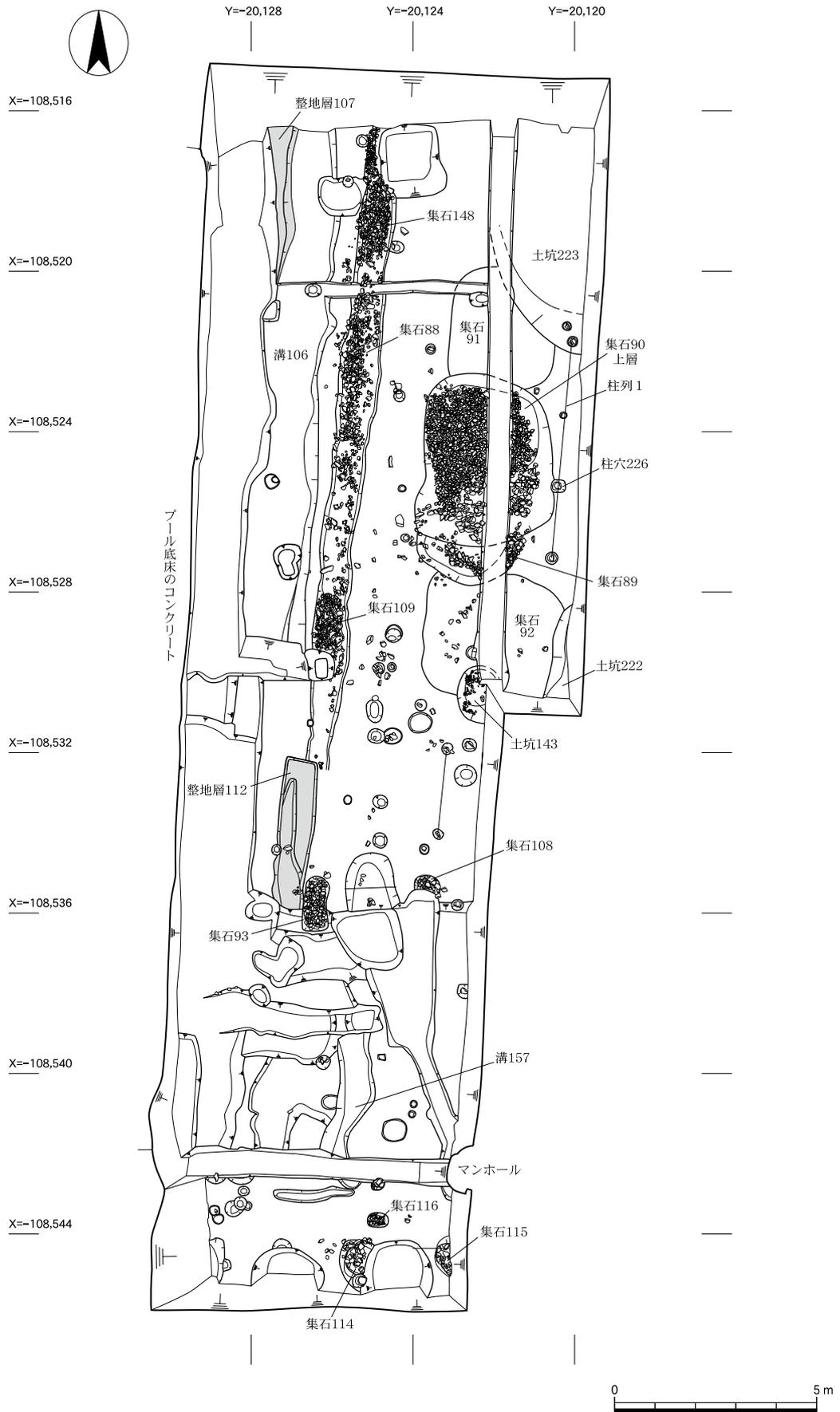


図8 1区中世第1面平面図 (1 : 150)

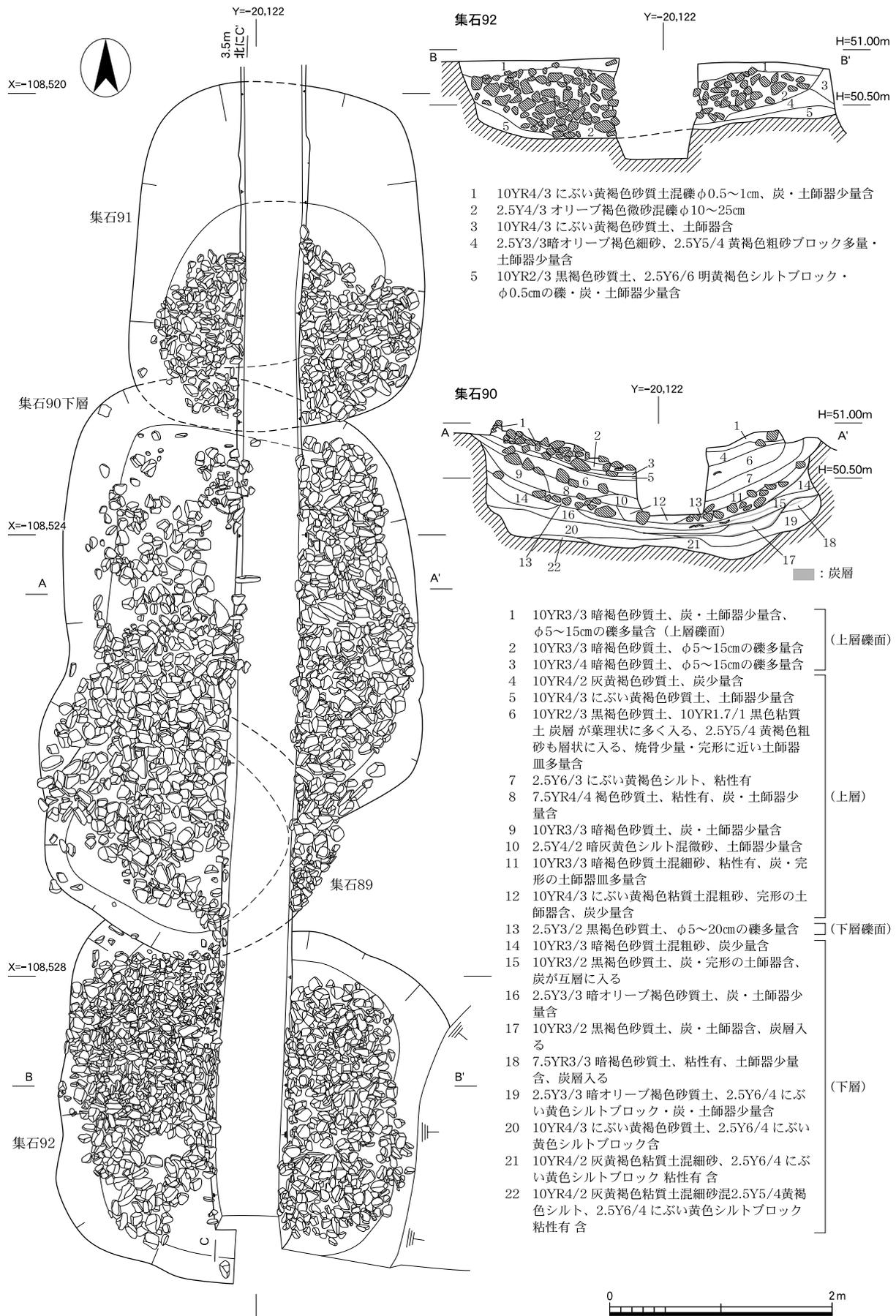


図9 1区集石89~92 礫群検出状況平面および集石90・92断面図(1:50)

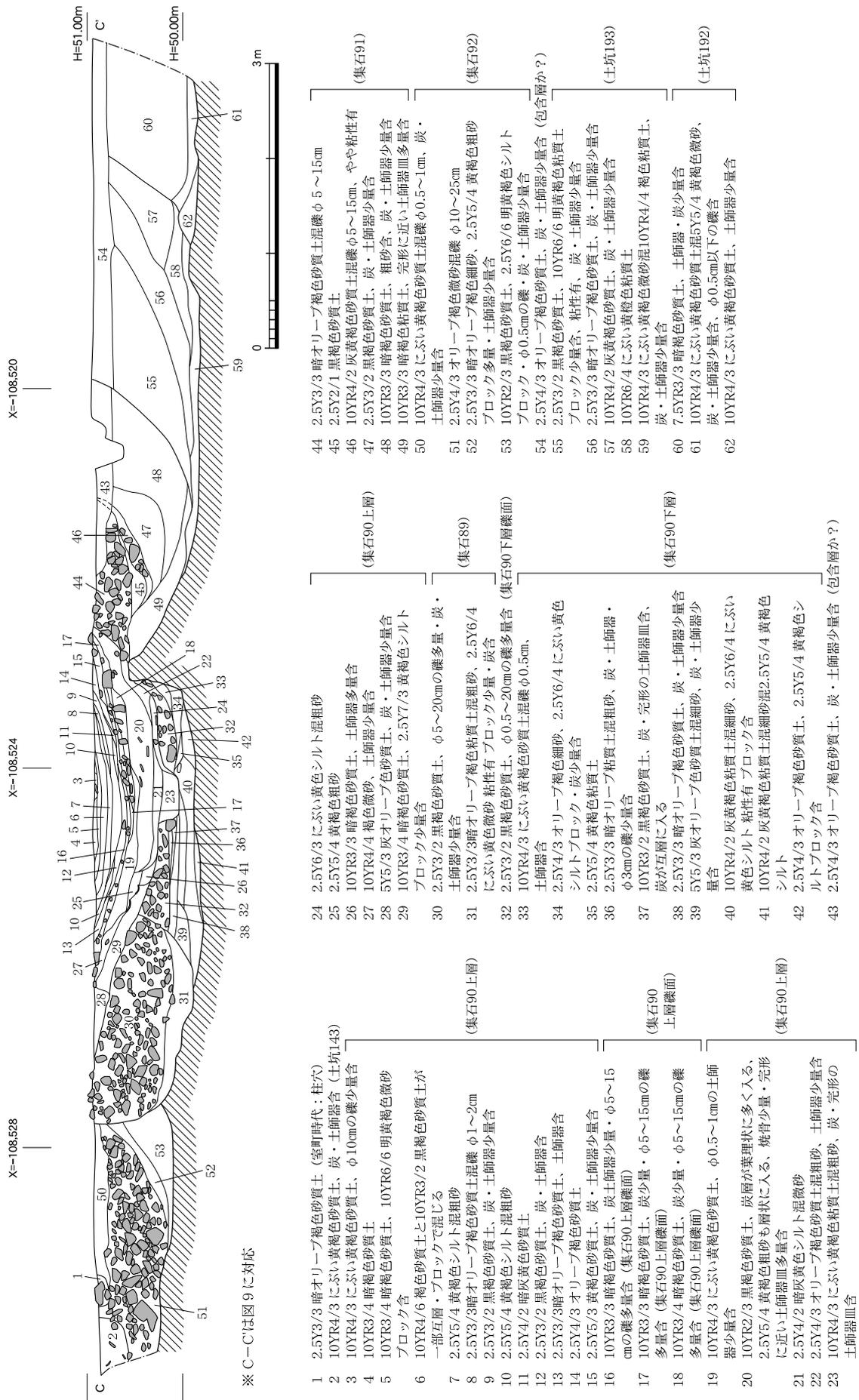


図10 1区集石89~92、土坑192・193断面図(1:60)

ほとんど遺物は含まれていなかった。

集石 93 (図 11) 1 区中央南で検出した南北約 1.4 m、東西約 0.6 m、深さ約 0.4 m の隅丸長方形土坑である。直径 5 ～ 15 cm の礫が下層から中層までぎっしりと詰められていた。下層には褐色粗砂や砂質土が堆積する。類似の集石 109・148 と直線上に並ぶ。集石 88 の基部を形成していたとみられ、塀などの下部構造の可能性が考えられる。土師器皿、須恵器甕、焼締陶器甕、瓦質土器盤・火鉢、砥石など小片が出土した。

集石 108 1 区中央東で検出した。南半分以上を攪乱によって壊されていた。南北 0.8 m 以上、東西約 0.7 m、深さ約 0.2 m、楕円形を呈していたとみられる。上層に直径 5 ～ 15 cm の礫が多量に入ったにぶい黄褐色砂質土、下層に灰黄褐色細砂などが堆積する。遺構の性格は不明である。遺物が出土していないので、詳細な時期は不明である。

集石 109 (図 11、図版 2) 1 区中央の集石 88 下層で検出した隅丸長方形土坑である。南北約 1.3 m、東西約 0.7 m、深さ約 0.5 m を測る。埋土には直径 5 ～ 15 cm の礫が詰められていた。最下層に暗褐色粗砂が堆積していた。集石 93 と同様の遺構である。遺物には土師器皿、須恵器甕、焼締陶器甕、輸入磁器椀、瓦質土器羽釜などの小片がある。

集石 114 (図 11) 1 区南端中央で検出した北西から南東方向に長軸を持つとみられる楕円形土坑である。東半分が近現代の攪乱坑に壊されている。南北約 1.3 m、東西 0.8 m 以上、深さ約 0.7 m を測る。1 層目である暗褐色砂質土に直径 5 ～ 20 cm の礫が大量に詰められており、集石の本体とみられる。埋土に礫を大量に入れるという点では、1 区中央や北側で検出した集石 93 や集石 109 などに類似しているが、延長線上には並ばない。土師器皿、須恵器鉢・甕、焼締陶器甕、輸入陶器椀、丸・平瓦、塼、花崗岩製品、鉄滓が出土した。

集石 115 集石 114 の東側で検出した。東側半分以上が調査区外である。南北約 1.5 m、東西 0.4 m 以上、厚さ約 0.1 m で、集石は上面にのみ載っていた。黒褐色砂質土が集石を覆っていたが、下部に土坑は確認できなかった。土師器皿の小片が出土した。

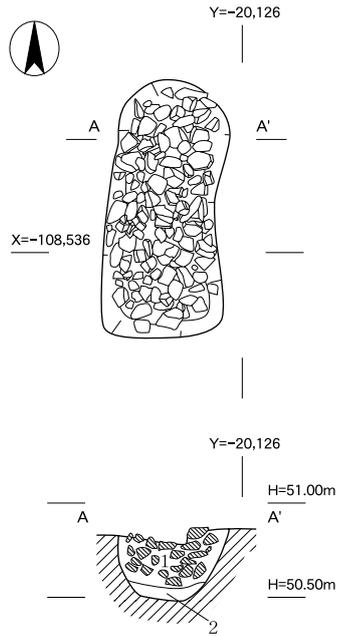
集石 116 (図 11、図版 2) 集石 114 の北側で検出した集石遺構である。南北約 0.35 m、東西約 0.55 m、深さ約 0.25 m で、東西方向に長軸を持つ。楕円形を呈する。直径 5 ～ 20 cm の礫が詰められていた。湿気抜きのような遺構とみられるが、詳細は不明である。遺物は土師器皿、須恵器甕の小片がわずかに出土しているのみである。

集石 148 (図 11、図版 2) 1 区北の集石 88 下層で検出した隅丸長方形土坑である。南北約 1.4 m、東西 0.5 m、深さ 0.7 m を測る。埋土はにぶい黄褐色粘質土に、大量の直径 5 ～ 20 cm の礫が詰め込まれたものであった。集石 93・109 と同じ性格の遺構である。土師器皿、須恵器鉢・甕、焼締陶器甕、瓦質土器鍋・釜、丸・平瓦、花崗岩製品などが出土している。

土坑 143 1 区中央東端で検出した楕円形土坑である。集石 92 南端の上面に造られていた。南北約 1.4 m、東西 0.7 m 以上、深さ約 0.3 m、埋土は直径 10 cm の礫を少量含むにぶい黄褐色砂質土である。土師器皿や瓦質土器鉢・羽釜、焼締陶器甕などの土器類が多く出土した。

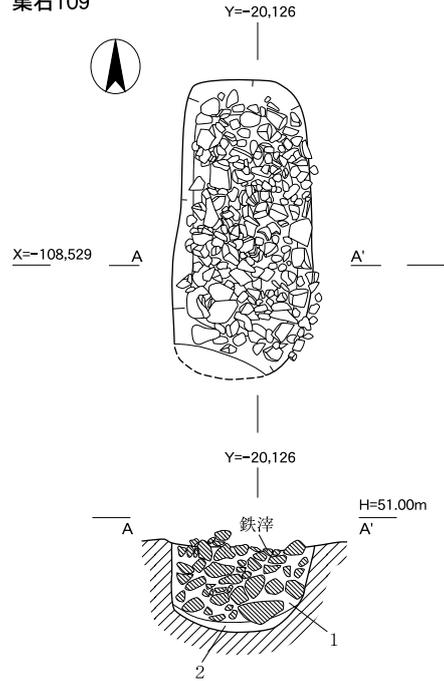
土坑 222 1 区中央東端で検出した。南北 2.4 m 以上、東西 0.6 m 以上、深さ約 0.6 m である。

集石93



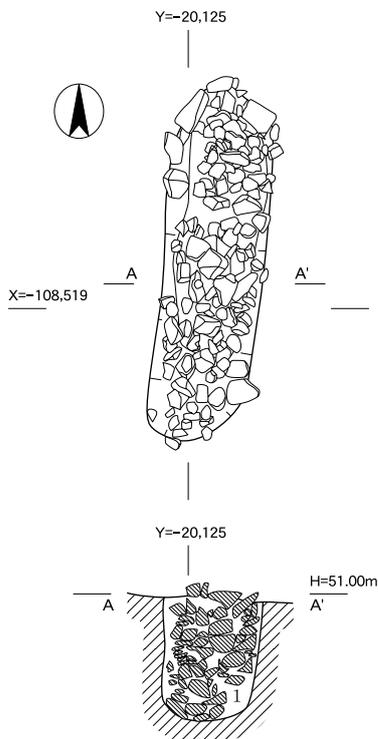
- 1 10YR3/3 暗褐色砂質土、φ5~15cmの礫多量含
- 2 10YR4/4 褐色粗砂混10YR3/3 暗褐色砂質土

集石109



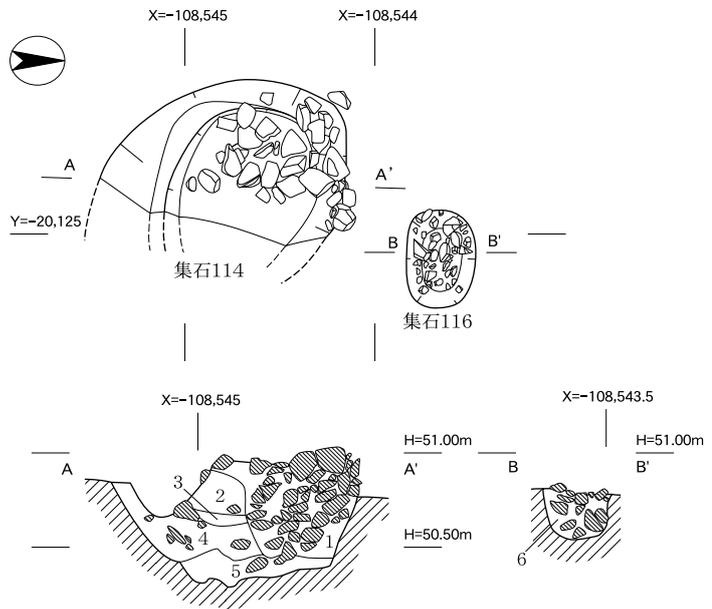
- 1 10YR4/4 褐色砂質土混礫φ5~15cmの礫主体
- 2 10YR3/3 暗褐色粗砂混粘質土

集石148



- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土混礫φ5~20cm

集石114・116



- 1 10YR3/3 暗褐色砂質土混礫φ5~20cm、粘性有、炭・土師器含
 - 2 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土、φ0.5~1cm・φ5~10cmの礫少量含
 - 3 10YR3/3 暗褐色砂質土、2.5Y6/6 明黄褐色砂質土ブロック含
 - 4 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土、φ5~15cmの礫・土師器少量含
 - 5 2.5Y3/2 黒化色砂質土、炭・土師器・2.5Y5/3 黄褐色シルトブロック含
 - 6 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土、土師器少量含、φ5~20cmの礫主体
- (集石114)
- (集石116)

図 11 1区集石 93・109・114・116・148 実測図 (1 : 40)

大半は調査区外で不明であるが、下層の集石 92 東端上部から掘り込まれていた。埋土は暗オリーブ褐色砂質土、径 10 ～ 15 cm の礫を多量に含む黒褐色砂質土などである。土師器皿、輸入磁器碗・合子蓋などが出土した。土取り穴とみられる。

土坑 223 1 区北東隅で検出した隅丸方形土坑とみられる。南北 5.7 m 以上、東西 1.8 m 以上、深さ約 0.8 m である。上層から中層にかけては灰黄褐色砂質土、下層は黄褐色系のシルトブロックを含む粘質土が堆積していた。下層の土坑 192・193 を半分以上壊して掘り込まれていた。土師器皿、須恵器鉢・甕、焼締陶器甕、瓦質土器羽釜・盤などが出土している。土取り穴とみられるが、どの層の土を採取したかは不明である。

溝 106 1 区北西端で検出した南北方向の溝である。長さ 12.8 m 以上、幅 1 ～ 1.6 m、深さ約 0.2 m である。埋土は暗オリーブ褐色細砂混粗砂で、周辺の整地層を削った際の黒褐色砂質土ブロックを含む。集石 88 の西側に平行して位置している。出土した土師器皿小片から、14 世紀中頃に埋め立てられたとみられる。

溝 157 1 区南で検出した南北方向の溝状遺構である。両端を攪乱によって壊されているが、残りの良い部分で検出できなかったため、それほど延伸しないとみられる。長さ 3 m 以上、幅約 0.9 m、深さ約 0.2 m、埋土は黒褐色砂質土などである。遺物は土師器皿、須恵器鉢・甕、瓦器碗、瓦質土器羽釜・盤、硯などが出土している。

柱列 1 (図 12) 1 区北半東寄りで検出した。南北方向に礎石を持つ柱穴 (北から柱穴 196・205・226・228) が 4 基並ぶ。柱穴の直径は 0.2 ～ 0.3 m、礎石までの深さ 0.05 ～ 0.15 m で、柱穴 196 のみ検出面より 0.05 m 高い位置で確認した。礎石の厚さは 6 ～ 10 cm を測る。柱穴中心間は約 1.8 m (1 間) である。集石 88 と長軸がほぼ揃っており、北に対して東へ約 4.5° 振れている。集石 88 との中心間距離は約 5.4 m の 3 間分であった。

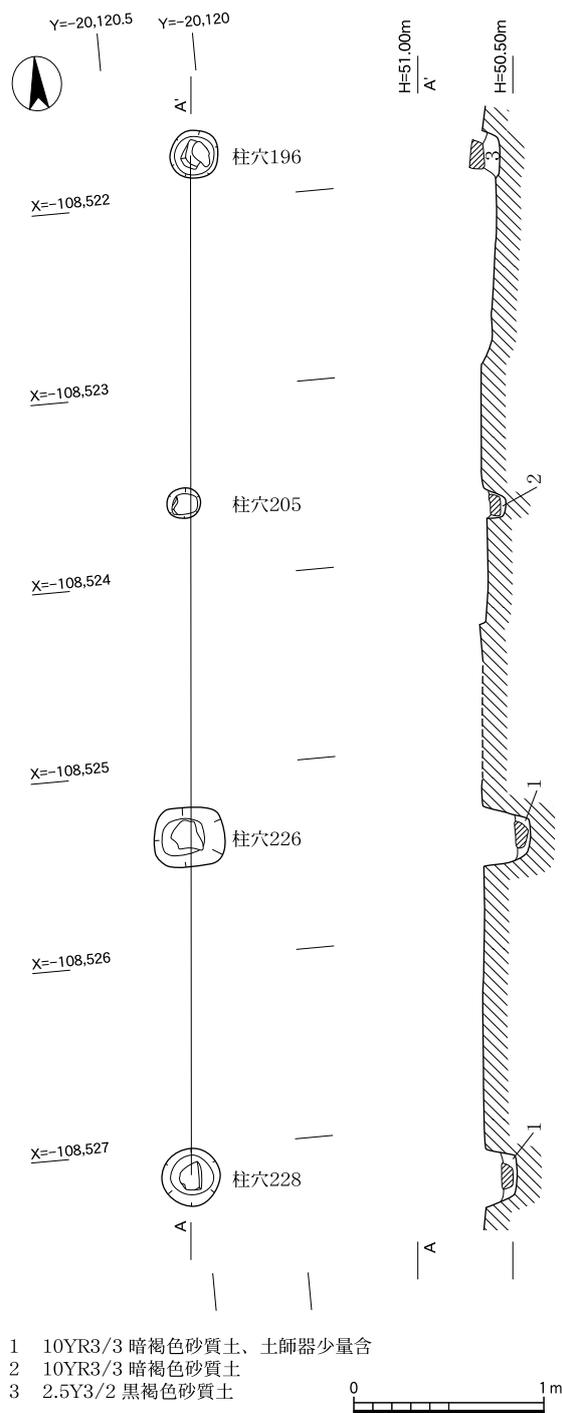


図 12 1 区柱列 1 実測図 (1 : 40)

各柱穴からは、ほとんど遺物が出土しなかったが、柱穴 226 から硯が出土した。

整地層 107 溝 106 の西側に一部残っていた厚さ約 0.2 m の整地層である。埋土は暗褐色砂質土混粗砂である。非常に硬く叩き締められていた。集石 88 に対応するものとみられるが、残存部分が少なく詳細は不明である。14 世紀中頃に溝 106 とともに埋められたとみられる。土師器皿、焼締陶器甕、瓦質土器鍋などの小片や、二次的に焼けて白色化したガラス玉が出土した。

整地層 112 1 区中世第 1 面中央西寄りで検出した。集石 88 南端と重なる位置に、明黄褐色砂質土を使用して叩き締めた部分が長形状に広がっていた。集石 88 と同じ東へ約 5° 振れる軸を持つ。長さ 3.7 m 以上、幅約 0.9 m、深さ約 0.1 m である。集石 88 西端から約 0.5 m 西へずれる。集石 88 が途切れる部分から始まり、関連遺構である集石 93 中程で終わっていることから、塀状遺構に伴う入口施設の土間状遺構の可能性が考えられる。遺物は土師器皿などの小片が出土している。

3) 中世第 2 面の遺構 (図 13、図版 3)

調査区全面、特に北半部および南端でまとまって確認した。柱穴は建物跡などに復元できなかった。土坑は南北方向に連っており、土坑群の中心軸は南北溝の軸とほぼ平行である。

土坑 120 (図 14、図版 2) 1 区南端中央で検出した隅丸方形に近い不整形土坑である。南北約 0.6 m、東西約 0.65 m、深さ約 0.4 m、埋土は黒褐色微砂などの砂層である。上層の土坑中央に、瓦質土器羽釜が底面を上にした状態で据えられていた。その他に、土師器皿、須恵器甕、瓦質土器羽釜、輸入陶器椀などの小片が出土した。埋土に骨などの遺物は含まれていなかったが、調査地南西で行われた調査 (図 5 - 4 地点) で墓とみられる遺構が多数検出されていることから、墓の可能性も考えられる。

土坑 192 1 区北東で検出した隅丸方形または不整形土坑である。北は調査区外、南と東を土坑 193 および土坑 223 に壊されている。南北 1.7 m 以上、東西約 3 m、深さ約 1.3 m を測る。埋土は暗褐色砂質土で、下層に中世ベース土の黄褐色シルトブロックを多量に含む土が堆積していた。遺物は土師器皿、須恵器鉢・甕、輸入磁器椀、瓦質土器鉢・盤などが出土した。土取り穴とみられる。

土坑 193 1 区北東の土坑 192 南側で検出した。不整形を呈する。南北約 4.2 m 以上、東西約 2.1 m 以上、深さ約 1.6 m を測り、底面西に隅丸方形の深さ約 0.3 m の窪みがある。埋土は黒褐色粘質土などである。遺物は土師器皿、須恵器鉢・甕、輸入陶器椀・皿・壺、瓦器椀、瓦質土器鍋・盤などが出土している。土取り穴とみられる。

土坑 253 1 区北半中央の集石 90 北東付近で検出した。南北約 0.9 m、東西約 0.8 m、深さ約 0.5 m、ほぼ円形を呈する。埋土は土師器や炭を少量含む暗褐色砂質土などである。柱当たりの痕跡はなく、対になるとみられる土坑 254 とほぼ同じ、中央が少し窪む堆積状態であった。土師器皿、須恵器甕、平瓦の小片が出土した。

土坑 254 (図 14) 1 区中央で検出した不整形土坑である。南北約 0.9 m、東西約 1 m、深さ約 0.5 m、埋土は黒褐色系の砂質土や粘質土などの 5 層で、中層の中央が少し窪む。掘形壁面は

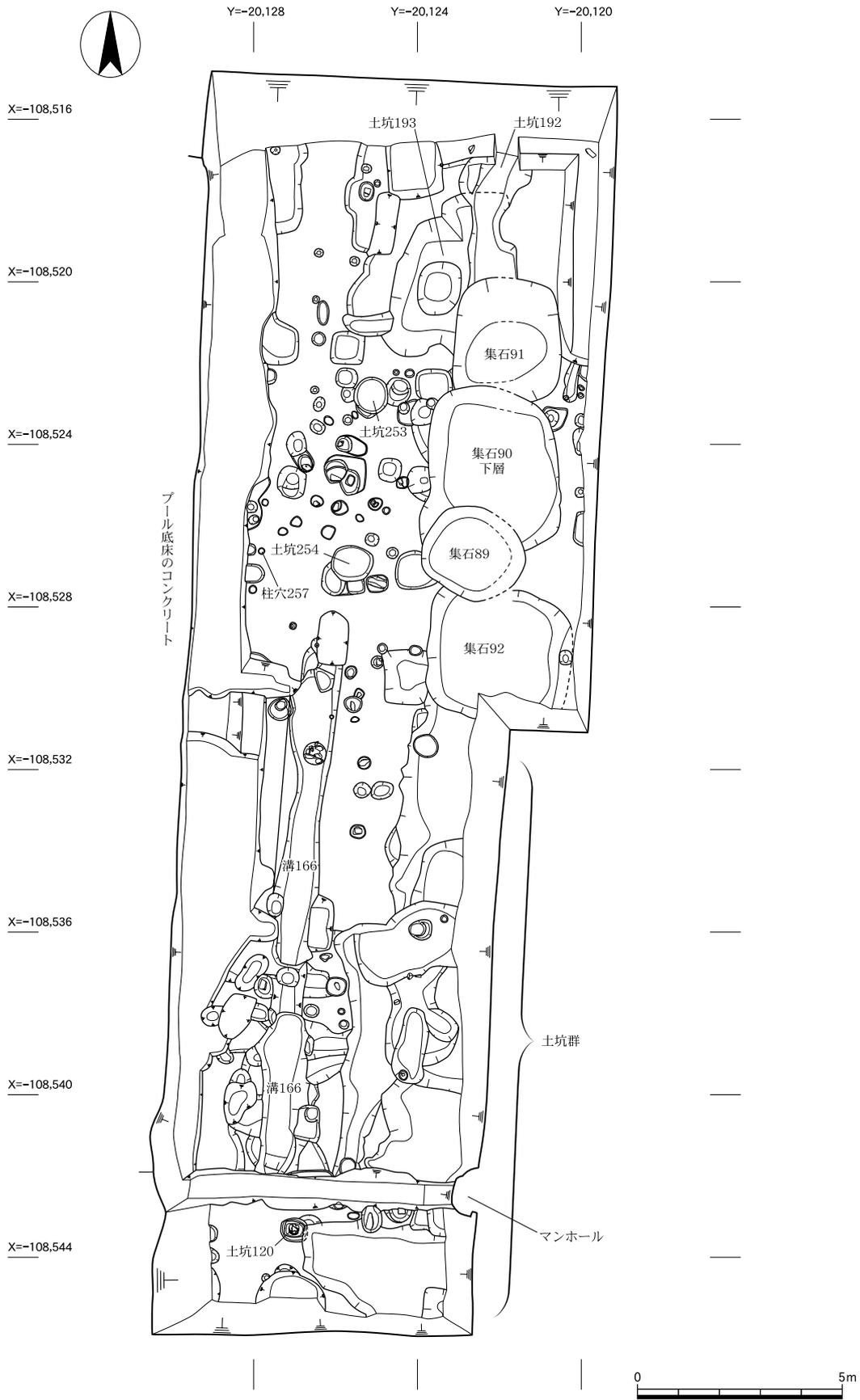


図13 1区中世第2面平面図 (1:150)

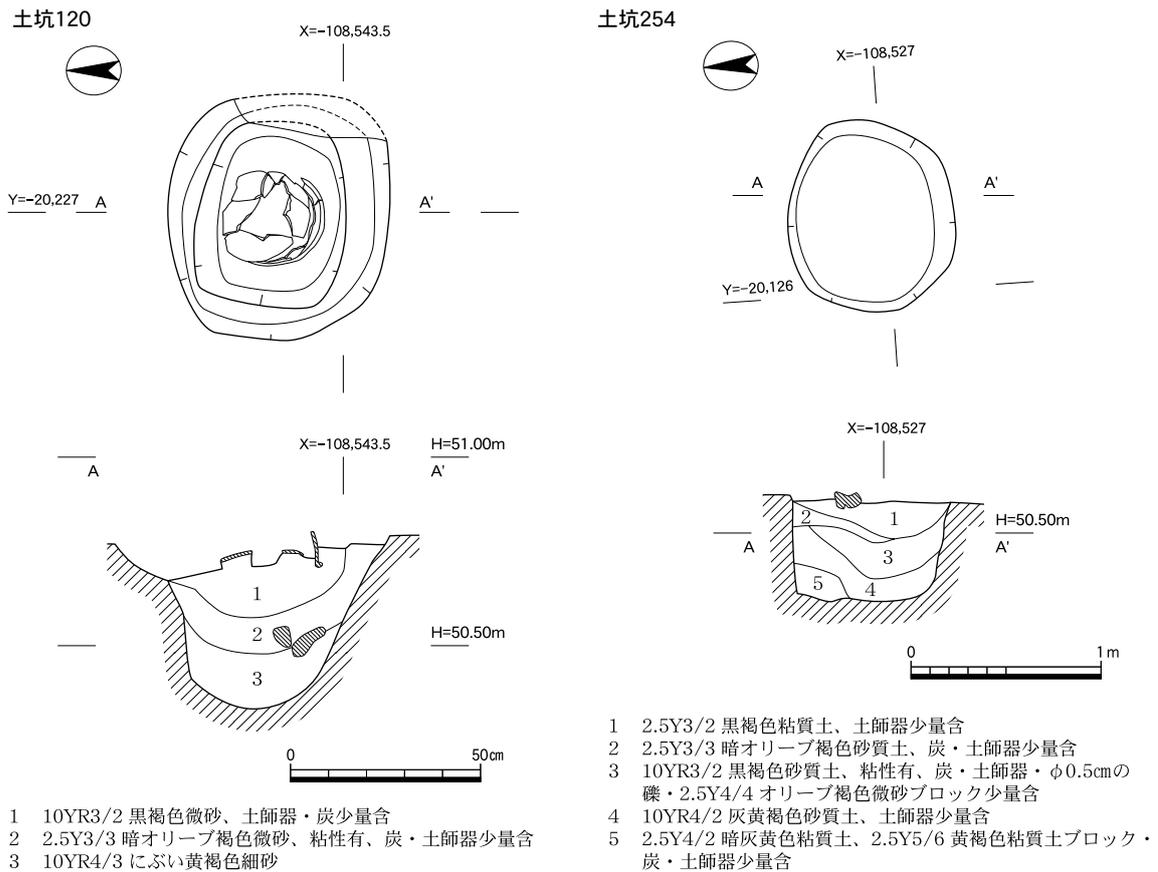


図14 1区土坑120実測図(1:20)、土坑254実測図(1:40)

垂直に近い。土坑253と規模が同じであることや、同時期の他の遺構の軸とこれら2つの土坑を結ぶ軸方向が一致する。よって、一对の遺構で門などの柱跡の可能性が考えられたが、柱当たりの痕跡は確認できなかった。土坑253との中心間は約4.5mの2間半である。遺物には土師器皿、須恵器鉢・甕、焼締陶器甕、輸入磁器碗の小片がある。

土坑群 集石92より南の東壁に沿って検出した。南北方向に15m以上にわたって連なり、各土坑は南北約3m、東西1.5m以上、深さ0.6～0.8mの規模を持つとみられる。土坑群の中心軸は東へ約4.5°振れている。埋土はオリーブ褐色砂質土、黒褐色砂質土などで、12世紀後半～13世紀前半の土師器皿などの小片を包含する。いずれも土取り穴と考えられる。

溝166 1区中央西寄りで検出した南北方向の溝である。長さ16m以上、幅0.5～1m、深さ0.4～0.45m、中心軸は真北より東へ約4.5°振れる。南から3分の1の部分が1m程度攪乱で壊されている。北端の溝底が浅くなり、途切れてなくなっている。南端も浅くなりかけた部分が攪乱によって壊されているが、それより南側で続きを確認していないことから、長さは16mを少し超える程度であるとみられる。上層埋土は暗オリーブ褐色粗砂、下層は暗褐色砂質土で、滞水していた形跡はみとめられなかった。遺物は土師器皿、須恵器甕、焼締陶器甕、輸入磁器碗・皿、瓦質土器鍋・羽釜などが出土した。

柱穴257 1区中央西で検出した。直径約0.15m、深さ約0.2mの円形を呈する。埋土は暗褐色砂質土で、柱当たりは確認できなかった。砥石が出土している。

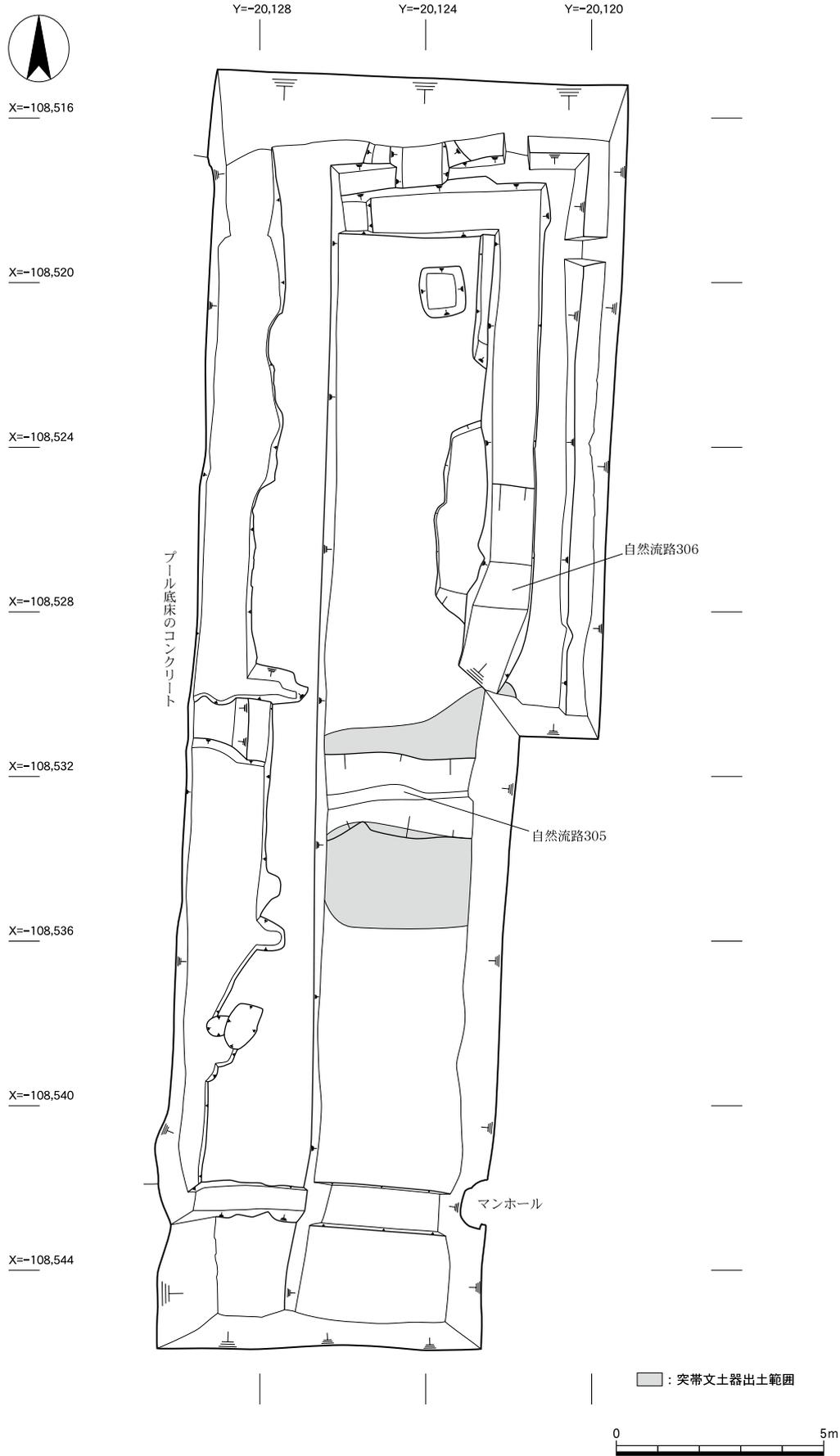


図 15 1区下層遺構面平面図 (1 : 150)

4) 下層遺構面の遺構 (図 15、図版 3)

調査区中央付近で確認した。自然流路 305 は縄文時代晩期末の土器包含層 (東壁 73 層) を切り込んでおり、自然流路 306 は 2 区で縄文時代晩期前葉の土器が出土した層 (北壁 18 層) と同一層である東壁 78 層直下から成立していることから、縄文時代に関連する遺構として記述する。

自然流路 305 1 区中央で検出した東西方向の流路跡である。検出時は長さ 3.5 m 以上、幅約 2 m、深さ約 0.3 m であったが、東壁断面で確認したところ、幅約 2.5 m、深さは約 0.8 m であったことがわかった。この流路自体は下層の縄文晩期土器を包含する東壁 73 層を切り込んでいたため、土器が一部肩口に張り付いたように出土した。埋土は東壁 61～63 層の砂礫とシルトの互層である。

自然流路 306 1 区中央北寄りで検出した東西方向の自然流路である。東壁際の断割で確認した。長さ 1.5 m 以上、幅 4.2 m 以上、深さ約 0.9 m である。黄褐色系の微砂～粗砂が互層になって堆積し、所々に直径 1～5 cm の礫を層状に含む。縄文時代晩期前葉とみられる土器が出土した 2 区北壁 18 層が 1 区東壁 78 層に対応し、自然流路 306 は東壁 78 層の直下から成立していることから、それ以前に形成されたとみられる。遺物は出土していない。

縄文土器包含層 (東壁 73 層) 1 区中央の自然流路 305 周辺に広がる褐色粘質土層である。南北約 5 m、東西約 3.5 m 以上、包含層の最大厚は約 0.15 m を測る。上層の土壌化した層は 1・2 区で確認したが、縄文時代土器を包含する層はここだけであった。晩期末の突帯文土器片約 30 点とサヌカイト剥片 1 点が出土した。なお、遺物の項 (32 頁) で、東壁 72 層出土とした縄文土器は、73 層との境目に堆積していたものである。そのため、時期差などはない。

(3) 2 区の遺構

1) 基本層序

2 区の基本層序 (図 17、北壁 Y=-20,141 付近) は、現地表から 1 m までが現代盛土、1.1 m までが黒褐色砂質土の近世耕土 (2 区北壁 1 層)、1.6 m までが暗褐色砂質土の中世遺物包含層 (2 層)、1.8 m までがにぶい黄褐色微砂～シルトの中世面における地山相当層 (15 層)、2.3 m までがにぶい黄橙色細砂～粗砂の「真砂」 (16 層)、2.35 m までが暗褐色粘質土の土壌化層 (17 層)、3 m までがにぶい黄色シルト～微砂 (18 層) で、その下層が黄褐色粗砂礫 (19 層) となる。16 層から弥生時代前期土器、17 層からは弥生前期とみられる土器小片、18 層からは縄文時代晩期前葉とみられる土器が出土している。

2 区では、中世面の地山相当層 (15 層) まで掘り下げた段階で遺構を検出した。

2) 中世遺構面の遺構 (図 18、図版 4)

この調査区の半分を大型土坑が占めており、土坑以外の部分では小型の土坑数基と柱穴を十数基確認した。

土坑 33 2 区中央北半で検出した。南北 2.4 m 以上、東西 3.3 m 以上、深さ 1.2 m で、東側に別の土坑が重なっている。土坑の大半は調査区外である。埋土は暗褐色系の砂質土を主体とし、

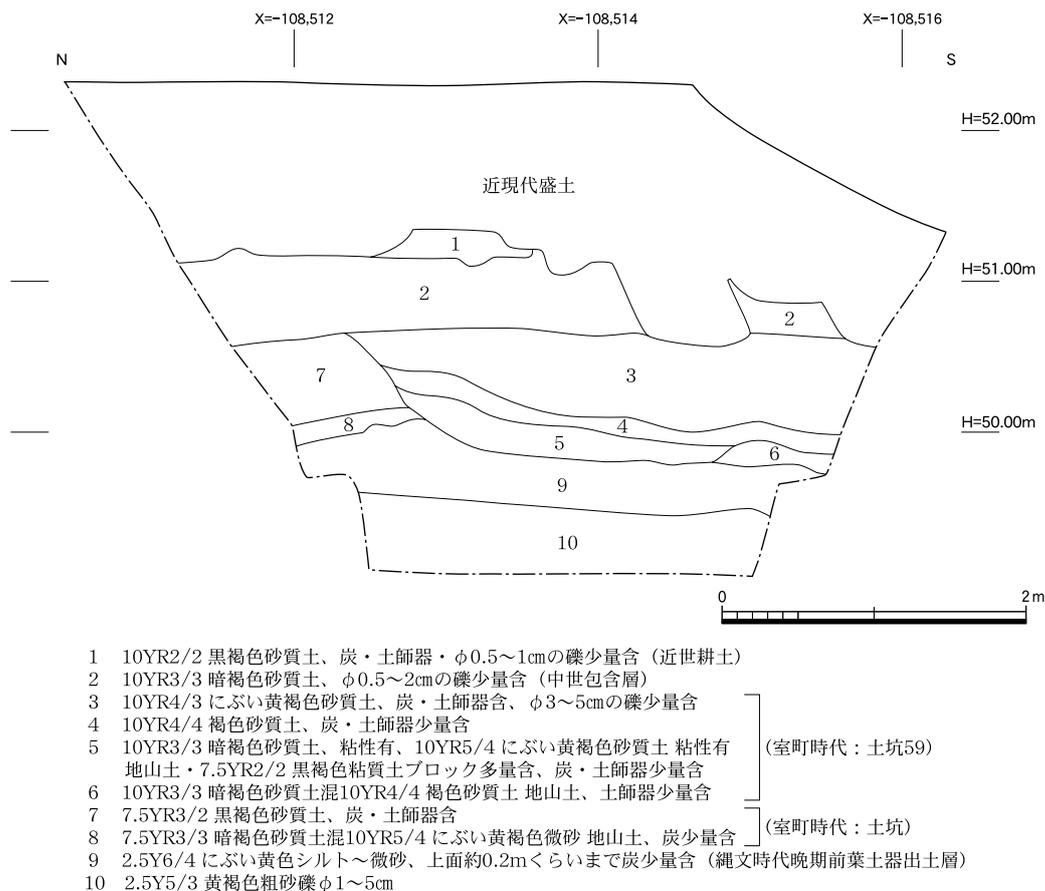
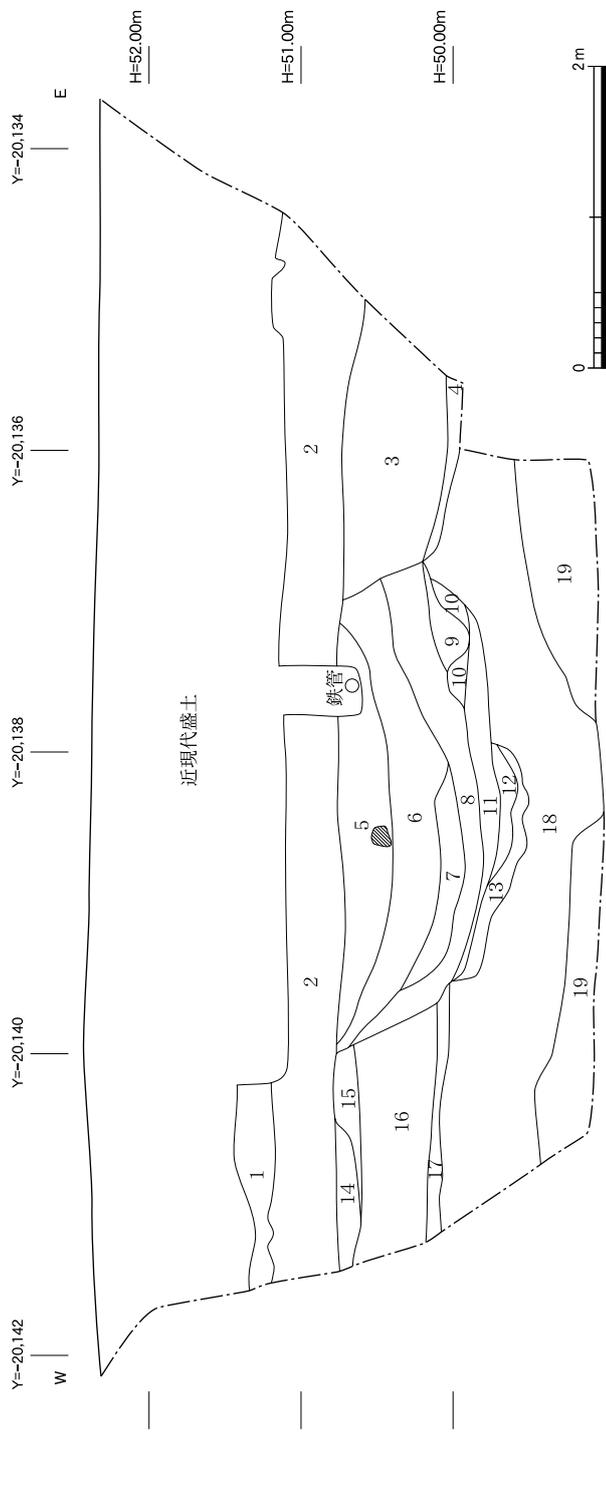


図 16 2区東壁断面図 (1:50)

下層に近い所で土師器皿が大量に集積した層 (北壁7層)があった。最下層には、炭や土師器片を少量含む埋土が堆積していたが、その層を中世の地山相当層をブロック状に多く含む埋土 (同11層)によって完全に覆われていた。このような堆積の状況から、掘削後すぐに埋められなかったと想定できる。遺物が大量に出土しており、一時期はゴミ捨て穴になっていたとみられる。大量の土師器皿を中心に、須恵器鉢・甕、焼締陶器甕、輸入磁器椀・皿、輸入陶器鉢、瓦器椀、瓦質土器鍋・羽釜などが出土している。

土坑 59 2区東で検出した。南北 3.5 m以上、東西 2.3 m以上、深さ約 1.4 mである。中世面の地山相当層であるにぶい黄褐色砂質土を多く包含する暗褐色砂質土などが埋土となっている。遺物は土坑 33 とは対照的に土師器皿がほとんどなく、大半は須恵器甕や焼締陶器甕など硬質遺物に占められていた。土取り後に、ゴミ捨て穴になっていたとみられる。

柱穴 37・60・61・62・63 2区西半から中央付近で検出した礎石をもつ柱穴である。直径 0.3 ~ 0.4 m、深さ 0.1 ~ 0.15 mで、底面に厚さ 10 cm程度の平らな石を据えている。柱穴 63 のみ平らな石を2段に重ねていた。柱穴が並ばないので、建物跡か柵跡かの判断はつかないが、何らかの施設が存在していたとみられる。柱穴 37・60・61 から土師器皿などの小片が出土している。



- | | | |
|--|-------------------------------------|---|
| <p>1 10YR2/2 黒褐色砂質土、炭・土師器・φ0.5~1cmの礫少量含 (近世耕土)</p> <p>2 10YR3/3 暗褐色砂質土、φ0.5~2cmの礫少量含 (中世包含層)</p> <p>3 7.5YR3/2 黒褐色砂質土、炭・土師器含</p> <p>4 7.5YR3/3 暗褐色砂質土混10YR5/4 にぶい黄褐色微砂 地山土、炭少量含</p> <p>5 10YR3/3 暗褐色砂質土、炭・φ2~10cm礫少量・土師器含</p> <p>6 10YR3/2 褐色微砂、粘性有、炭・土師器・白磁含</p> <p>7 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土、炭・土師器多量含</p> <p>8 10YR3/3 暗褐色粘質土、炭・土師器少量含</p> <p>9 10YR3/4 褐色砂質土、炭・土師器少量含</p> <p>10 10YR3/4 褐色砂質土混、10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土</p> <p>11 10YR3/3 暗褐色砂質土、炭・土師器少量、2.5Y6/4 にぶい黄色シルトブロック含</p> <p>12 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土混10YR4/4 褐色微砂、炭少量含</p> <p>13 2.5Y3/2 黒褐色粗砂、炭・土師器少量含</p> | <p>(室町時代：土坑)</p> <p>(室町時代：土坑33)</p> | <p>14 10YR4/2 暗灰黄色砂質土混粗砂、土師器少量含 (中世：土坑)</p> <p>15 10YR5/4 にぶい黄褐色微砂~シルト</p> <p>16 10YR6/4 にぶい黄褐色細砂~粗砂 真砂 (弥生時代前期土器出土層)</p> <p>17 10YR3/3 暗褐色粘質土、土壌化層 (弥生時代？土器出土層)</p> <p>18 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト~微砂、上面約0.2mくらいまで炭少量含 (縄文時代晩期前葉土器出土層)</p> <p>19 2.5Y5/3 黄褐色粗砂礫 φ1~5cm</p> |
|--|-------------------------------------|---|

図 17 2区北壁断面図 (1:50)

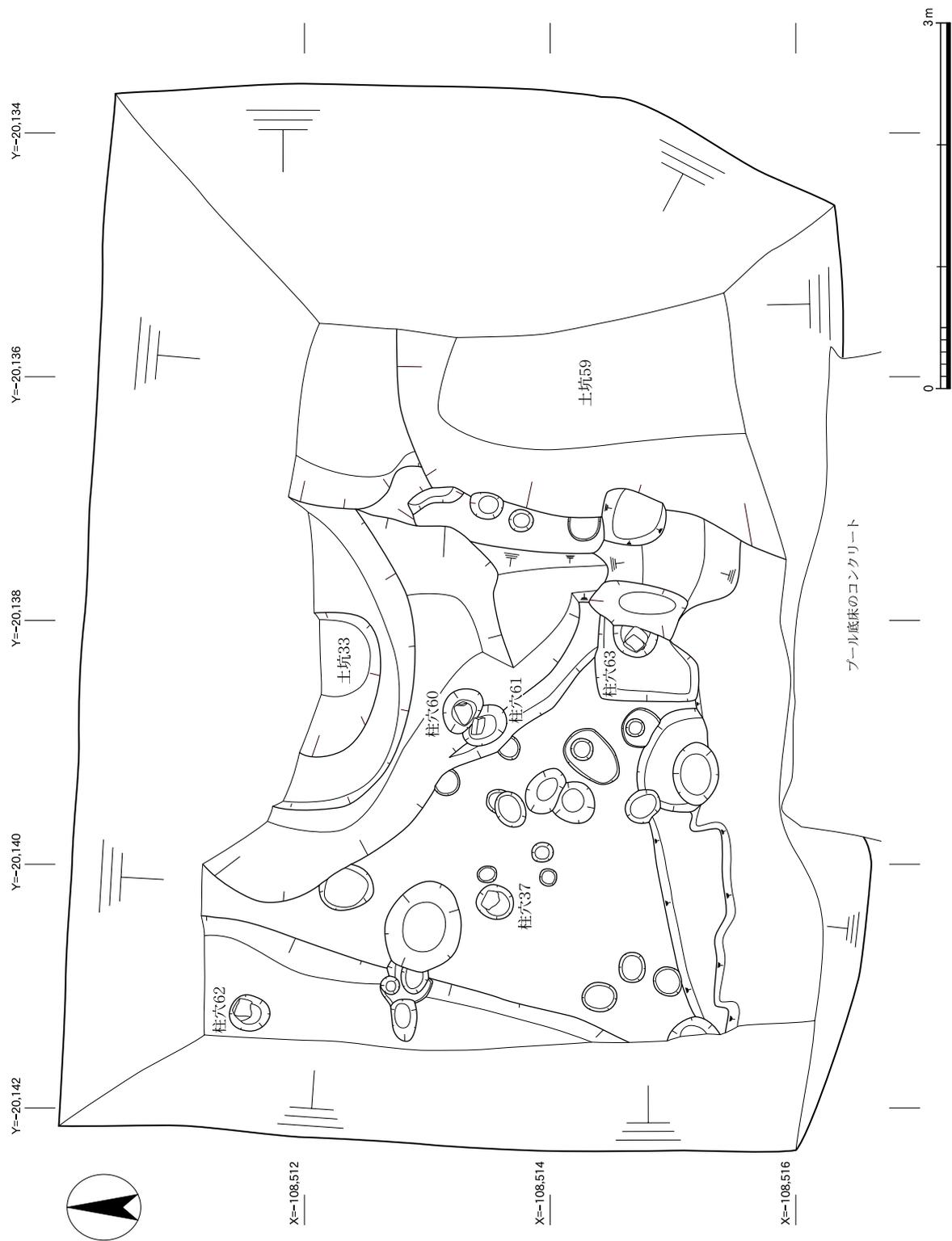


図 18 2区中世遺構面平面図 (1 : 50)

5. 遺 物

(1) 遺物の概要 (表3)

遺物は1・2区合わせて、整理箱に50箱出土している。そこから、鉄製品1箱、骨・炭2箱分を抽出した。縄文時代晩期の土器は、1区の縄文時代から弥生時代に堆積したとみられる土壌化層およびその直下の遺物包含層から、少量ではあるが出土した。晩期末の突帯文土器深鉢口縁部や体部、底部片である。長さ2cm程度のサヌカイト剥片も1点確認した。また、2区の土壌化層直下のシルト～微砂層中(図17、北壁18層)から、縄文時代晩期前葉とみられる土器が2点出土した。弥生時代前期の土器は、2区の北壁16層から磨滅していない甕体部片が出土している。さらに、古墳時代の須恵器片が後世の遺構から数点出土している。

平安時代から鎌倉時代前期の土器は、後世の遺構から出土したものがほとんどであるが、1区中世第2面の調査区南東部で検出した土坑群から、小片ながら12世紀後半～13世紀前半の土師器片が出土している。その他は、土師器皿や緑釉陶器椀・皿、白色土器高坏、白磁椀・合子が目立つ。平安時代の遺構の存在を示唆する遺物といえよう。

鎌倉時代後期の遺物は、1区の集石90・91などの大型土坑から土師器皿を中心として、土師器鉢、須恵器甕・鉢、瓦器椀、瓦質土器鍋・羽釜・盤、白磁椀・皿、青磁椀、焼締陶器甕、硯、銭貨などが出土している。集石90の埋土を篩にかけたところ、多くの鉄釘と少量ではあるが魚や鳥の骨を採集できたその他の遺物では、製鉄をした際に出る鉄滓やガラス玉などが出土している。

室町時代前期の土器は、土師器皿、須恵器鉢、瓦質土器鍋・羽釜、焼締陶器甕などがあり、柱穴や土坑、整地層などから出土した。2区の土坑33からは、土師器皿が多く出土している一方、隣の土坑59からは須恵器甕などの硬質遺物が多く出土している。

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代 ～古墳時代	縄文土器、弥生土器、須恵器		縄文土器18点、弥生土器1点、須恵器2点		
平安時代	土師器、須恵器、輸入磁器、瓦など		軒丸瓦1点、軒平瓦4点、丸瓦1点、埴1点		
鎌倉時代 ～室町時代	土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦、土製品、ガラス製品、石製品、銭貨、鉄製品など		土師器170点、須恵器8点、瓦器5点、瓦質土器18点、施釉陶器2点、焼締陶器1点、輸入陶磁器17点、土製品3点、ガラス製品1点、石製品10点、銭貨4点、鉄製品11点		
合 計		62箱	278点 (7箱)	2箱	53箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後に遺物を抽出したため、出土時より12箱多くなっている。

(2) 土器類

1) 縄文時代から古墳時代の土器

2区北壁18層出土土器(図19、図版5-1・17) 1は浅鉢胴部とみられる破片である。上方に断面形状が丸い、幅4mmの横線を引く。外面を丁寧に磨き、内面をなでる。17は浅鉢の底部とみられる。平底で、外面を丁寧に磨き、内面をなでる。1と同一個体とみられる。

1区縄文土器包含層出土土器(図19、図版5-2~16・18) 2~9は突帯文土器深鉢の口縁部片である。器形は口縁が外反するもの(2)と、口縁がほぼ直立するもの(3~9)に分類できる。突帯は口縁端部外面の直下または口縁端部に接して貼り付けられている。10~16は突帯文土器の深鉢胴部片である。口縁部分は残存しておらず、突帯の貼り付けられた胴部上半のみが残っていたが、本来は突帯が口縁部にも貼り付けられた二条突帯文土器になる。2~16の突帯断面は貼り付け時のナデやオサエによって2種類に分けることができる。2・10・11・13・15は突帯上下を押さえながら、横方向になでて貼り付けるため、断面頂点が貼り付け面の中心に位置する正三角形を呈する。3~9・12・14・16は突帯上部を押さえながら突帯を貼り付けるので、頂点が貼り付け面の下方にくる直角三角形形状をなす。後者には口縁端部を折り曲げて突帯を作り出したとみられる7も確認できた。突帯上の刻み目は、4・5・9・14がD字、6・13・15が小D字、3・8・12・16が間延びしたD字、2がV字で、細かく刻むものが主体となっている。11は欠損しているため、刻みの有無は不明である。調整は板状工具によるナデまたはユビナデが主体である。9・10の外面は板状工具による下から上または斜め方向のナデ調整が明瞭である。10は工具痕の様子から、突帯が器面調整後に貼り付けられたことがわかる資料である。4は突帯下部に内外面から開けられた直径0.5cmの孔がある。補修孔とみられる。18は深鉢底部である。平底で、立ち上がり部分が括れて、胴部中ほどにむかって大きく開く器形を呈する。外面を板状工具によってケズリ調整し、内面を板状工具で丁寧にナデ調整している。底面はナデ調整である。3~7・9・10・15は1区東壁73層の遺物包含層、4~6・8・11~14・16・18は1区東壁72層から出土した。土器の時期は、1・17は縄文時代晩期前葉の滋賀里Ⅱ式土器、2~16・18は縄文時代晩期末の長原式土器に比定できる。

2区北壁16層出土土器(図19-19) 19は甕または鉢の胴部片とみられる。外面を縦方向にハケメ調整したのち、頸部とみられる位置に、篋描沈線を2本配置する。内面調整は横から斜め方向のハケメである。2区中世面地山相当層である北壁第16層(図19)から出土した。時期は弥生時代前期新段階とみられる。

その他の古墳時代土器(図19-20・21) 20は須恵器壺または甕とみられる口縁端部片である。口縁部内面に篋で凹線を施す。外面を櫛で斜め方向に軽く等間隔に刻む櫛描列点文を施し、その後口縁端部外面に篋を使用してナデ調整している。21は須恵器壺または甕などの外反する口縁部を持つ器形の破片である。外面の上段に篋で斜線を引いた後、2本の横方向の凹線を引き、下段に櫛描波状文を施す。内面は自然釉が発生している。20・21ともに中世の遺構に混入して出土し

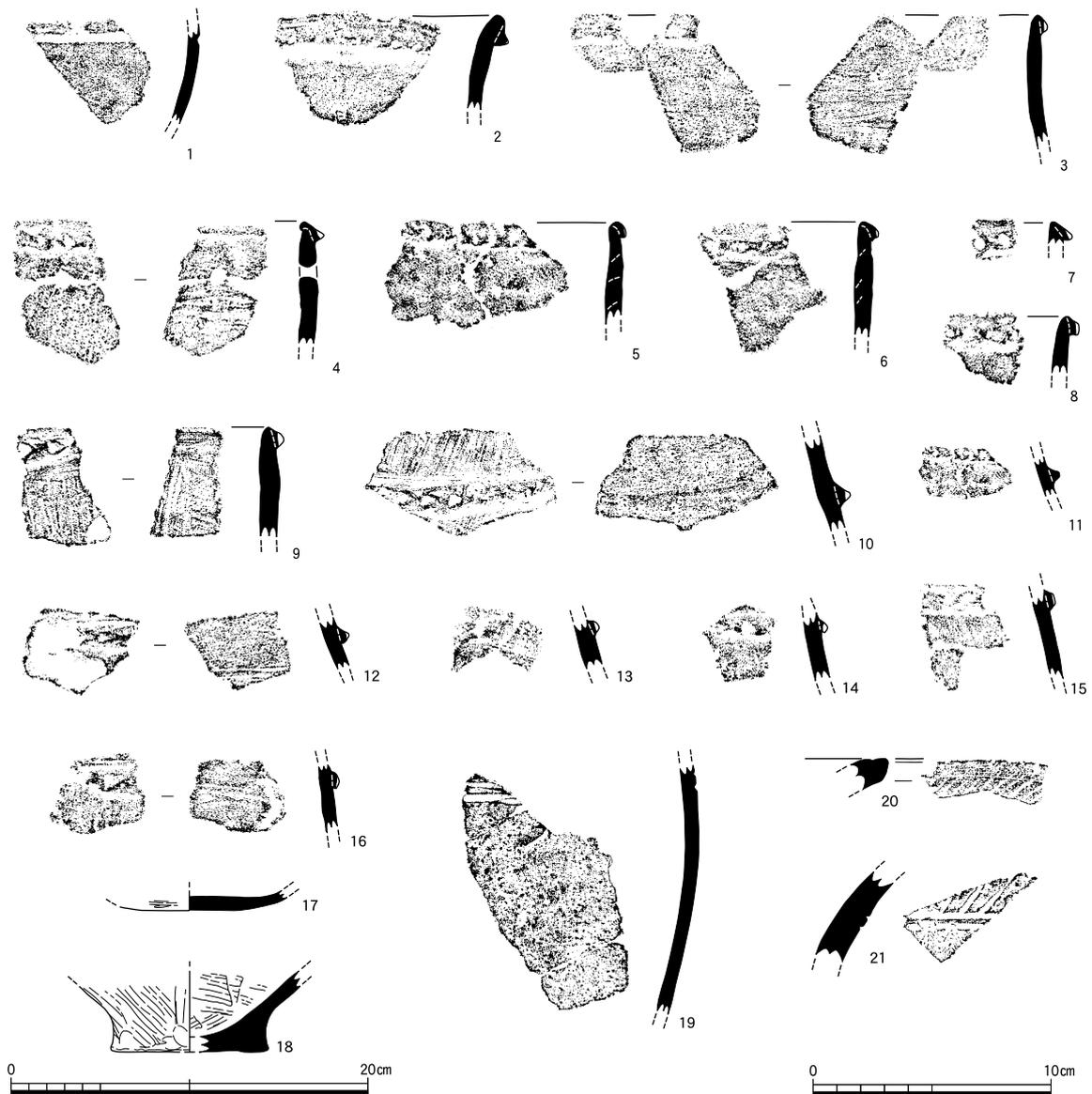


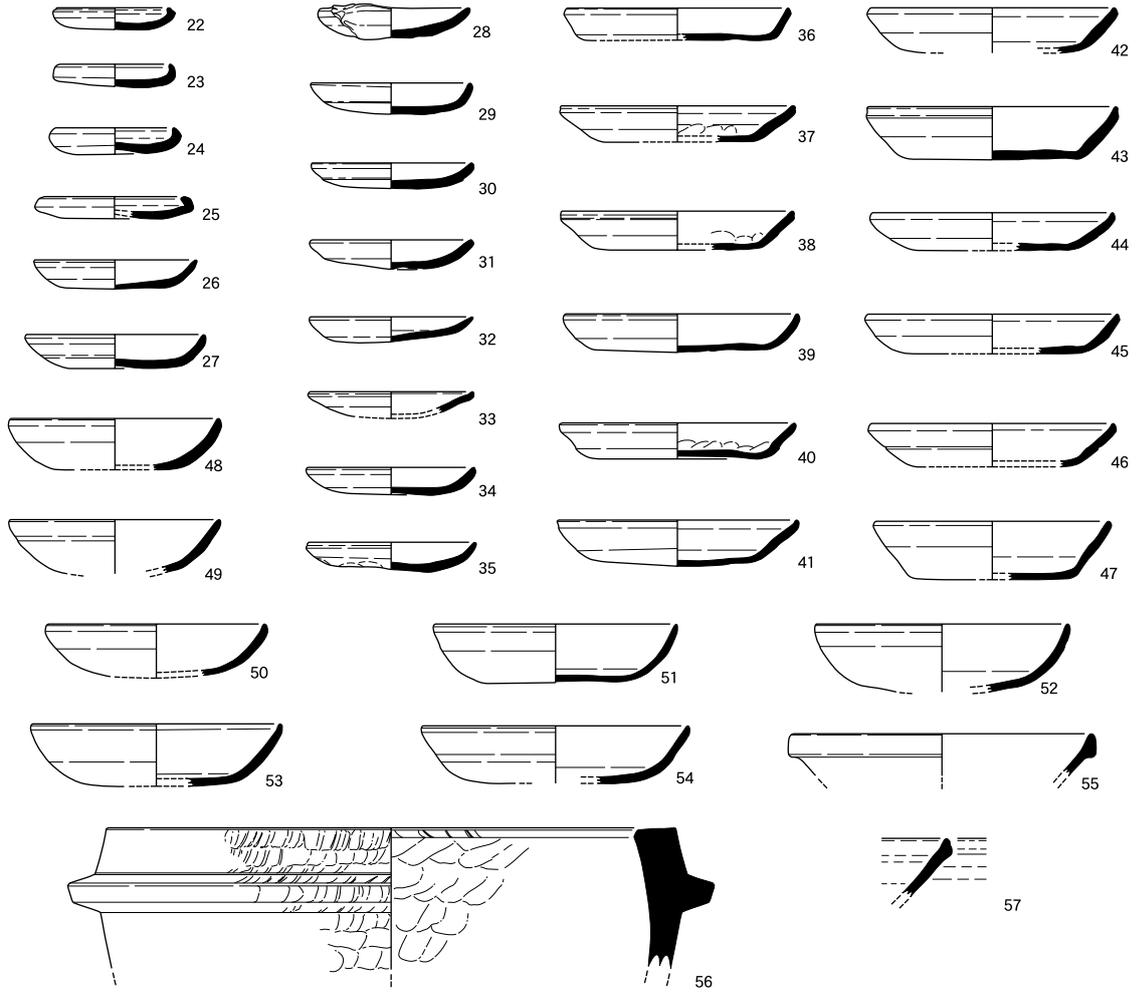
図 19 縄文時代から古墳時代出土土器実測図（1：3、17・18のみ1：4）

ており、6世紀前葉とみられる。

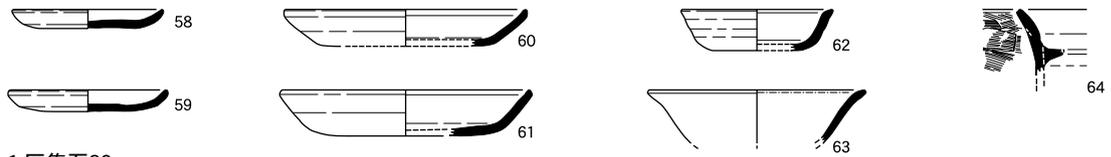
2) 鎌倉時代から室町時代の土器

1区集石91出土土器（図20、図版6-22～57）22～54は土師器皿である。22～24・26・27・48～54がいわゆる白色系の土器、25・28～47がいわゆる赤色系の土器である。後者に中間色の黄褐色系を呈する土器も含めている。口径は22～24が5.8～6.4cm、25～35が7.2～9.4cm、36～46が11.6～13.1cm、48～50が10.8～11.4cm、51～54が12.7～14.0cmである。22～25はコースター形を呈する。26～35は口縁部外面を一段化したナデ調整する小型のものである。33は口縁端部をつまみ上げる。28は粘土塊がついたままで、一部成形していない。36～46は器高が1.9～3cm以内に収まり、口径が大きく平たい大型の土器で、口縁部外面を一段になでて、口縁端部をつまみ上げる。通常、器高に対する口径の比率は1：6となるが、47は

1区集石91



1区集石92



1区集石89

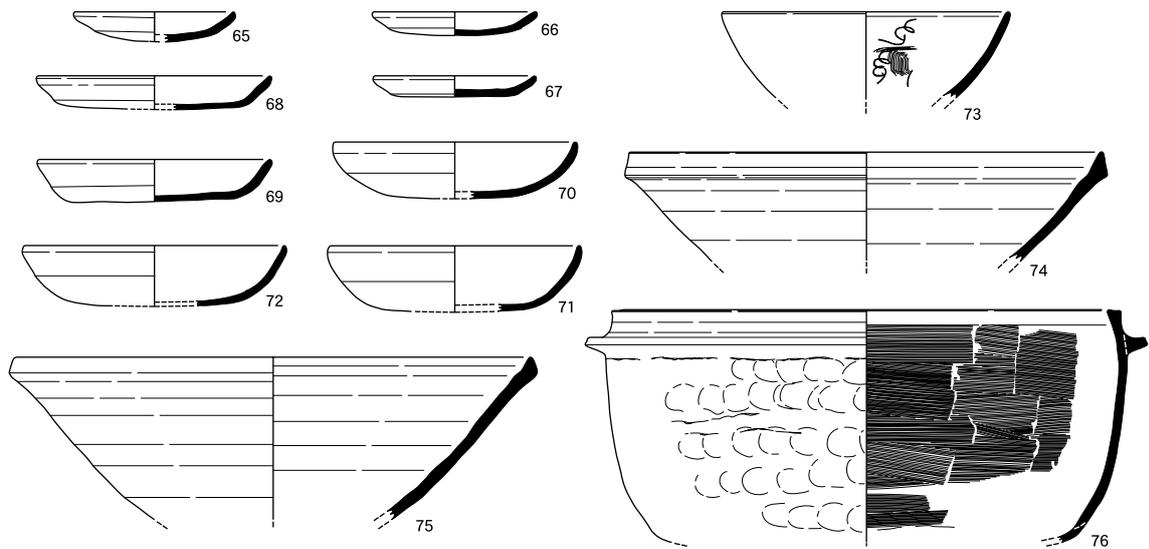


图 20 1区集石 89·91·92 出土遗物实测图 (1:4)

赤色系土器の形状を示しながらも、比率が1：4と小さい。48～50は口縁部外面に一段ナデを施す中型の土器で、わずかに端部をつまみあげる。51～54は大型の土器で、48などと同形を呈する。54は外面のナデが強い。55は白磁碗である。口縁断面が三角形を呈する。内外面に透明釉を掛ける。56は滑石製の石鍋である。全面に工具の調整痕が残る。内面は右上り、外面は横方向へ調整を行う。磨耗はほとんどしていない。時期は13世紀中頃である。

1区集石92出土土器(図20-58～64) 58～61は土師器皿である。すべて赤色系で、58・59の口径はそれぞれ7.8cmと8.2cm、60・61の口径はそれぞれ12.6cmと13.0cm、外面は一段化したナデで端部をつまみ上げる。62は小型の瓦器碗である。内面から外面中程まで、丁寧にユビナデするが、粘土紐の積み上げ痕が明瞭に残る。口縁端部内面は平坦である。63は白磁皿である。口縁端部は口剥ぎで、口縁部外面に釉溜が確認できる。大きく外反する器形を呈する。64は瓦質土器羽釜である。内面をハケメ調整し、外面口縁部をユビナデ調整、鏝を貼り付け時になでる。鏝下部まで煤が付着する。口縁部が内湾する器形である。時期は13世紀中頃から後半とみられる。

1区集石89出土土器(図20-65～76) 65～72は土師器皿である。65～67は小型の赤色系、68・69は大型の赤色系、70～72は大型の白色系である。口径は65～67で8.3～8.6cm、68・69で12.2cm、70～72で12.7～13.6cmである。73は龍泉窯とみられる青磁碗で、内面に沈線や毛彫りで印刻文を施す。74・75は東播系挿鉢である。内外面は回転ナデで、口縁端部をつまみ上げる。76は瓦質土器羽釜である。口縁部はほぼ直立し、頸部外面に鏝を貼り付ける。口縁部を横ナデ、内面下部をハケメ、外面胴部にオサエを施す。外面胴部には粘土接合痕やそれをナデ消した痕跡が認められる。鏝下方から外面下部にかけて、煤がびっしりと付着する。時期は13世紀中頃から後半である。

1区集石90出土土器(図21・22、図版7-77～141) 77～128は土師器皿である。77～81・91～104・117～128が白色系、82～90・111～116が赤色系となる。口径は77～81が4.6～6.3cmの小型、82～95が7.5～9.0cmの小型、96～100が7.4～8.0cmの小型、101～104が10.5～10.8cmの中型、105～128が11.6～13.4cmの大型である。通常、器高に対して口径が1：4であるが、128はその比率が1：5と白色系大型の中でも器高が低いものである。105・106・126に油煙痕が残存する。特に、105内面下部には、長さ1cm程度の黒色異物が付着しており、焼け焦げた灯明芯とみられる。129は土師器鉢で、底部が小さく、胴部中程から口縁が大きく開く。口縁部と底面は丁寧になでるが、それ以外は粘土紐痕跡を明瞭に残す。130～132は瓦器碗である。130・131はそれぞれ口径が9.6cmと10.0cm、器高が2.85cmと3.0cmである。作りが丁寧で、口縁端部が直立する碗である。内面から口縁部外面にかけて、ヨコナデのちミガキ調整を行う。ミガキ調整は密ではないが、先の細い工具を使用している。その後、底から口縁にかけてナデのような幅1cm程度の調整が2本単位で確認できる。外面は粗いナデ調整後に、縦方向の工具痕が付く。131の底面内面には菊花文様の暗文が描かれている。132は内面から外面口縁部にかけてはナデ調整、外面下部はオサエ調整である。内面などのミガキ調整は磨滅のため、確認できない。133は胴部中程で屈曲し、口縁端部が外反する器形を呈する白磁皿である。内面の屈曲部に沈線を施す。

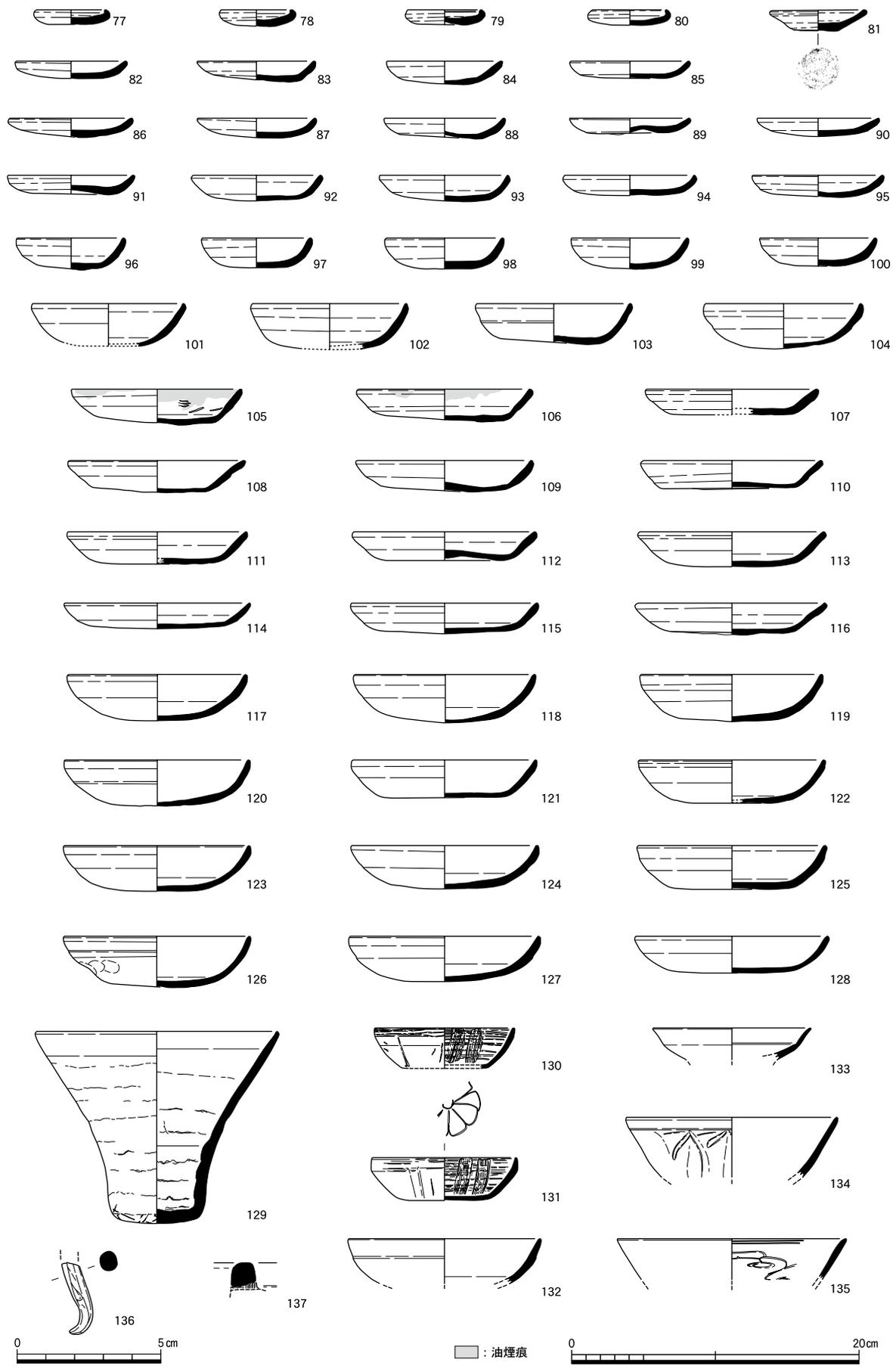


図 21 1区集石 90 出土遺物実測図 1 (1 : 4、136 のみ 1 : 2)

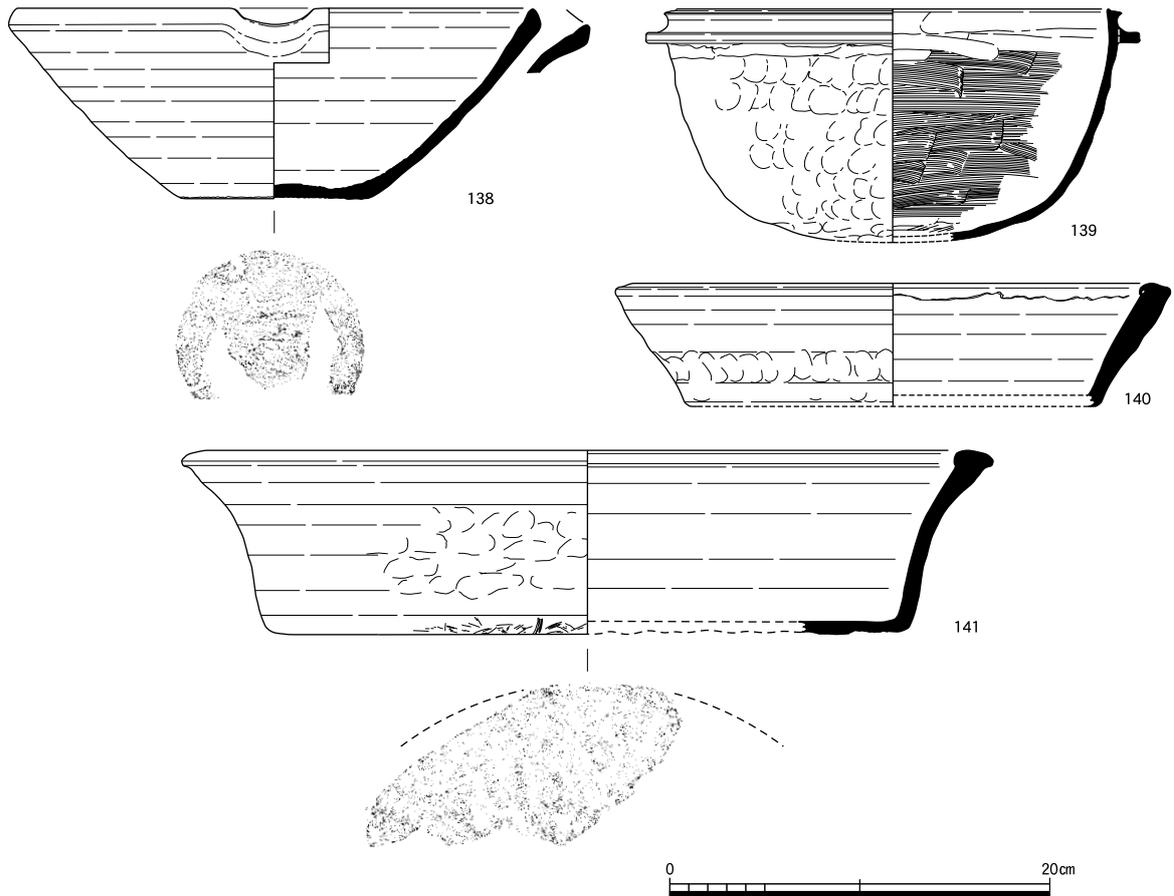


図 22 1区集石90出土遺物実測図2 (1:4)

透明釉が掛かっていたとみられるが、火災などにより2次的に焼けて白色化している。134・135は青磁碗である。134は外面に蓮弁を陽刻し、花卉の先端付近に横線を引く。花卉の横幅が広く、下方に下がっても収束しない。135は口縁端部内面に2本の平行沈線を施し、内面中央付近に流水文を陰刻する。緑色釉をかけるが、全面に貫入が入っている。136は瓦質土器脚付羽釜のミニチュアの脚部である。丁寧になでて面取りし、接地面は指で摘んで、折り曲げる。137は石鍋の口縁部片である。鏝より下は欠損している。鏝上部に補修孔が、内外面の両方から開けられており、内部に鉄製品の破片が付着していた。口縁部に入ったひび割れの広がりを抑えるため、孔と鉄製品（鏝か？）で補修した痕跡とみられる。138は東播系播鉢で、口縁部に片口が付く。内外を回転ナデ調整し、底部外面に回転糸切り痕とヘラ起こし痕を残す。接地面となっている底外面周縁部は、磨滅が著しく、使用痕とみられる。139は瓦質土器羽釜である。底面は丸く、緩やかに口縁部に向かって立ち上がる。口縁端部はなでによって窪む。鏝はナデによって、貼り付けられている。内面をハケメ調整し、その後底面をなでる。口縁内面から外面にかけて丁寧に横方向になで、外面をオサエでも特に押し引くような調整を加える。煤は鏝から下面に付着している。140・141は瓦質土器盤である。140は内外面を丁寧になで、外面下部をオサエで調整する。口縁端部は外面から強くなでて、内面に折り込んだような状態になっており、接合部が未調整のままである。141は内面を丁寧になでる。接地面には糞を長さ1～2cm程度に刻んだものや籾殻の圧痕が全面

にわたって残っていた。また、底部が黒色化していることから、焼成の際に、刻んだ藁を挟んで重ね焼きした痕跡とみられる。140・141 共に、火鉢に使用されたとみられ、内面でも特に底面付近に器面の剥離が目立つ。集石 90 からはこの 2 点以外にも、2～3 個体分の破片が出土している。時期は 13 世紀中頃から後半である。

1 区溝 166 出土土器 (図 23 - 142) 142 は青白磁の合子蓋である。外面に菊花文と側面に花卉を陽刻する。内外面に釉薬を流しかけ、口縁端部を釉剥する。内面調整は回転ケズリのちユビナデである。

1 区土坑 120 出土土器 (図 23 - 143 ~ 146) 143 ~ 145 は土師器皿である。143 は赤色系の小型で、口径 9.1 cm である。144 は赤色系の口径 13.1 cm を測る大型品で、口縁端部をつまみあげる。145 は白色系の大型で、口径 12.8 cm を測る。外面上部の横ナデが明瞭、端部は内湾する。146 は瓦質土器羽釜である。口縁部は内湾し、胴部は丸く張って、平底になるとみられる。鏝は貼り付けで、鏝周辺から口縁内面にかけて、丁寧にナデ調整を行っている。内面下部はハケメ、外面は指頭圧痕が明瞭に残っており、その中には押し引いたようになでた痕跡も確認できた。時期は 13 世紀中頃とみられる。

1 区土坑 193 出土土器 (図 23 - 147 ~ 160) 147 ~ 151 は土師器皿で、147 ~ 150 は赤色系、151 は白色系を呈する。147 は小型で口径 8.2 cm、148・149 はそれぞれ口径 10.6 cm と 10.8 cm で、口縁が大きく開き、端部をつまみあげは明瞭ではない。150 は頸部が丸みを持ち、口縁端部がつまみあげられている。151 は器高が高く、口縁が大きく広がる。体部の立ち上がりが直線的である点で、他の土器とは異なる。152 は白磁皿で、高台部分を欠く。釉薬は外面下部で途切れる。内面の屈曲部に回転による沈線を引く。153 は瀬戸・美濃系陶器の皿で、口縁部を口剥ぎする。底部は糸切りのち、高台を貼り付ける。154 は瀬戸・美濃系陶器の椀で、外面中ほどまで釉薬がかかる。底部は糸切りである。155 は瓦器椀である。内面から口縁部外面までに横方向の暗文が入り、外面下部をオサエ調整する。口縁端部内面に沈線を引く。156 は瓦質土器羽釜である。内面をハケメ調整したのち、口縁部内面から外面の鏝まで横方向に丁寧になでる。口縁端部内面にハケメ痕が残る。外面はオサエ調整である。157 は瓦質土器鍋である。口縁部内外面を丁寧になで、内面をハケメ、外面をオサエ調整する。158 は東播系播鉢で、内外面を回転ナデによって調整する。159 は石鍋である。調整痕が明瞭に残っており、ケズリの単位がわかる。内面は右上り、口縁部外面は反時計回り、外面下部や鏝は時計回りの方向に削る。鏝下方から外面下部にかけて、煤が付着する。160 は瓦質土器火鉢または盤である。内面を横方向に磨く。外面は磨滅が著しく調整は不明である。時期は 13 世紀中頃から後半とみられる。

1 区土坑 143 出土土器 (図 23 - 161 ~ 178) 161 ~ 175 は土師器皿である。161 ~ 167 は白色系、168 ~ 175 は赤色系である。161・162 はコースター形の小型、164・165 は器高が深い中型、166・167 は大型である。168 ~ 172 は小型の浅い皿で、扁平なものが多い。173 ~ 175 は大型で、173 は口縁端部をつまみ上げるが、口縁部が外反するのにつられて、大きく広がっている。163 は削り出し高台を持つ皿である。176 ~ 178 は瓦質土器である。176 は鉢で、内面

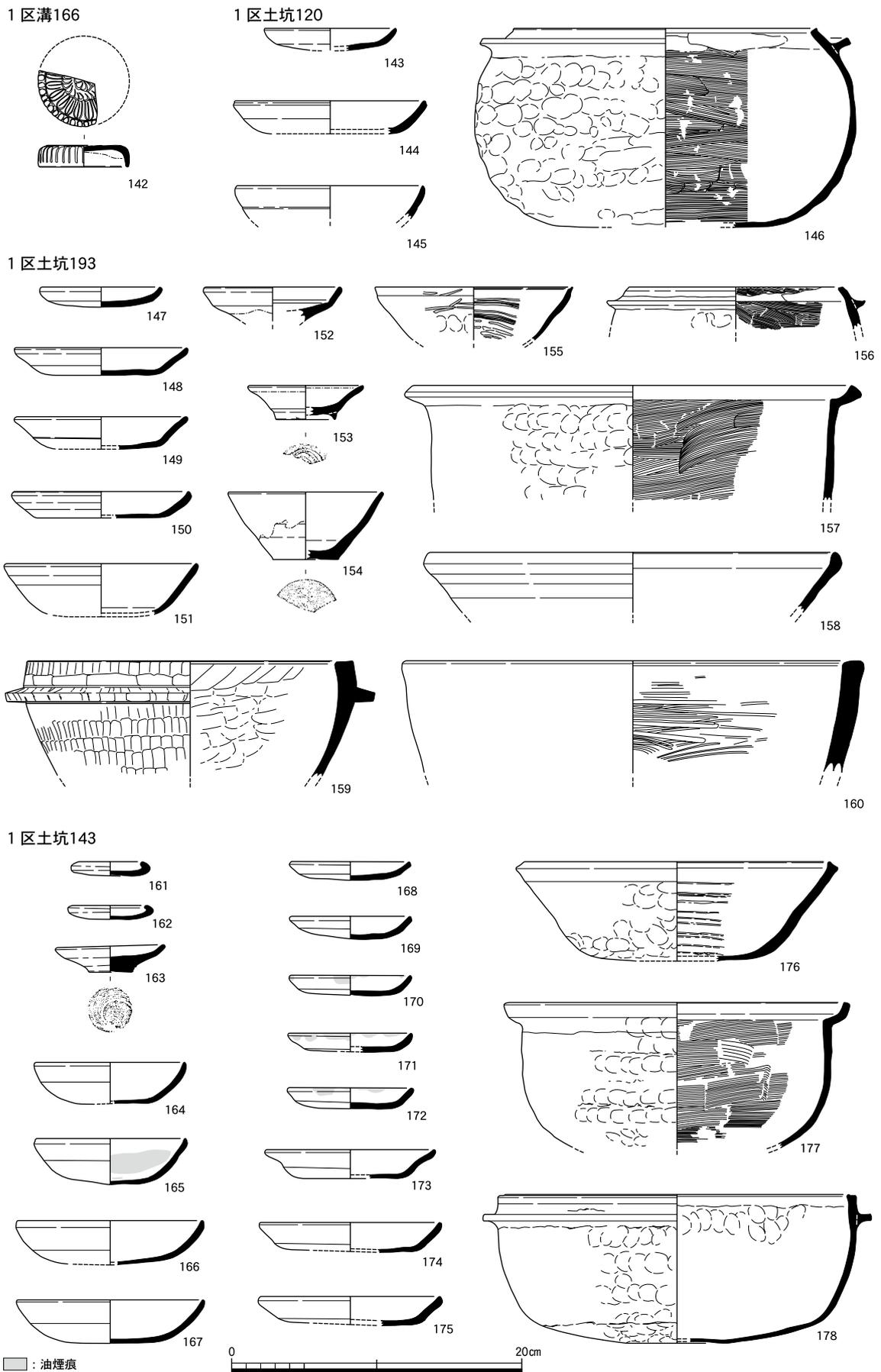


图 23 1 区溝 166、土坑 120·143·193 出土遺物實測圖 (1 : 4)

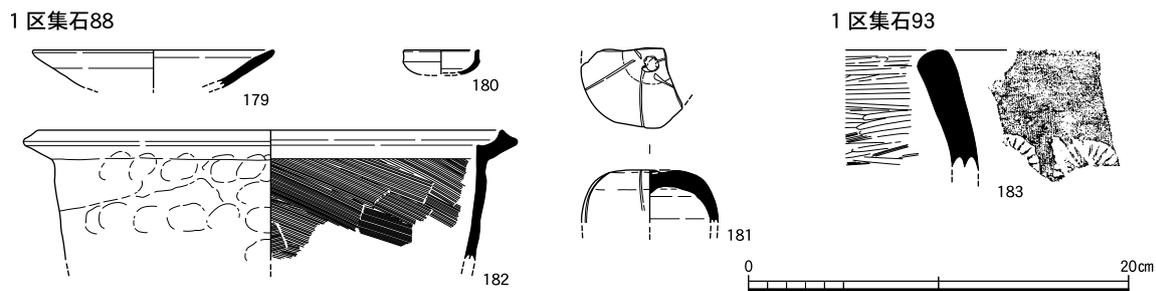


図 24 1区集石 88・93 出土土器実測図 (1:4)

から口縁部外面までなでた後、内面下部は横方向のミガキ調整を行う。外面下部はオサエ調整である。177 は鍋である。口縁部内外面をなでる。外面下部は横方向の連続したオサエ調整である。178 は羽釜である。鏝が貼り付けられた内面部分に、オサエの痕跡が認められる。外面下部はオサエ調整、底面近くに板状にして貼り付けた粘土の接合痕が残る。時期は 14 世紀前半である。

1 区集石 88 出土土器 (図 24 - 179 ~ 182) 179 は白色系の土師器皿である。口縁端部が外反する。180 は赤色系の土師質のミニチュア土器で、焙烙形を呈する。内面から口縁端部外面を丁寧になで、外面下部をオサエ調整する。181 は白磁の蓋である。口縁端部は欠損している。上方から下方に 5 本の沈線を施し、頭頂部に円形粘土を貼り付け、花卉に見立てている。水注の蓋とみられる。182 は瓦質土器鍋である。口縁部を丁寧になで、内面を細かい刷毛で調整し、外面をユビオサエする。外面に粘土紐をならすときに付いたナデ痕が明瞭に残る。土師器皿の時期は 15 世紀後半である。

1 区集石 93 出土土器 (図 24 - 183) 183 は瓦質土器火鉢である。内外面を丁寧に磨く。外面口縁部下方には、菊花文の刻印を施す。

2 区土坑 33 出土土器 (図 25、図版 8 - 184 ~ 229) 184 ~ 220 は土師器皿である。184 ~ 199・211 ~ 220 は白色系、200 ~ 210 は赤色系である。184 ~ 198 はいわゆるへそ皿で、口径 6.1 ~ 7.3 cm、199 は底面に回転糸切り痕が残りに、椀型を呈する。200 ~ 205 は器高の低い小型で、口径 7.1 ~ 7.9 cm である。206 ~ 210 は口径 10.4 ~ 11.0 cm、器高の低い大型である。211 ~ 220 は口径 11.1 ~ 11.9 cm で、口縁端部をわずかに内湾させる。218・219 は口縁端部を特に強くなでる。221 は白磁皿で、口縁端部の釉を剥ぐ。222 は青磁椀で、内面中程と口縁部外面に横方向の沈線を引き、灰オリーブ色の釉を全面に掛ける。223 ~ 226 は土師質のミニチュア土器である。223 は焙烙形、224 ~ 226 は羽釜形を呈する。作り方や調整は実用品とほぼ同じで、224 ~ 226 の外面下部がオサエに加えてナデ調整が丁寧に行われている点が異なっている。胎土は砂粒が入らない清良な土を使用している。227 は黄釉陶器盤である。全面を回転ナデ、黄色釉を内面から外面上部に掛ける。底面に茎と葉のついた花とみられる絵が鉄釉で描かれている。福建省産とされているもので、京都大学構内の調査にも類例が多い。228 は瓦質土器鍋である。口縁部内外面を指で丁寧になでる。内面はハケメ調整、外面はオサエ調整の指痕が明瞭に残る。229 は滑石製石鍋である。幅 1.5 cm 程度の工具で、鏝を削り出し、内外面を丁寧に調整する。内面には横方向の擦痕があり、使用痕とみられる。時期は 14 世紀前半である。

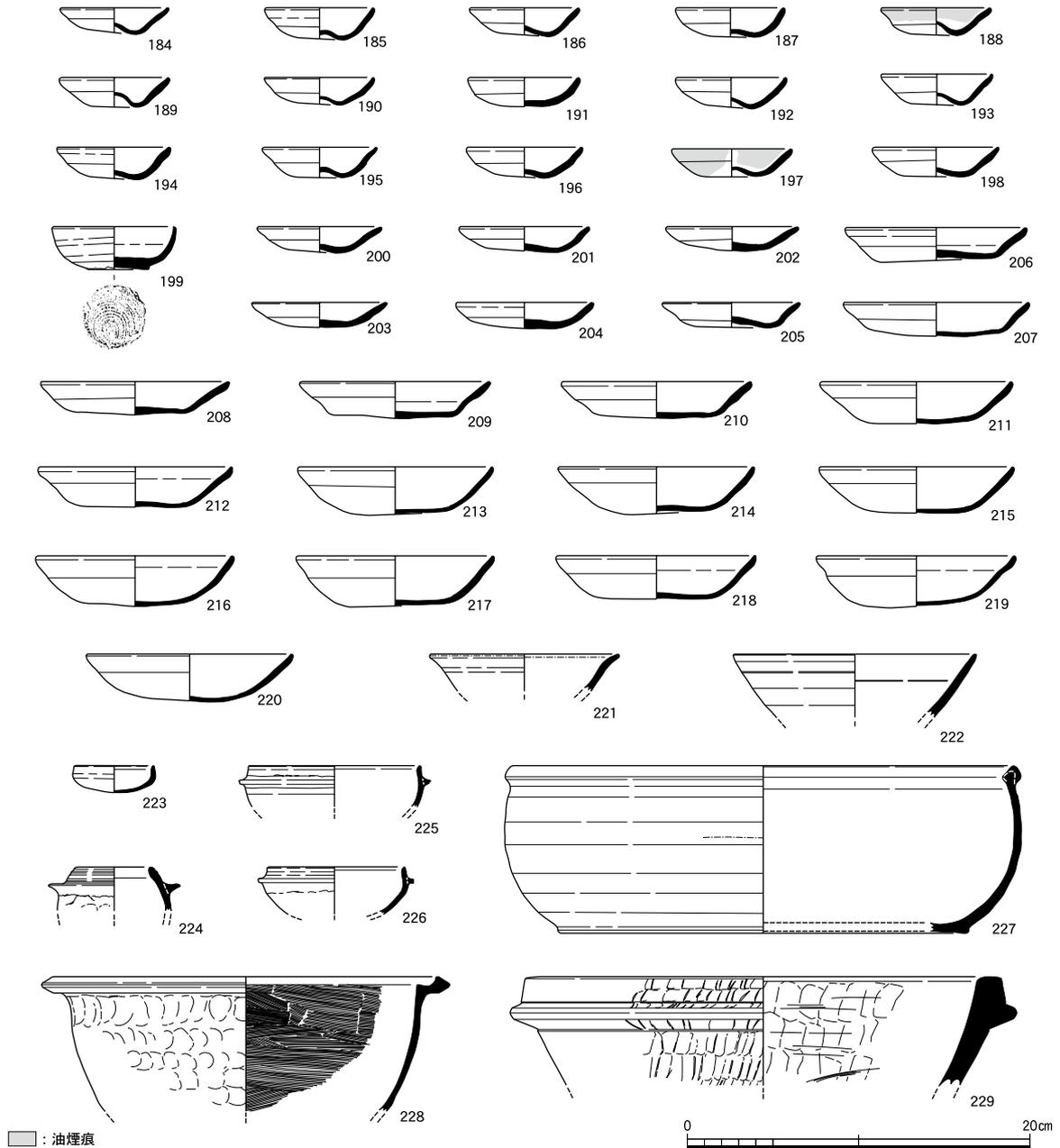


図 25 2区土坑 33 出土遺物実測図 (1 : 4)

2区土坑 59 出土土器 (図 26 - 230 ~ 246) 230 ~ 235 は土師器皿で、234 は白色系、その他はすべて赤色系である。230 は底面に回転糸切り痕を残す。口縁端部が外反する。231 は口縁端部をつまみあげる。232 は底面と口縁部が分厚い。233 は口縁部が大きく外反する。234 は底面から口縁部にかけて、緩やかに湾曲しながら立ち上がる。235 は口縁部を強くなでて、端部をつまみあげる。下部の器厚が厚い。236 ~ 239 は輸入磁器である。236 は青磁皿である。胴部から緩やかに外反する。237 は白磁皿である。口縁端部を釉剥ぎする。釉は底部外面まで掛かる。238 は白磁壺または水注の口縁部片である。239 は染付碗の胴部片である。内面の口縁部近くに雷文、外面には鳥と果実文様を描く。中国の明代のものと思われる。240 は輸入陶器鉢の口縁部片である。全面に緑釉を掛ける。華南産とみられる。241・242 は東播系播鉢である。241 は口

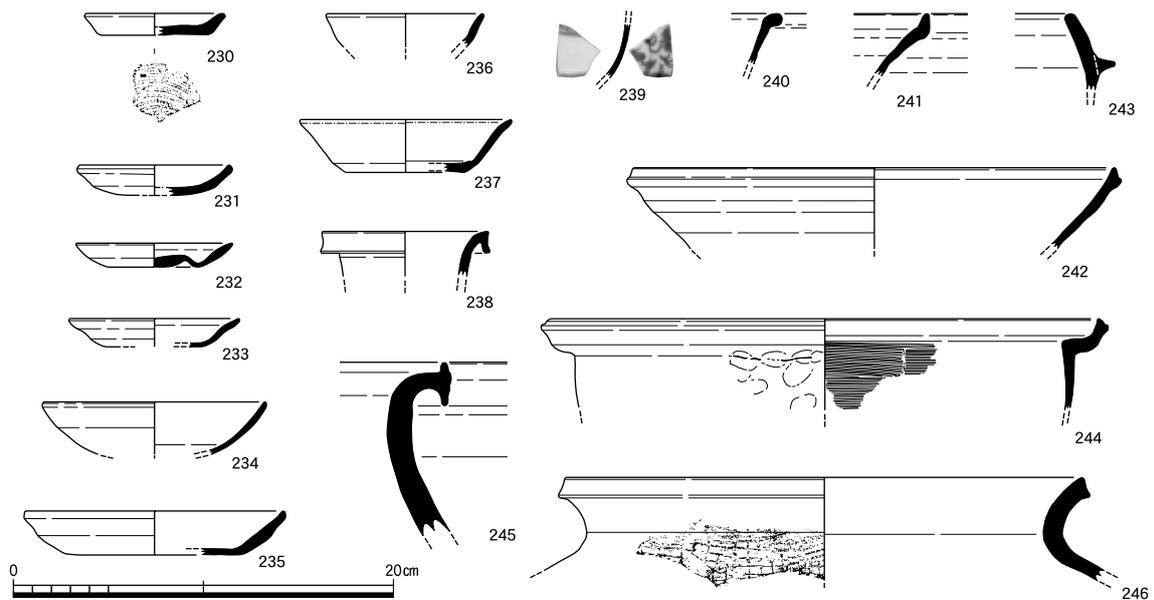


図 26 2区土坑 59 出土土器実測図 (1:4)

縁部が直立する。242 は口縁部断面形態が三角形である。243 は瓦質土器羽釜である。丁寧に内外面をなでるが、内面には工具痕とみられる沈線が付く。244 は瓦質土器鍋である。外面のオサエ調整はあまり明瞭でない。245 は常滑焼の甕口縁部片である。口縁端部をつまみあげる。246 は須恵器甕の口縁部片である。内面は剥離が著しく、調整は不明瞭である。外面の頸部から胴部は、細かい格子目の入ったタタキ調整である。時期は 14 世紀前半から 15 世紀前半である。

(3) 瓦 類 (図 27)

1 区の中世包含層や集石遺構から出土した。軒瓦は掲載したもの以外はなく、丸瓦・平瓦は少量であるが、集石や土坑から出土している。すべて平安時代後期のものと考えられる。なお、瓦の調整方向は、瓦当面に直交する場合は縦、平行する場合は横と記述する。軒丸瓦の瓦当裏面は円形ナデである。

軒丸瓦 (247) 247 は巴文とみられる。珠文は 2 個以上付く。凸面は縦ケズリ、瓦当裏面はナデである。1 区中世包含層から出土した。

軒平瓦 (248 ~ 251) 248 は左巻きの三巴文である。頭部は離れているが、尾部が接しており、圏線となっている。顎部下部は横ケズリ、顎部裏面は横ナデ、凹面は縦ケズリである。1 区中世包含層から出土した。249・250 は剣頭文である。顎部は折り曲げである。凹面顎部上面は横ナデ、凹面は横ナデまたは布目のちナデ、凸面は縦ケズリ、顎部下面から裏面は横ナデまたはケズリである。ともに 1 区集石 88 から出土した。251 は左巻き三巴文を連続して配する。頭部も尾部も離れる。瓦当筈が周縁部までであるが、周縁より筈が小さいため、段ができています。瓦当面の曲線顎の半折り曲げである。瓦当上面は横ナデ、凹面は布目、顎部下面は横ケズリ、顎部裏面は横ナデとオサエ、凸面は縦ケズリのちナデである。凸面には平行する 2 本のヘラ描き沈線が施されている。1 区集石 148 から出土した。

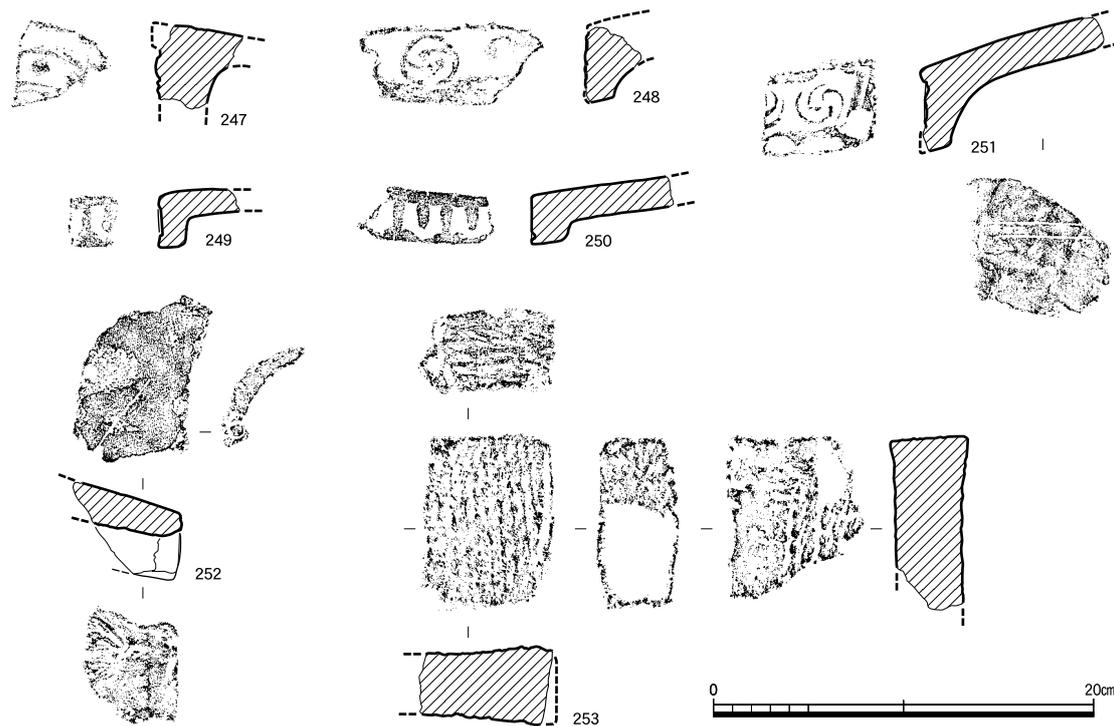


図 27 出土瓦拓影・実測図（1：4）

丸瓦（252） 248 は丸瓦玉縁である。凸面は横ナデ、凹面は布目、凹面側縁や側面は縦ケズリ、端面は横ケズリである。玉縁端面中央付近に、「○」の刻印が押されている。1区集石 148 から出土した。

塼（253） 253 は左側および下部が欠損する。表および裏面の中央が窪む。全面に縄目が確認できる。1区集石 109 から出土した。

（4）土製品（図 28、図版 9）

254～256 は1区中世包含層などから出土した。何れも、鎌倉時代から室町時代のもものと考えられる。

土玉（254） 合わせ型で作られている。表の型より、裏の型の方が少し大きく、中央の横帯の段差をつなぎ目として上手く利用しているのが、粘土の接合痕からわかる。両面の十字文が合うようには作られていない。両面十字中央の円形文は後押しとみられる。一部に粉殻痕とみられる窪みが残る。良く焼けている。

土錘（255・256） 芯棒に巻きつけて作られている。なでて面取りを行うが、明瞭ではない。

（5）ガラス製品（図 28）

ガラス玉（257） 整地層 107 から出土した。火災のような2次的に火を受けて、白色化し、表面が脆くなっている。表面が欠損している部分があり、当初のガラスは青色を呈していたことが確認できた。芯棒にガラスを巻きつけて作ったとみられる。時期は鎌倉時代後期である。

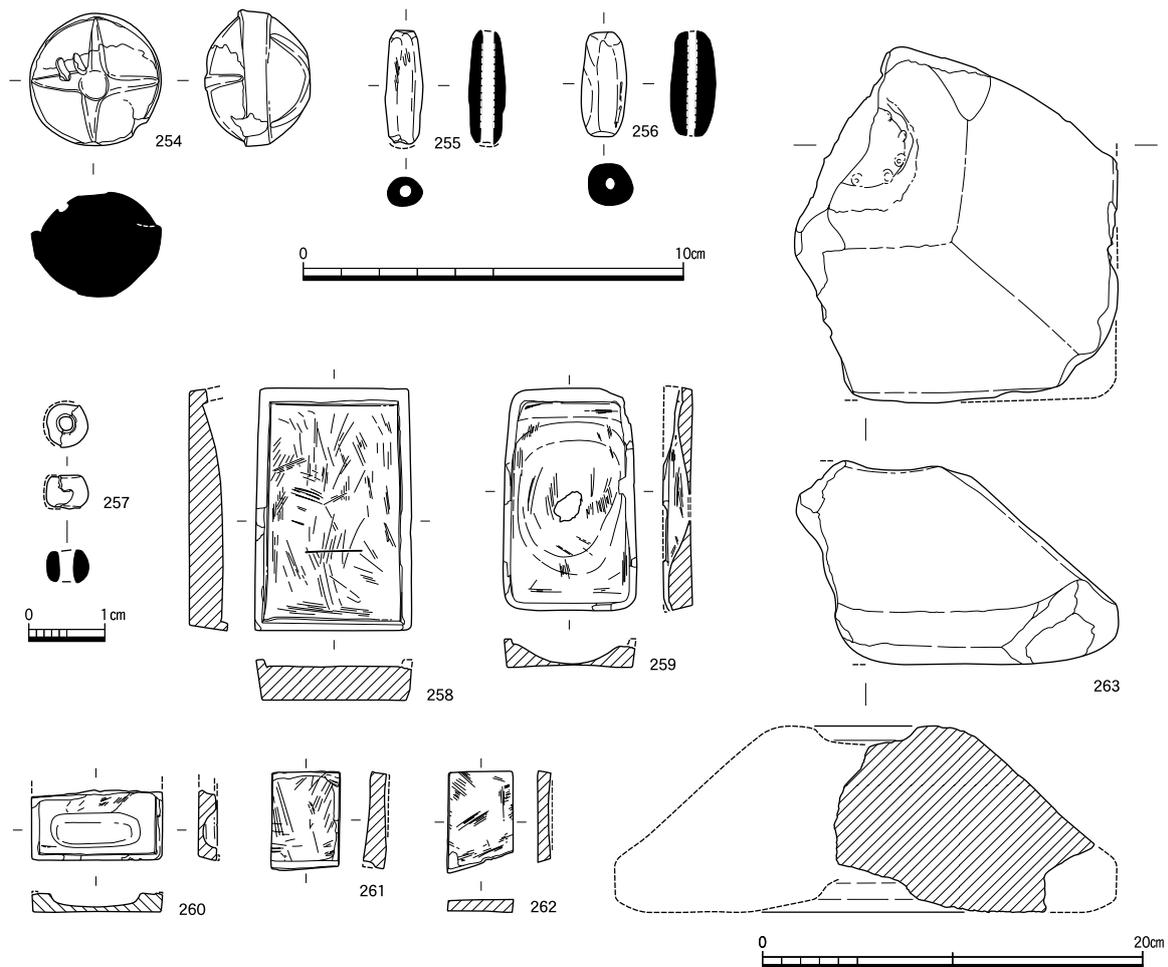


図28 出土土製品（1：2）・ガラス製品（1：1）・石製品（1：4）実測図

（6）石製品（図28、図版9）

硯（258～260） 258は平面長方形、断面は逆台形を呈する。周縁の大半が欠損している。硯池は深くなく、墨の痕跡が認められない。墨堂も同様である。内外面に成形時のものとみられる細かい研磨痕が確認できる。墨堂の傷のような擦痕は、使用痕とみられる。材質は緑色粘板岩とみられる。1区集石90西肩口から出土した。鎌倉時代後期であろう。259は258と同器形、材質も粘板岩とみられる。硯池は深くない。墨堂中央が楕円形に窪んでおり、中央が厚さ1mmくらいになるまで良く使い込まれていた。内外面に成形時の研磨痕、墨堂に使用痕が確認できる。周縁と墨堂中央は欠損している。1区柱穴226から出土した。室町時代前期とみられる。260は割れた硯を転用または分割加工して、小型の硯を作り出したとみられる。墨堂側を利用する。中央に楕円形の硯池がある。断面はほぼ逆台形を呈する。目の細かい砂岩とみられる。1区溝157出土で、鎌倉時代後期とみられる。

砥石（261・262） 端が欠損しているため、長さは不明であるが、幅は約3.0～3.5cmと揃っており規格があったとみられる。表面中央付近は使用のため窪む。欠損部以外で細かい擦痕が認められた。前者は1区土坑193、後者は1区柱穴257から出土し、いずれも鎌倉時代後期である。

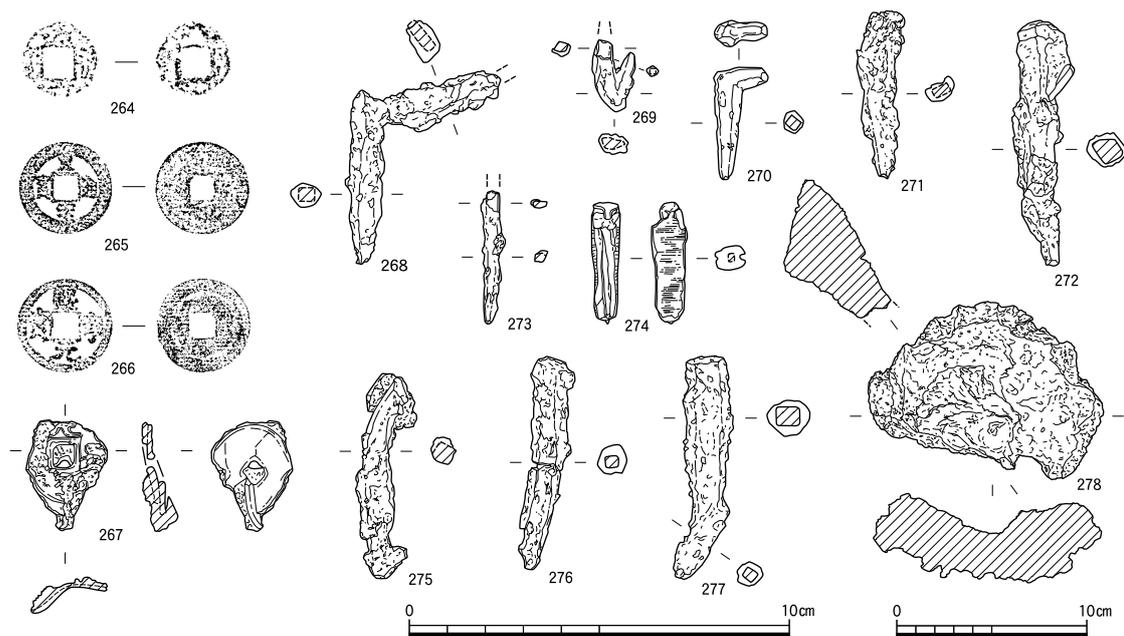


図29 出土銭貨拓影、鉄釘・鉄滓実測図（1：2、278のみ1：4）

五輪塔（263）凝灰岩製の五輪塔笠にあたる火輪部である。3分の2以上欠損している。風輪部を受ける上部に円形のくぼみ、水輪部にあたる部分にもくぼみをもつことから、上下部の部材に突部があったとみられる。磨耗が著しく、調整は不明であるが、笠先など面取りが丁寧に行われている。1区集石91の下層（図10－49層）から出土した。鎌倉時代後期とみられる。

（7）金属製品（図29、図版9）

出土した金属製品の一覧表を掲載した（表4）。鉄釘の出土が多く、鉄滓なども少量ではあるが出土している。1区集石90埋土から出土した鉄釘は、139点と非常に多く、他の遺構と比べるとその差は歴然としている。鉄釘の出土層位別にみると（表5）、図9 A－A'断面図の6・7層に集中し、出土点数のほぼ半数を占めていることがわかる。礫面を基準に分類しても、上層礫面と下層礫面に挟まれた層中からの出土数が際立っていた。以下に金属製品について詳述する。

銭貨（264～267）264・265は1038年に铸造の北宋銭で、皇宋通寶である。字体は真書である。266は1068年铸造の真書の熙寧元寶で、北宋銭である。264は1区集石92、後の2つは1区集石90の炭層の上下層（図9 A－A'断面図の6～11層）中から出土した。267は行書の元豐通寶で、1078年の北宋銭である。2枚貼り付いた状態で、

表4 出土金属製品集計一覧表

調査区	遺構	種類				
		鉄釘	刀子	鉄滓	鉄板/金具	銭貨
1区	集石90	139	(1)		3	2
	集石91	5				
	集石92	3				1
	集石93			1		
	集石109			1		
	集石114			1		
	溝113	2				
	溝157	1				
	溝166	3		1		
	土坑192	1				
	土坑193	1				
	包含層	24	1			2(溶着)
2区	土坑33	1				
種類別合計		179	2	4	3	5

表5 1区集石90出土層位別鉄釘集計一覧表

層位	断面作成位置	点数	層位の注記	合計	
10~15層	図10 C-C'	3	上層礫面より上	3	
1~3層	図9 A-A'	5	上層礫面	16	
1~6層		9			
3・4層		2			
21・22・24層	図10 C-C'	13	上層礫面と下層礫面の間	103	
6層	31				
7層	37				
7~11層	7				
8~10層	2				
10層	11				
11層	1				
12・13層	図9 A-A'	1			
13層	4	下層礫面			4
13~22層	4	下層礫面より下			13
15~18層	3				
15層	1				
16層	3				
21層	2				

裏側の一部が折れ曲がっている。2次的に被熱したとみられる。

鉄製品(268~278) 268は金具、269~277は鉄釘、278は鉄滓である。1区集石90または集石91から出土した。268はL字形を呈しているが、一部が欠損しているとみられる。そのため、コ字形の鏝の可能性が考えられる。269は上部が折損している。先端が鈎針状に曲がるが、釘の先端が曲がったものとみられる。270は頭部の平面が長方形を呈する。271・272・275~277は頭部および断面が四角を呈する。使用されており、先端が曲がる。272は縦断面がT字形を呈する。273は先端が欠損する。他のものより細い。274は頭部の平面が楕円形で、横から見ると丸い。

本体に木質が付着したままの状態出土した。飾り釘であったとみられる。278は中央にくぼみを持つ鉄滓である。このくぼみと側面にある平坦面は、面を成しており、何かがあたっていた痕跡が認められた。それ以外は気泡と埋土の粗砂礫が付着している。

(8) 微細遺物 (図30~32)

集石90の埋土を4mmメッシュのふるいにかけてところ、少量の骨と多くの炭が出土した。骨は上層礫面と下層礫面間(図9 A-A'断面図の6~11層)を中心に、ほぼすべての埋土に含まれていた。炭は炭層である図9 A-A'断面図の6・15~18層に集中して出土した。

骨には魚と鳥がある。魚はマダイで、椎骨や上後頭骨、前上顎骨、鰭棘などである。鳥は種類および部位は不明である。動物は不明であるが、指骨も検出された(表6)。

表6 1区集石90出土層位別骨種一覧表

層位	断面作成位置	層位の注記	内容(骨番号は図31~33に対応)	
			魚類	その他
1~4層	図9 A-A'	上層礫面	マダイ前上顎骨?	
6層		上層礫面と下層礫面の間(炭層)	椎骨(骨16)、マダイ上後頭骨(骨11)、鰭棘(骨9)、方骨(骨10)、マダイ前顎骨?	不明骨(骨12~15・17~29)
7層		上層礫面と下層礫面の間	椎骨(骨30・31)、主鰓蓋骨(骨32)、マダイ前上顎骨?	不明骨(鳥類?、骨33~37)
7~11層			マダイ上後頭骨	
11層			椎骨	
13~22層		下層礫面より下	マダイ前上顎骨?	
15~18層			椎骨(骨4)	指骨(骨1)、不明骨(骨2・3・5~8)

炭には長さ1～3cmの木材が多く含まれており、一部の樹種が特定できた。コナラ亜属である。その他に、散孔材と呼ばれる広葉樹(クスノキ、ブナ、ツゲなど)が確認されているが、樹種の特定には至っていない。集石91の土器を多量に包含する49層(図10 C-C'断面図)から出土した炭化材は、ケヤキおよび散孔材であった。

また、出土品ではあるが、集石109・148から見つかった貝類はアワビであった。

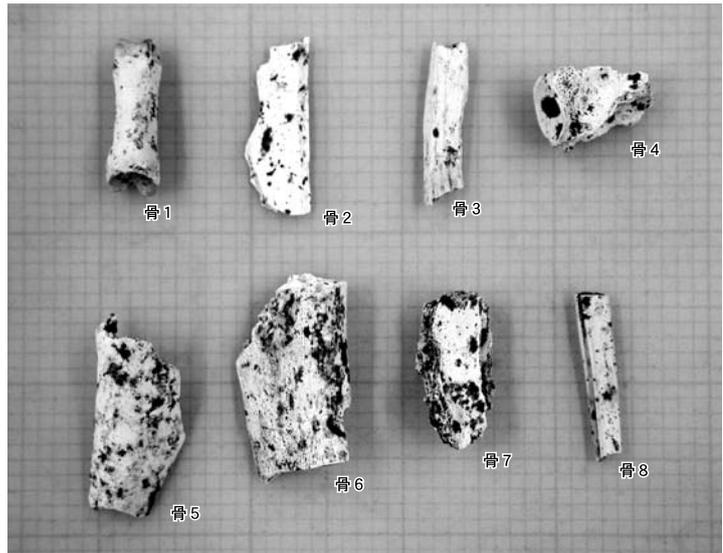


図30 出土骨写真1 (S=2倍)

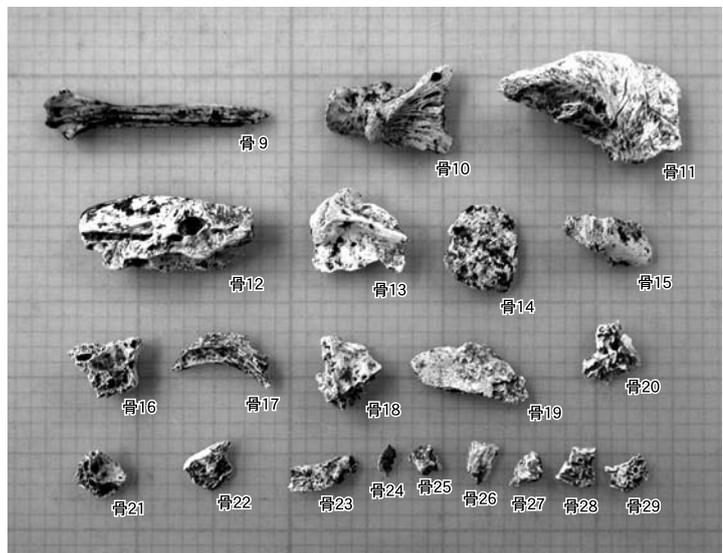


図31 出土骨写真2 (S=2倍)

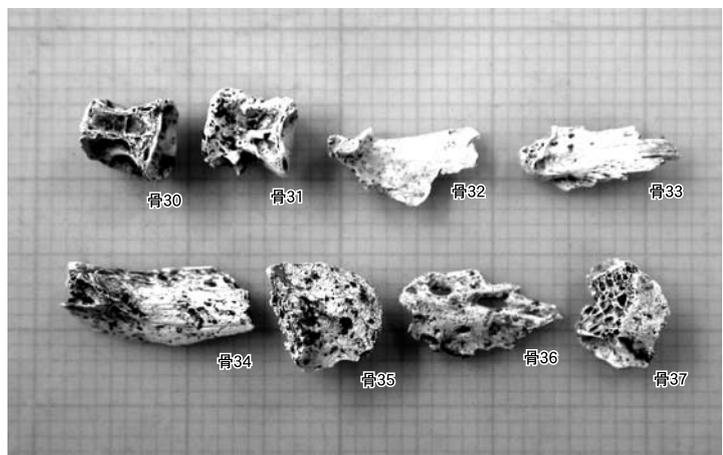


図32 出土骨写真3 (S=2倍)

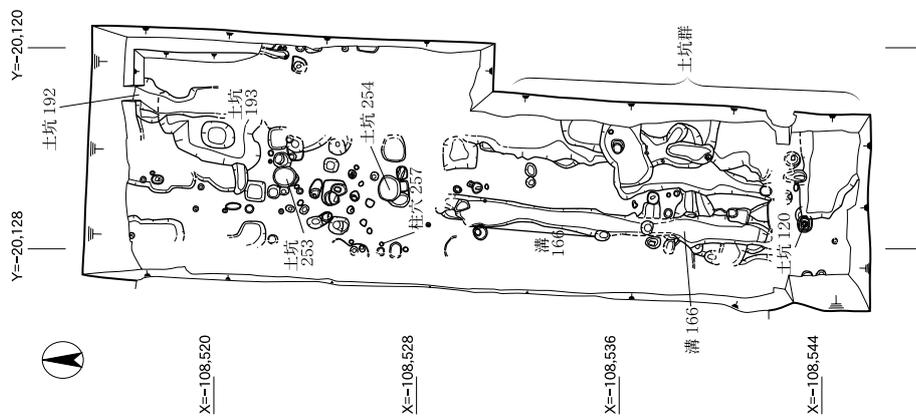
6. ま と め

鎌倉時代から室町時代の遺構を多数検出し、一帯の開発が最も進んだとされる時期に多くの遺構が形成されたことが明らかとなった。遺構の時期は、遺構の切り合い関係と出土遺物から大きく3期に分けることができる(図33)。1期は13世紀中頃、2期は13世紀中頃から13世紀後半、3期は14世紀前半以降である。1期とした13世紀中頃は、区画溝とみられる溝166とその東側に平行して掘られた土坑群(土坑192・193も含む)、溝166が途切れた北側に礎石をもつ柱穴が集中し、対になりそうな土坑253・254が南北方向に並ぶ。南側には墓とみられる土坑120や礎石をもつ柱穴がある。建物とそれに伴う区画があったと考えられるが、規模などで分類することができず、明示していない。全体的に遺構にまとまりがない時期である。2期とした13世紀中頃から13世紀後半は、集石88の下層に造成された集石93・109・148とその西側を区画していたとみられる溝106、それに伴って整地(整地層107)が行われている。集石88は築地など何らかの閉鎖施設の地業と考えられるが、区画の内側に相当する東側には大規模な集石を持つ集石89～92が南北に連なって造られている。土取りを行った後に礫を入れて、地固めを行ったとみられる。南端では集石と溝157があるが、北半の遺構群との関係が明確ではない。3期とした14世紀前半以降は、集石88が区画として残存した形をとっていたと考えられ、調査区中央付近で検出した整地層112がその出入口の役割を果たしていたとみられる。区画内側の東半では柱列1や集石108など建物に伴うとみられる遺構と、その間に掘られた土坑が散在する。集石88東側に沿って、礎石とみられる上部が平らに据えられた石や柱穴があるが、建物や柵には復元できなかった。このように、13世紀中頃から14世紀前半にかけて、区画施設で明示された境界をもつ敷地が、連綿と受け継がれていた可能性を示す結果が得られた。

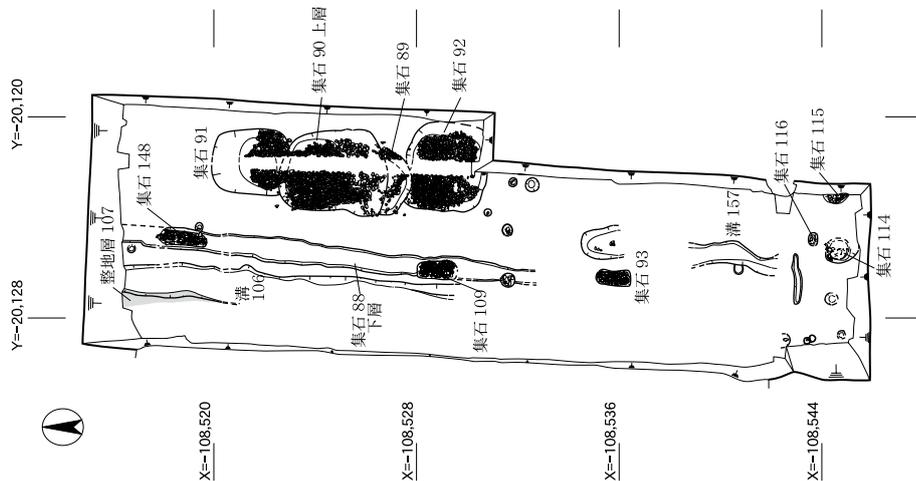
対照的に2区では、土取り穴とみられる土坑33が14世紀前半には形成され、礎石をもつ柱穴から建物などの存在も窺えるが、土坑59の最も新しい遺物が示す15世紀前半頃まで雑多な遺構が営まれていたとみられる。1区で検出した溝106が側溝であるならば、1区と2区の間が道路であったとも考えられる。2区がもともと宅地内であったのか、または道路を浸食して宅地にされたのかは今回の調査からは明らかにできなかったが、このような状況が1区と2区の遺構の差を生み出したとも考えられる。

平安時代については明確な遺構は確認できなかったが、平安時代から鎌倉時代前期の遺物が出土しており、この辺りの土地利用が平安時代から始まったことを示唆している。また、当地周辺は平安時代後期に創建された福勝院推定地と考えられており、今回の調査成果を考えるうえで参考になる。特に、南北方向の集石88と、その東側に展開する集石89～92という長辺約20cmの礫を大量に掘り込んだ遺構が、敷地境の塀と敷地内に掘られた土坑と考えるならば、当地に存在した屋敷や寺社の西限部を検出したことになる。1区の集石88を境に、2区では室町時代前半の遺構が中心、1区では鎌倉時代後半が中心という时期的な差異が認められること、遺構においても集石遺構の有無などの違いがあることも、集石88を土地境界と考える裏付けとなろう。集

1期〔13世紀中頃〕



2期〔13世紀中頃から後半〕



3期〔14世紀前半以降〕

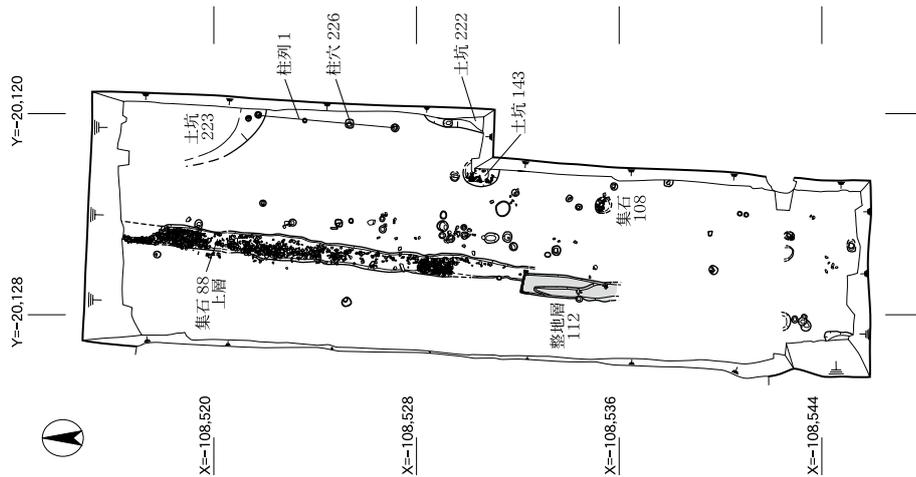


図 33 1区中世面変遷図 (1 : 300)

石 148 などの類似遺構が、第 3 章でも触れたように京都大学本部構内 AW 25 区の調査で検出されている。東西方向に長軸を持つ多量の礫が入られた土坑で、東西に 2 基並ぶ。土坑端間距離は約 3.5 m である。1 基は長軸 1.85 m、短軸 0.65 m、深さ 0.7 m、もう 1 基は長軸 2.7 m、短軸 0.8 m、深さ 0.5 m、断面は U 字形または逆台形である。時期は 13 世紀中葉とされている。土壌分析もなされているが、墓と確定していない。また、長さ 1.9 m、幅 1.2 m、深さ 0.6 m の隅丸長方形土坑にも、礫が充填されていた。これは礫層のみであったが、先の 2 遺構から約 6 m 北に位置する。これらの遺構も軸をそろえて造られている。また、東西方向に軸を持つ集石遺構の北半で遺構が検出されているものの、南半では同時期の遺構が確認されておらず、これらにも区画的な要素が認められる。今回の調査で検出した集石遺構群と長さ以外の規模はほぼ同じで、遺構の在り方についても類似点が多いことは、白河街区北側区域の中世における街並み形成を考える上で興味深い事例である。

1 区で検出した集石 89～92 の性格について、現状では敷地境に掘られた土取り土坑が、一部はゴミ捨て穴として利用され（集石 90・91）、その後地固めを行うために礫を入れた地業状の遺構と考えている。ただ、集石 90 については、中央が窪む埋土や礫が敷き詰められたような状態であったこと、完形の土師器皿が多く出土したこと、炭層があること、礫面の間から大量の鉄釘が出土していることなどから、墓の可能性も考えられる。埋土を掘り下げた結果、棺底とみられる痕跡は検出できず、また完形の硯が出土したものの、鏡など墓特有の遺物は出土しなかったことなど、積極的に墓とはいえなかった。しかし、地業とするには遺物も多く、礫層の上面が面を成しており、2 面は確実に形成されていたという特徴的な遺構であったことから、一つの解釈として墓の可能性も示唆しておく。

1 区南端の遺構については、攪乱が多かったことから状況がよくわからないが、瓦質土器羽釜を伏せて据えた土坑 120 のような墓とみられる遺構があること、調査地南西にある府営住宅の調査で多くの墓遺構が検出されていることなどから、墓域の北端部であった可能性が考えられる。ただ、閉鎖施設に関わると推定できる溝 166 との関係から、南西の墓域とは空間を共有せず、東に展開する敷地の一面に形成された遺構群ととらえるのが妥当であろう。今後の調査で、これらの遺構群の性格が明らかになることを期待したい。

中世の遺物について、鉄釘や硯、砥石が周辺調査でも一定の割合で出土しており、今回の調査と似た傾向を示す。図 5-15・20 地点では、雲形（花形か？）の硯が出土している。硯を使用する職種の人やそれを作る職人の住まい、梵鐘製造を含む金属製品の工房跡などを想定することができる。平安京内ではすでに操業が難しくなりつつあったいわゆる公害を引き起こす職業の人々が生活・活動する地域として、白河街区の北側地域が発達していったとも考えられており、京内への物資供給地としての意義を考える一助となろう。

縄文時代から古墳時代の遺物については、北から土石流などによって流されてきたものと考えられる。土壌下層の下面（一部土壌化層を含む）から縄文時代晩期末の突帯文土器がまとまって出土し、弥生時代前期末に吉田地域を覆ったとされる洪水層の真砂と呼ばれる黄色砂を検出したことから、自然流路の方向や状態を考える上での資料として成果が上がったといえよう。

付表1 出土土器類観察表

No.	遺構名	器種	器形	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	胎土	調整、その他
1	2区北壁第18層(図17)	縄文土器	浅鉢	—	(4.2)	—	内面:2.5Y7/3浅黄色、 外面:10YR5/2灰黄褐色	精良	内面:ナデ、外面:ミガキか?・沈線
2	1区東壁第72層(図6)	縄文土器	深鉢	—	(4.0)	—	内面:7.5Y4/6褐色、 外面:5Y3/2オリーブ黒色	粗	内面:板状工具によるナデ、外面:ナデ、突帯: 貼り付け・V字刻み
3	1区東壁第73層(図6)	縄文土器	深鉢	—	(5.7)	—	7.5YR4/6褐色	やや粗	内面:板状工具によるナデ、外面:板状工具による ナデ?、突帯:貼り付け・間延びしたD字
4	1区東壁第72層(図6)	縄文土器	深鉢	—	(5.2)	—	内面:7.5YR3/2黒褐色、 外面:7.5YR4/6褐色	やや粗	内面:板状工具によるナデ、外面:工具によるナ デ?突帯:貼り付け・D字刻み、口縁下部に補修孔
5	1区東壁第72層(図6)	縄文土器	深鉢	—	(4.3)	—	内面:2.5Y5/3黄褐色、 外面:7.5YR4/6褐色	やや良	内面:工具によるナデ?、外面:ナデ?、突帯: 貼り付け・D字刻み
6	1区東壁第72層(図6)	縄文土器	深鉢	—	(4.9)	—	内面:10YR4/3にぶい黄 褐色、外面:7.5YR3/2 黒褐色	粗	内面:ナデ、外面:ナデ、突帯:貼り付け・小D字 刻み
7	1区東壁第73層(図6)	縄文土器	深鉢	—	(0.9)	—	内面:5Y4/6赤褐色、 外面:7.5YR4/3褐色	精良	内面:ナデ、突帯:折り曲げ?・小D字刻み
8	1区東壁第72層(図6)	縄文土器	深鉢	—	(2.4)	—	内面:10YR5/4にぶい黄 褐色、外面:7.5YR4/4 褐色	粗	内面:ナデ、外面:ナデ、突帯:貼り付け・間延び したD字刻み
9	1区東壁第73層(図6)	縄文土器	深鉢	—	(4.6)	—	内面:7.5YR4/6褐色、 外面:10YR4/2灰黄褐色	良	内面:板状工具によるナデ、外面:板状工具による ナデ・ナデ、突帯:貼り付け・D字刻み
10	1区東壁第73層(図6)	縄文土器	深鉢	—	(4.0)	—	内面:10YR5/4にぶい黄 褐色、外面:10YR3/2黒 褐色	粗	内面:板状工具によるナデ、外面:板状工具による ナデ・ナデ、突帯:貼り付け・D字刻み
11	1区東壁第72層(図6)	縄文土器	深鉢	—	(1.7)	—	5YR5/6明赤褐色	粗	内面:磨滅、外面:ナデ、突帯:貼り付け・刻み 不明
12	1区東壁第72層(図6)	縄文土器	深鉢	—	(2.2)	—	内面:5Y5/6明赤褐色、 外面:10YR5/4にぶい黄 褐色	やや良	内面:板状工具によるナデ、外面:ナデ、突帯: 貼り付け・間延びしたD字刻み
13	1区東壁第72層(図6)	縄文土器	深鉢	—	(2.1)	—	10YR5/2灰黄褐色	良	内面:ナデ?、外面:ナデ?、突帯:貼り付け・小 D字刻み
14	1区東壁第72層(図6)	縄文土器	深鉢	—	(2.9)	—	内面:7.5YR5/3暗褐色、 外面:7.5YR3/3暗褐色	良	内面:磨滅、外面:工具によるナデ?、突帯:貼り 付け・D字刻み
15	1区東壁第73層(図6)	縄文土器	深鉢	—	(3.8)	—	内面:5Y5/6明赤褐色、 外面:10YR4/3にぶい黄 褐色	やや粗	内面:ナデ?、外面:板状工具によるナデ、 突帯:貼り付け・小D字刻み
16	1区東壁第72層(図6)	縄文土器	深鉢	—	(2.9)	—	内面:7.5YR4/4褐色、 外面:7.5YR3/2黒褐色	やや粗	内面:板状工具によるナデ、外面:板状工具に よるナデ?、突帯:貼り付け・間延びしたD字
17	2区北壁第18層(図17)	縄文土器	浅鉢底部	—	(1.2)	5.7	10YR3/2黒褐色	精良	内面:ナデ、外面:ミガキ
18	1区東壁第72層(図6)	縄文土器	深鉢	—	(4.6)	(7.8)	内面:7.5YR4/6褐色、 外面:10YR5/4にぶい黄 褐色	やや粗	内外面:板状工具によるナデ、底面:ナデ
19	2区北壁第16層(図17)	弥生土器	甕	—	(10.5)	—	内面:10YR8/4浅黄橙色 外面:10YR7/3にぶい黄 橙色	良	内面:ハケメ、外面:沈線・ハケメ、外面に煤付着
20	1区集石89	須恵器	壺 または甕	—	(1.3)	—	N5/灰色	良	回転ナデ、櫛描列点文
21	1区集石89	須恵器	壺 または甕	—	(3.3)	—	N3/暗灰色	精良	回転ナデ、斜線文、凹線、櫛描波状文
22	1区集石91	土師器	皿	6.0	1.2	—	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
23	1区集石91	土師器	皿	5.8	1.2	—	5Y8/1灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
24	1区集石91	土師器	皿	6.4	1.4	—	10YR8/1灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
25	1区集石91	土師器	皿	(7.2)	1.2	—	10YR7/3にぶい黄褐色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
26	1区集石91	土師器	皿	(8.5)	1.7	—	2.5Y8/1灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
27	1区集石91	土師器	皿	9.4	1.8	—	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
28	1区集石91	土師器	皿	7.8	1.7	—	10YR6/4にぶい黄褐色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ、粘土接合部未成形
29	1区集石91	土師器	皿	8.4	1.7	—	内面:10YR8/3浅黄橙色、 外面:7.5YR8/6浅黄褐色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
30	1区集石91	土師器	皿	8.2	1.5	—	7.5YR7/6褐色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ

No	遺構名	器種	器形	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色 調	胎土	調整、その他
31	1区集石91	土師器	皿	8.7	1.6	—	10YR7/4浅黄橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
32	1区集石91	土師器	皿	8.0	1.4	—	10YR7/4にぶい黄橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
33	1区集石91	土師器	皿	8.6	(1.1)	—	7.5YR6/4橙色	精良	内外面:ユビナデ、外面下部:オサエ
34	1区集石91	土師器	皿	8.8	1.5	—	7.5YR6/4橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
35	1区集石91	土師器	皿	9.0	1.6	—	内面:10YR7/4にぶい黄 橙色、外面:7.5YR8/6 浅黄橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
36	1区集石91	土師器	皿	(11.6)	1.8	—	7.5YR7/6橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
37	1区集石91	土師器	皿	12.2	(1.9)	—	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ・オサエ、 外面下部:オサエ
38	1区集石91	土師器	皿	(12.2)	2.1	—	7.5YR7/4にぶい橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ・オサエ、 外面下部:オサエ
39	1区集石91	土師器	皿	(12.6)	2.1	—	10YR6/4にぶい黄橙色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
40	1区集石91	土師器	皿	(12.4)	1.9	—	10YR8/3浅黄橙色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ・オサエ、 外面下部:オサエ
41	1区集石91	土師器	皿	12.6	2.5	—	10YR7/4にぶい黄橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
42	1区集石91	土師器	皿	12.8	(2.4)	—	7.5YR7/4にぶい橙色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
43	1区集石91	土師器	皿	(13.0)	(2.8)	—	10YR7/4にぶい黄橙色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
44	1区集石91	土師器	皿	(12.6)	(2.0)	—	10YR7/4にぶい黄橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
45	1区集石91	土師器	皿	(13.1)	2.1	—	7.5YR7/4にぶい橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
46	1区集石91	土師器	皿	(12.8)	(2.3)	—	10YR7/4にぶい黄橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
47	1区集石91	土師器	皿	(12.3)	3.1	—	10YR7/4にぶい黄橙色	やや 精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
48	1区集石91	土師器	皿	(10.8)	(2.7)	—	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
49	1区集石91	土師器	皿	(11.0)	2.8	—	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
50	1区集石91	土師器	皿	(11.4)	2.7	—	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、外面下部:オサエ
51	1区集石91	土師器	皿	12.7	2.1	—	2.5Y8/1灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
52	1区集石91	土師器	皿	(13.2)	3.6	—	2.5Y8/1灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
53	1区集石91	土師器	皿	(13.0)	(3.3)	—	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
54	1区集石91	土師器	皿	(14.0)	3.1	—	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
55	1区集石91	輸入白磁	椀	(15.6)	(2.3)	—	素地:白色、 釉:5Y7/1灰白色	精良	内外面:回転ナデ、外面下部:回転ズリ、 透明釉
56	1区集石91	石製品	鍋	(29.8)	(7.5)	—	10YR6/2灰黄褐色	—	滑石製、口縁～内面:時計回りの成形痕、 外面下部:時計回りの成形痕
57	1区集石91	須恵器	鉢	—	(3.1)	—	5Y5/1灰色	良	内外面:回転ナデ
58	1区集石92	土師器	皿	(7.8)	1.1	(5.0)	10YR7/4にぶい黄橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
59	1区集石92	土師器	皿	(8.2)	1.2	(4.5)	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
60	1区集石92	土師器	皿	(12.6)	2.0	(6.8)	内面:7.5YR6/6褐色、外 面:7.5YR6/3にぶい褐色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
61	1区集石92	土師器	皿	(13.0)	2.5	(5.6)	10YR7/4にぶい黄橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
62	1区集石92	瓦器	椀	(7.9)	2.2	(4.6)	内外面:N4/灰、内面 下部:2.5Y8/1灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、 外面下部:オサエ
63	1区集石92	輸入白磁	皿	(11.3)	(2.8)	—	素地:白色、 釉:5GY8/1灰白色	精良	内外面:回転ナデ、口縁内面は釉剥ぎ、その他 の部位は透明釉

No.	遺構名	器種	器形	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色 調	胎土	調整、その他
64	1区集石92	瓦質土器	羽釜	—	(3.5)	—	N2/黒色	精良	内面:ハケメ、外面:ユビナデ、鏝は貼り付けのちナデ
65	1区集石89	土師器	皿	8.3	1.6	—	7.5YR7/4にぶい橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
66	1区集石89	土師器	皿	(8.4)	1.1	5.2	10YR7/4にぶい橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
67	1区集石89	土師器	皿	(8.6)	1.2	—	7.5YR7/4にぶい橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
68	1区集石89	土師器	皿	(12.2)	1.8	—	10YR7/4にぶい橙色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
69	1区集石89	土師器	皿	12.2	2.3	8.5	10YR7/6浅黄橙色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
70	1区集石89	土師器	皿	(12.7)	3.0	—	10YR8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
71	1区集石89	土師器	皿	(13.1)	3.5	—	10YR8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
72	1区集石89	土師器	皿	(13.6)	3.2	—	10YR8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
73	1区集石89	輸入青磁	椀	(15.0)	(4.9)	—	素地:5Y7/1灰白色、 釉:10Y5/2オリーブ灰	精良	内外面:回転ナデ、内面に陰刻文
74	1区集石89	須恵器	鉢	(24.8)	(5.8)	—	2.5Y8/1灰白色～ N4/灰	良	内外面:回転ナデ
75	1区集石89	須恵器	鉢	(27.0)	(8.6)	—	5Y7/1灰白色～N5/灰	良	内外面:回転ナデ
76	1区集石89	瓦質土器	羽釜	(25.5)	(11.4)	—	内外面:2.5Y7/1灰白色 外面下部:N3/暗灰	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ハケメ、外面:ユビ オサエのちナデ、鏝は貼り付け、鏝～外面に煤 付着
77	1区集石90	土師器	皿	4.6	1.1	2.9	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
78	1区集石90	土師器	皿	4.85	1.2	2.0	2.5Y8/1灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
79	1区集石90	土師器	皿	5.0	1.1	3.3	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
80	1区集石90	土師器	皿	5.1	1.1	2.0	10YR8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
81	1区集石90	土師器	皿	6.3	1.5	2.4	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:回転ナデ、底面:回転糸切り痕
82	1区集石90	土師器	皿	7.5	1.2	—	10YR7/4にぶい黄橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
83	1区集石90	土師器	皿	8.0	1.5	4.5	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
84	1区集石90	土師器	皿	8.0	1.6	—	7.5YR7/4にぶい橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
85	1区集石90	土師器	皿	8.1	1.2	3.3	7.5YR7/6にぶい橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
86	1区集石90	土師器	皿	8.4	1.4	—	10YR7/4にぶい黄橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
87	1区集石90	土師器	皿	8.1	1.4	—	7.5YR6/6橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
88	1区集石90	土師器	皿	8.2	1.5	5.1	10YR7/4にぶい黄橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
89	1区集石90	土師器	皿	8.3	1.2	5.6	10YR7/4にぶい黄橙色 ～7.5YR6/4にぶい橙色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
90	1区集石90	土師器	皿	8.4	1.3	—	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
91	1区集石90	土師器	皿	8.6	1.4	5.3	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
92	1区集石90	土師器	皿	8.9	1.3	—	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
93	1区集石90	土師器	皿	9.0	1.4	—	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
94	1区集石90	土師器	皿	9.0	1.4	2.8	2.5Y8/2灰白色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
95	1区集石90	土師器	皿	9.0	1.6	—	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
96	1区集石90	土師器	皿	7.4	2.3	—	10YR8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ

No	遺構名	器種	器形	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色 調	胎土	調整、その他
97	1区集石90	土師器	Ⅲ	7.6	2.0	3.5	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
98	1区集石90	土師器	Ⅲ	8.0	2.2	3.1	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
99	1区集石90	土師器	Ⅲ	8.0	2.2	—	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
100	1区集石90	土師器	Ⅲ	8.0	2.0	2.4	2.5Y8/2灰白色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
101	1区集石90	土師器	Ⅲ	10.5	3.0	—	10YR8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
102	1区集石90	土師器	Ⅲ	10.6	3.2	—	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
103	1区集石90	土師器	Ⅲ	(10.6)	2.9	—	10YR8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
104	1区集石90	土師器	Ⅲ	10.8	3.2	—	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
105	1区集石90	土師器	Ⅲ	11.6	2.6	—	10YR7/4にぶい黄橙色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、口縁内外面に油煙付着、内面には灯明芯のような長さ1cm程度の黒色化したものが付着
106	1区集石90	土師器	Ⅲ	11.8	2.3	7.5	10YR7/4にぶい黄橙色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、口縁内外面に油煙付着
107	1区集石90	土師器	Ⅲ	11.8	1.8	8.0	10YR7/2にぶい黄橙色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
108	1区集石90	土師器	Ⅲ	12.0	2.3	—	内外面:5YR6/6橙色、内面下部:2.5Y7/2灰黄色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
109	1区集石90	土師器	Ⅲ	12.1	2.2	5.8	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
110	1区集石90	土師器	Ⅲ	12.2	2.0	9.3	10YR7/4にぶい黄橙色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
111	1区集石90	土師器	Ⅲ	12.4	2.4	6.4	10YR7/4にぶい黄橙色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
112	1区集石90	土師器	Ⅲ	12.6	2.0	7.9	10YR7/3にぶい黄橙色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
113	1区集石90	土師器	Ⅲ	12.8	2.5	—	10YR7/4にぶい黄橙色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
114	1区集石90	土師器	Ⅲ	12.8	1.8	—	5YR6/4にぶい橙色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
115	1区集石90	土師器	Ⅲ	12.9	2.2	—	10YR7/4にぶい黄橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
116	1区集石90	土師器	Ⅲ	13.0	2.3	—	7.5YR6/4にぶい橙色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
117	1区集石90	土師器	Ⅲ	12.4	(3.3)	—	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
118	1区集石90	土師器	Ⅲ	12.5	3.4	—	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
119	1区集石90	土師器	Ⅲ	12.5	3.3	—	2.5Y8/2灰白色～10YR8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
120	1区集石90	土師器	Ⅲ	12.7	3.2	—	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
121	1区集石90	土師器	Ⅲ	12.7	2.7	—	10YR8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
122	1区集石90	土師器	Ⅲ	(12.8)	3.1	(4.5)	10YR8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
123	1区集石90	土師器	Ⅲ	(12.8)	(3.2)	—	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
124	1区集石90	土師器	Ⅲ	12.9	3.1	—	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
125	1区集石90	土師器	Ⅲ	(13.0)	3.1	(5.4)	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
126	1区集石90	土師器	Ⅲ	12.9	3.6	—	10YR8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、内外面に油煙付着
127	1区集石90	土師器	Ⅲ	13.2	3.2	—	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
128	1区集石90	土師器	Ⅲ	(13.4)	2.6	(4.1)	10YR8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
129	1区集石90	土師器	鉢	16.7	13.5	—	10YR7/4にぶい黄橙色	精良	内外面:ユビナデ、内外面下部:ナデ、粘土紐痕が明瞭に残る、底部:ナデ・工具使用の痕跡

No.	遺構名	器種	器形	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色 調	胎土	調整、その他
130	1区集石90	瓦器	椀	(9.6)	2.9	(5.0)	N2/黒色	精良	内面:ミガキのちタテ方向のナデ?、外面:ミガキ・ナデ、外面下部:ナデ・工具痕、底面:ナデ
131	1区集石90	瓦器	椀	(10.0)	3.0	4.9	N2/黒色	精良	内面:ミガキのちタテ方向のナデ?、外面:ミガキ、外面下部:ナデ・工具痕、底面:ナデ 見込みに菊花の暗文
132	1区集石90	瓦器	椀	(13.3)	(3.1)	—	2.5Y4/2暗灰黄色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
133	1区集石90	輸入白磁	皿	(10.9)	(2.3)	—	素地:5Y8/1灰白色、 釉:5Y7/3浅黄色	精良	内外面:回転ナデ、外面下部:回転ケズリ、 内面中央に沈線、釉が白色化している
134	1区集石90	輸入青磁	椀	(14.6)	(4.2)	—	素地:2.5Y6/1黄灰色、 釉:5GY6/1オリーブ灰色	精良	内外面:回転ナデ、外面に蓮弁文
135	1区集石90	輸入青磁	椀	(15.9)	(2.8)	—	素地:7.5Y8/1灰白色、 釉:7.5GY7/1明緑灰色	精良	内外面:回転ナデ、内面に沈線・流水文、貫入が 全面に入る
136	1区集石90	瓦質土器	羽釜脚	—	(2.5)	径 0.6	2.5Y7/1灰白色、 2.5Y5/1黄灰色	精良	ミニチュア土器、丁寧な面取り、底面はユビ オサエ
137	1区集石90	石製品	石鍋	—	(1.8)	—	2.5Y8/1灰白色	滑石	内外面:整形痕、孔は二方向穿孔、孔の中に鉄 製錠とみられる鉄錆が付着
138	1区集石90	須恵器	鉢	(27.1)	10.1	9.5	内外面:2.5Y7/1灰白色 口縁外面:N4/灰色	やや 粗	内外面:回転ナデ、内面下部:使用痕? 磨滅著し い、底面:回転糸切り痕・一部へら起こし痕残る、 接地面は使用のため磨滅、片口あり
139	1区集石90	瓦質土器	羽釜	(22.6)	(12.3)	—	内外面:N4/灰色、内面 下部:2.5Y8/1灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ハケメ・ナデ、 外面下部:オサエ・ナデ、鏝は貼り付け
140	1区集石90	瓦質土器	盤	(27.2)	6.5	(21.4)	内面:10YR6/3にぶい黄 橙色、内面下部・外面: 10YR4/1褐灰色	精良	内外面:ユビナデ、外面下部:オサエ・ナデ、 口縁端部を内面へ折り込む
141	1区集石90	瓦質土器	盤	(40.0)	9.7	—	内外面:2.5Y4/1黄灰色、 外面下部:7.5YR7/4にぶ い橙色、10YR6/2灰黄 褐色	精良	内外面:ユビナデ、外面下部:オサエ・ユビナデ、 底面:糊殻・糞押圧痕
142	1区溝166	輸入青白磁	合子蓋	(6.0)	1.5	—	素地:2.5Y8/1灰白色、 釉:7.5Y7/2灰白色:	精良	内面:回転ナデ、外面:菊花文、内面の釉葉は 端部には及んでいない、貫入している
143	1区土坑120	土師器	皿	(9.1)	(1.5)	—	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
144	1区土坑120	土師器	皿	(13.1)	(2.1)	—	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
145	1区土坑120	土師器	皿	(12.8)	(2.3)	—	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
146	1区土坑120	瓦質土器	羽釜	(20.9)	13.8	10.7	内面:N4/灰色、 外面:2.5Y7/2灰黄色	精良	口縁:ユビナデ、内面下部:ハケメ・オサエ、外面 下部:オサエのちナデ、鏝は貼り付け、鏝~底 部外面に煤付着
147	1区土坑193	土師器	皿	8.2	1.4	—	7.5YR7/4にぶい橙色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
148	1区土坑193	土師器	皿	(11.8)	1.9	—	7.5YR7/4にぶい橙色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
149	1区土坑193	土師器	皿	(11.6)	2.3	—	7.5YR7/3にぶい橙色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
150	1区土坑193	土師器	皿	(12.0)	1.9	—	7.5YR7/4にぶい橙色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
151	1区土坑193	土師器	皿	(13.1)	(3.5)	—	10YR8/3浅黄橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
152	1区土坑193	輸入青磁	皿	(9.2)	(1.9)	—	素地:N7/灰白色、釉: 5GY6/1オリーブ灰色	精良	内外面:回転ケズリ・施釉、内面屈曲部に沈線
153	1区土坑193	瀬戸・美濃 系陶器	皿	(7.9)	2.4	4.0	2.5Y6/2灰黄色	粗	内外面:回転ナデ・自然釉、底面:糸切り痕、貼り 付け高台、接地面に何かの圧痕
154	1区土坑193	瀬戸・美濃 系陶器	椀	(10.6)	4.8	(4.6)	2.5Y7/1灰白色	やや 精良	口縁~内・外面:回転ナデ、内面~外面:自然釉、 外面下部:糸切り痕
155	1区土坑193	瓦器	椀	(13.6)	(3.7)	—	N4/灰色	精良	内外面:ユビナデ・ミガキ、外面下部:オサエ、 口縁端部に沈線
156	1区土坑193	瓦質土器	羽釜	(14.0)	(2.9)	—	N3/暗灰色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ハケメ、外面下部: ユビオサエのちナデ、鏝は貼り付け、鏝~底部 に煤付着
157	1区土坑193	瓦質土器	鍋	(30.2)	(8.0)	—	5Y8/1灰白色~N3/暗 灰色	精良	口縁:ユビナデ、内面:ハケメ、外面:ユビオサエ のちナデ、鏝は貼り付け、鏝~外面に煤付着
158	1区土坑193	須恵器	鉢	(27.8)	(4.2)	—	N5/灰色	やや 良	内外面:回転ナデ
159	1区土坑193	石製品	石鍋	(22.3)	(8.0)	—	10YR8/1灰白色~10YR 7/1灰白色	—	滑石製、口縁~内面:左下から右上への成形痕、 外面上部:時計回りの成形痕、鏝~下部:反時計 回りの成形痕、煤付着

No	遺構名	器種	器形	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	胎土	調整、その他
160	1区土坑193	瓦質土器	火鉢	(30.4)	(7.8)	—	N3/暗灰色	良	内外面:剥離、内面下部:ミガキ
161	1区土坑143	土師器	皿	4.3	1.0	—	10YR8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
162	1区土坑143	土師器	皿	5.1	1.1	—	10YR8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
163	1区土坑143	土師器	皿	6.7	1.9	1.9	10YR8/2灰白色	精良	内外面:回転ナデ、底面:糸切り痕、平高台
164	1区土坑143	土師器	皿	10.2	2.9	—	10YR8/3浅黄橙色	精良	口縁~内面:ユビナデ、外面下部:オサエ
165	1区土坑143	土師器	皿	10.2	3.2	—	10YR8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
166	1区土坑143	土師器	皿	(12.7)	3.1	—	10YR8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
167	1区土坑143	土師器	皿	(12.8)	3.0	—	10YR8/3浅黄橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
168	1区土坑143	土師器	皿	8.1	1.3	—	7.5YR7/3にぶい橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
169	1区土坑143	土師器	皿	8.2	1.6	—	7.5YR7/4にぶい橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
170	1区土坑143	土師器	皿	8.2	1.5	—	7.5YR7/4にぶい橙色	精良	内外面:ユビナデ、外面下部:オサエ、口縁に油煙付着
171	1区土坑143	土師器	皿	8.4	1.3	—	7.5YR7/4にぶい橙色	精良	内外面:ユビナデ、外面下部:オサエ、口縁に油煙付着
172	1区土坑143	土師器	皿	8.4	1.5	—	10YR7/4にぶい黄橙色	精良	内外面:ユビナデ、外面下部:オサエ、口縁内面~外面下部に油煙付着
173	1区土坑143	土師器	皿	(11.6)	2.0	—	7.5YR7/4にぶい橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
174	1区土坑143	土師器	皿	(12.4)	2.1	—	7.5YR7/4にぶい橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
175	1区土坑143	土師器	皿	(12.4)	2.1	—	10YR7/4にぶい黄橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
176	1区土坑143	瓦質土器	鉢	(21.0)	6.9	(5.4)	内面:N3/暗灰色、外面:2.5YR8/1灰白色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
177	1区土坑143	瓦質土器	鍋	23.0	(10.1)	—	内外面:N4/灰色、内外面下部:5Y8/1灰白色	精良	口縁:ユビナデ、内面下部:ハケメ、外面下部:ユビオサエのちナデ、外面に煤付着
178	1区土坑143	瓦質土器	羽釜	20.0	10.4	—	N4/灰色	精良	内外面:ナデ、外面下部:ユビオサエのちナデ、鏝は貼り付け、鏝~底部外面に煤付着
179	1区集石88	土師器	皿	(12.5)	(2.1)	—	10YR8/3浅黄橙色	良	内外面:ユビナデ、外面下部:オサエ
180	1区集石88	土師器	焙烙	(3.3)	(1.3)	—	10YR8/3浅黄橙色	精良	ミニチュア土器、内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
181	1区集石88	輸入白磁	蓋	最大径 7.7	(2.8)	—	素地:N8/灰白色、釉:10Y8/1灰白色	精良	内外面:回転ナデ、頂部に円形粘土を張り付ける
182	1区集石88	瓦質土器	鍋	(24.4)	(7.0)	—	内外面:N3/暗灰色、外面下部:2.5Y8/1灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ハケメ、外面下部:オサエ
183	1区集石93	瓦質土器	火鉢	—	(6.4)	—	N4/灰色	良	内外面:ミガキ、外面に菊花文の印刻
184	2区土坑33	土師器	皿	6.2	1.6	2.5	10YR8/2灰白色	やや粗	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
185	2区土坑33	土師器	皿	6.3	1.9	2.6	10YR8/2灰白色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
186	2区土坑33	土師器	皿	6.3	1.7	2.6	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
187	2区土坑33	土師器	皿	6.1	1.8	2.3	10YR8/1灰白色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
188	2区土坑33	土師器	皿	6.2	1.7	2.6	2.5Y8/1灰白色	良	口縁~内面:ユビナデ、外面下部:オサエ、口縁~外面に油煙付着
189	2区土坑33	土師器	皿	6.2	1.7	2.6	2.5Y8/1灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
190	2区土坑33	土師器	皿	6.3	1.6	2.3	2.5Y8/1灰白色	やや粗	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
191	2区土坑33	土師器	皿	6.4	1.7	2.4	10YR8/1灰白色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
192	2区土坑33	土師器	皿	6.3	1.9	2.5	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ

No.	遺構名	器種	器形	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色 調	胎土	調整、その他
193	2区土坑33	土師器	皿	6.4	1.9	2.8	2.5Y8/1灰白色	やや良	内外面:コビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
194	2区土坑33	土師器	皿	6.5	1.9	2.6	10YR8/2灰白色	精良	内外面:コビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
195	2区土坑33	土師器	皿	6.5	1.8	2.6	10YR8/2灰白色	良	内外面:コビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
196	2区土坑33	土師器	皿	6.6	1.9	2.2	10YR8/1灰白色	精良	内外面:コビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
197	2区土坑33	土師器	皿	7.0	1.7	2.7	10YR8/1灰白色	やや良	内外面:コビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、口縁内外面に油煙付着
198	2区土坑33	土師器	皿	7.3	1.8	3.8	10YR8/1灰白色	精良	内外面:コビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
199	2区土坑33	土師器	皿	7.1	2.5	3.6	10YR8/2灰白色	やや良	内外面:回転ナデ、底面:糸切り痕
200	2区土坑33	土師器	皿	7.1	1.6	—	7.5YR7/4にぶい橙色	やや粗	内外面:コビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
201	2区土坑33	土師器	皿	7.4	1.5	—	7.5YR7/4にぶい橙色	やや粗	内外面:コビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
202	2区土坑33	土師器	皿	7.6	1.5	—	7.5YR8/4浅黄橙色	精良	内外面:コビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
203	2区土坑33	土師器	皿	7.8	1.5	—	10YR7/4にぶい橙色	やや良	内外面:コビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
204	2区土坑33	土師器	皿	7.9	1.6	—	7.5YR7/6橙色	良	内外面:コビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
205	2区土坑33	土師器	皿	7.9	1.4	4.4	7.5YR7/4にぶい橙色	やや良	内外面:コビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
206	2区土坑33	土師器	皿	10.4	2.1	6.5	7.5YR7/6橙色	やや粗	内外面:コビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
207	2区土坑33	土師器	皿	(10.6)	2.0	—	7.5YR7/6橙色	やや粗	内外面:コビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
208	2区土坑33	土師器	皿	(10.9)	2.0	5.9	7.5YR7/6橙色	やや粗	内外面:コビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
209	2区土坑33	土師器	皿	11.0	2.2	6.8	7.5YR7/6橙色	やや粗	内外面:コビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ、口縁内面に油煙付着
210	2区土坑33	土師器	皿	(11.0)	2.2	5.9	10YR8/6浅黄橙色	やや粗	内外面:コビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
211	2区土坑33	土師器	皿	11.1	2.5	—	10YR8/2灰白色	やや良	内外面:コビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
212	2区土坑33	土師器	皿	11.2	2.9	5.1	2.5Y8/1灰白色	やや粗	内外面:コビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
213	2区土坑33	土師器	皿	(11.3)	2.9	4.4	10YR8/1灰白色	良	内外面:コビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
214	2区土坑33	土師器	皿	11.3	2.8	4.7	10YR8/2灰白色	やや良	内外面:コビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
215	2区土坑33	土師器	皿	11.2	2.8	4.0	10YR8/2灰白色	やや良	内外面:コビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
216	2区土坑33	土師器	皿	11.4	3.0	—	10YR8/2灰白色	精良	内外面:コビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
217	2区土坑33	土師器	皿	11.4	3.0	5.5	10YR8/2灰白色	良	内外面:コビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
218	2区土坑33	土師器	皿	11.5	3.1	5.9	2.5Y8/1灰白色	精良	内外面:コビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
219	2区土坑33	土師器	皿	11.5	3.1	—	10YR8/2灰白色	良	内外面:コビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
220	2区土坑33	土師器	皿	11.9	2.8	—	10YR8/2灰白色	やや粗	内外面:コビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
221	2区土坑33	輸入白磁	皿	(11.0)	(2.2)	—	素地:N8/灰白色、 釉:10Y7/1灰白色	精良	内外面:回転ナデ・施釉、口縁内面:釉剥ぎ
222	2区土坑33	輸入青磁	椀	(14.0)	(3.7)	—	素地:7.5Y7/1灰白色、 釉:5Y5/3オリーブ灰	精良	内外面:回転ケズリ、口縁上部:釉ハギ、内面～外面:施釉
223	2区土坑33	土師器	焙烙	4.5	1.6	—	10YR8/4浅黄橙色	精良	ミニチュア土器、内外面:コビナデ、内面下部:ナデ、外面下部:オサエ
224	2区土坑33	土師器	羽釜	(4.1)	(2.6)	—	2.5Y8/1灰白色	やや良	ミニチュア土器、内外面:コビナデ、外面下部:オサエ・ナデ、鏝は貼り付け
225	2区土坑33	土師器	羽釜	(10.0)	(2.5)	—	10YR8/2浅黄橙色	精良	ミニチュア土器、内外面:コビナデ、外面下部:オサエ・ナデ、鏝は貼り付け

No	遺構名	器種	器形	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	胎土	調整、その他
226	2区土坑33	土師器	羽釜	(8.0)	(2.8)	—	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	ミニチュア土器、内外面:ユビナデ、外面下部:オサエ・ナデ、鏝は貼り付け
227	2区土坑33	輸入陶器	鉢	(29.4)	(9.9)	(23.8)	素地:5Y6/1灰色、 釉:5Y5/3灰オリーブ色	やや粗	内外面:回転ナデ、内面～外面上部:黄釉を施す、 底面:ヘラ切り痕
228	2区土坑33	瓦質土器	羽釜	(22.4)	(7.9)	—	内外面:N3/暗灰色、 下部:2.5Y7/1灰白色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ハケメ、外面下部: ユビオサエのちナデ、鏝は貼り付け、鏝～外面 下部に煤付着
229	2区土坑33	石製品	石鍋	(27.6)	(6.4)	—	10YR8/1灰白色～ 10YR7/1灰白色	—	滑石製、口縁～内面:時計回りの整形痕、横方向 の擦痕、外面上部:反時計回りの整形痕、鏝～下 部:時計回りの整形痕、内面に横方向の擦痕
230	2区土坑59	土師器	皿	(7.2)	1.2	5.1	10YR8/3浅黄橙色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ、底面:糸切り痕
231	2区土坑59	土師器	皿	(7.8)	1.6	—	10YR7/4にぶい橙色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
232	2区土坑59	土師器	皿	(8.2)	1.3	4.8	5YR6/6橙色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
233	2区土坑59	土師器	皿	(8.9)	1.4	—	7.5YR6/6橙色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
234	2区土坑59	土師器	皿	(11.6)	(2.8)	—	2.5Y8/2灰白色	精良	内外面:ユビナデ、外面下部:オサエ
235	2区土坑59	土師器	皿	(13.6)	2.3	8.0	10YR7/4にぶい橙色	良	内外面:ユビナデ、内面下部:ナデ、外面下部: オサエ
236	2区土坑59	輸入青磁	皿	(9.6)	(1.8)	—	素地:2.5Y6/2灰黄色、 釉:7.5GY6/1緑灰色	精良	内外面:回転ナデ・施釉
237	2区土坑59	輸入白磁	皿	(11.1)	2.8	(6.2)	素地:白色、 釉:10Y8/1灰白色	精良	内外面:回転ナデ・施釉、口縁端部:釉剥ぎ、外 面下部:ケズリ
238	2区土坑59	輸入白磁	壺また は水注	(8.7)	(2.4)	—	素地:5Y7/1灰白色、 釉:7.5Y7/2灰白色	良	内外面:回転ナデ・施釉
239	2区土坑59	輸入染付	椀	—	(2.8)	—	素地:白色、 釉:N8/灰白色	精良	内面文様:雷文、二重圏線、外面文様:果実・鳥
240	2区土坑59	輸入陶器 華南三彩	鉢	—	(2.9)	—	素地:2.5Y7/3浅黄色、 釉:緑色	粗	内外面:回転ナデ・施釉
241	2区土坑59	須恵器	鉢	—	(3.3)	—	N4/灰色	やや粗	内外面:回転ナデ
242	2区土坑59	須恵器	鉢	(25.2)	(4.3)	—	N4/灰色	やや粗	内外面:回転ナデ
243	2区土坑59	瓦質土器	羽釜	—	(4.0)	—	N3/暗灰色	精良	内外面:ユビナデ、外面下部:ユビオサエのちナ デ、鏝は貼り付け
244	2区土坑59	瓦質土器	鍋	(29.0)	(4.8)	—	内面:N5/灰色、 外面:N3/暗灰色	精良	内外面:ユビナデ、内面下部:ハケメ、外面下部: ナデ
245	2区土坑59	常滑	甕	—	(8.8)	—	7.5YR5/2灰褐色	やや粗	内外面:回転ナデ
246	2区土坑59	須恵器	甕	(27.0)	(5.5)	—	内外面:N8/灰白色、 外面下部:N5/灰色	やや良	内外面:ナデ、内面下部:磨滅、外面下部:格子目 タタキ

付表2 出土瓦類観察表

No	遺構名	種類	文様	高さ (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	色調	胎土	調整、その他
247	中世包含層	軒丸瓦	巴文	(4.55)	(4.4)	2.6	N4/灰色	やや粗	凸面:縦ケズリ、瓦当裏面:ナデ
248	中世包含層	軒平瓦	三巴文	(2.95)	(4.0)	1.7	2.5Y8/2灰白色	やや良	凹面:欠損、顎部下部:横ケズリ、顎部裏面: 横ナデ、凸面:縦ケズリ
249	集石88	軒平瓦	剣頭文	(4.3)	(3.65)	1.4	2.5Y7/2灰黄色、 5Y5/1灰色	やや粗	凹面:横ナデ、顎部下部:横ナデ、凸面:縦 ケズリ
250	集石88	軒平瓦	剣頭文	(3.6)	(7.5)	1.6	2.5Y7/2灰黄色、 5Y5/1灰色	粗	凹面:布目ナデ消し・横ナデ、顎部下部:横 ケズリ、凸面:縦ケズリ
251	集石148	軒平瓦	三巴文	(9.7)	(7.0)	1.9	N3/暗灰色	精良	凹面:布目・横ナデ、顎部下部:横ケズリ、 顎部裏面:横ナデ・オサエ、凸面:縦ケズリ のちナデ・ヘラ記号(2本沈線)
252	集石148	丸瓦 (玉縁部)	—	(5.7)	(5.2)	1.9	5Y5/1灰色	精良	凸面:横ナデ、側縁:縦ケズリ、端面:横ケ ズリのち「○」刻印、凹面:布目・横ナデ
253	集石109	埴	—	縦 (9.2)	横 (7.1)	厚さ 4.2	2.5Y6/1黄灰色	やや粗	全面:縄目、表裏面の中央が窪む

付表3 出土土製品・ガラス製品・石製品・金属製品観察表

No.	遺構名	種類	材質	寸法 (cm)	重さ (g)	備考
254	中世包含層	玉	土	径3.5、厚さ2.75	13.874	合わせ型による整形、中央の帯部分に粘土つなぎ合わせ痕
255	中世包含層	錘	土	残存長3.0、径0.95、孔径0.35	2.038	ナデかミガキによる不明瞭な面取り、孔は棒巻き付けによる
256	中世包含層	錘	土	長さ2.75、径1.2、孔径0.25	3.742	ナデ?による面取り、孔は棒巻き付けによる
257	整地層107	玉	ガラス	径0.6、孔径0.17	0.140	外面は被熱で剥離および白色化、色調は青色
258	集石90 (図9-2層)	硯	緑色粘板岩	長さ12.8、幅8.25、厚さ2.15	—	色調5Y5/2灰オリーブ色、硯面に整形痕と研磨痕、その他は研磨痕、側面上部が欠損、側縁と硯面の間に溝状の浅い窪みが周回
259	柱穴226	硯	粘板岩	長さ11.8、幅7.05、厚さ1.55	—	色調7.5Y5/2灰オリーブ色、全面に整形時の研磨痕、墨堂中央が挿鉢状にくぼむ、硯面および硯背側面近くに使用痕の細かい擦痕
260	溝157	硯	砂岩	残存長3.2、幅6.9、厚さ1.1	—	色調10Y4/2オリーブ灰色、硯面に使用痕および墨堂中央に楕円形の硯池、周縁に研磨痕、硯池側が欠損または分割
261	土坑193	砥石	泥岩	長さ5.3、幅3.15、残存厚1.2	—	色調5Y8/3淡黄色、表面：使用痕、裏面：使用痕・一部欠損、上側面：欠損、下側面・左右側面：整形痕
262	柱穴257	砥石	泥岩	長さ5.4、幅3.5、残存厚0.7	—	色調7.5YR6/8橙色、表面・側面：使用痕または研磨痕、裏面：剥離
263	集石91	五輪塔 (火輪部)	凝灰岩	残存長18.9、厚さ10.8	—	色調2.5Y8/1灰白色、上部と下部中央にホゾ穴に相当する窪みあり、丁寧に面取りする、約2/3以上欠損
264	集石92	銭貨	銅	残存径2.0、厚さ0.16	1.887	「皇宋通寶」、真書、北宋銭 (1038年鑄造)、周縁がなくなっている
265	集石90 (図9-4層)	銭貨	銅	残存径2.5、厚さ0.11	2.455	「皇宋通寶」、真書、北宋銭 (1038年鑄造)
266	集石90 (図9-11層)	銭貨	銅	残存径2.55、厚さ0.12	3.139	「熙寧元寶」、真書、北宋銭 (1068年鑄造)
267	中世包含層	銭貨	銅		5.550	「元豊通寶」、行書、北宋銭 (1078年鑄造)、2枚が溶着、二次的に火を受けている
268	集石90 (図9-1層)	金具?	鉄	残存長5.1	10.741	全面錆に覆われている、コ字形の鏝か?
269	集石90 (図9-6層)	釘	鉄	残存長1.9	1.109	上部折損、先端が曲がっている
270	集石90 (図9-13~22層)	釘	鉄	長さ3.0	2.076	全面錆に覆われている、頭部がL字に曲がる
271	集石90 (図10-49層)	釘	鉄	残存長4.45	4.544	全面錆に覆われている
272	集石90 (図10-49層)	釘	鉄	残存長6.5	10.246	全面錆に覆われている、頭部はT字形、断面は折損時に確認
273	集石90 (図9-7層)	釘	鉄	残存長3.5	0.883	上部折損
274	集石90 (図9-1層)	釘	鉄	残存長3.25	3.511	木質が残存、頭部がL字に曲がり、頭頂部が丸い、飾り釘か?
275	集石91	釘	鉄	残存長5.45	7.350	頭部以外は錆に覆われている、先端が曲がる
276	集石91 (図10-49層)	釘	鉄	残存長5.65	6.543	全面錆に覆われている、断面は折損時に確認
277	集石90 (図10-32・36層)	釘	鉄	残存長5.9	9.278	全面錆に覆われている
278	集石114	鉄滓	鉄	最大長12.0、最大厚3.8	590	中央が窪み面をなす、側面にも面がある、それ以外は気泡が多く石や砂が付着する

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	しらかわがいくあと・よしだかみおおじちょういせき							
書名	白河街区跡・吉田上大路町遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2011-3							
編著者名	近藤奈央							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2012年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しらかわがいくあと 白河街区跡 よしだかみおおじちょう 吉田上大路町 いせき 遺跡	きょうとしさきょうく 京都市左京区 よしだこのえちょう 吉田近衛町 (このえちゅうがっこうない) (近衛中学校内)	26100	417 400-4	35度 01分 17秒	135度 46分 46秒	2011年8月 31日～2011 年11月11日	333m ²	プール 改修工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
白河街区跡 吉田上大路町 遺跡	寺院跡 邸宅跡	縄文時代		縄文土器	鎌倉時代後期から 室町時代前期の敷 地境界とみられる 集石遺構や、礫や 遺物が大量に入れ られた土坑などを 検出し、寺院また は宅地跡と推定。 また、縄文時代か ら古墳時代の遺物 が出土。			
	集落跡	弥生時代		弥生土器				
		古墳時代		須恵器				
		平安時代		土師器、須恵器、輸入 磁器、瓦など				
		鎌倉時代 ～室町時代	柱穴、集石、土坑、 溝など	土師器、須恵器、瓦器、 瓦質土器、施釉陶器、 焼締陶器、輸入陶磁器、 瓦、土製品、ガラス製 品、石製品、銭貨、鉄 製品など				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-3
白河街区跡・吉田上大路町遺跡

発行日 2012年1月31日

編集行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961